

靈界物語 第六九卷 山河草木 申の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六十九卷』天聲社

1971(昭和46)年06月01日 第二刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

第四章 國くにの光ひかり〔一七四九〕

第五章 性明せいめい〔一七五〇〕

第六章 背水會はいすあくわい〔一七五一〕

第二篇 愛國あいこくの至情しじやう

第七章 聖子せいし〔一七五二〕

第八章 春乃愛はるのあい〔一七五三〕

第九章 迎酒むかへざけ〔一七五四〕

第一〇章 宣兩せんりやう〔一七五五〕

第十一章 氣轉使きてんし〔一七五六〕

第一二章 惡原眠衆あしはらみんしう〔一七五七〕

第三篇 神柱國礎しんちうこくそ

第一三章	國別 <small>こくべつ</small>	〔一七五八〕
第一四章	暗枕 <small>やみまくら</small>	〔一七五九〕
第一五章	四天王 <small>してんわう</small>	〔一七六〇〕
第一六章	波動 <small>はどう</small>	〔一七六一〕

第四篇 新政復興しんせいふくこつ

第一七章	琴玉 <small>ことたま</small>	〔一七六二〕
第一八章	老狼 <small>らうばい</small>	〔一七六三〕
第一九章	老水 <small>らうすゐ</small>	〔一七六四〕
第二〇章	聲援 <small>せいゑん</small>	〔一七六五〕
第二一章	貴遇 <small>きぐう</small>	〔一七六六〕
第二二章	有終 <small>いうしゆう</small>	〔一七六七〕

〔 〕

卷頭言

吾々が現代において最も蟲の好かない嫌ひな者は澤山にある。先づ第一に借金の取りの矢の催促、次に絹足袋をはいて歩きまはる商店の丁稚、知つたか振りをして英語交りの會話をやる奴、婆アの眉毛造りに、ハイカラ青年の赤いネクタイ、白頭爺の鍋墨顔、女學生の巻煙草、風呂の中の葱節、眼鏡越しに光つた眼をして人の面を下から上に覗くやうに見上げる奴、可笑しくもないのに、幫間的追従笑ひをする奴、箱根越えずの江戸つ兒を用ゐる奴、豹や狐の皮の首巻をする女等、數限りもなく嫌ひな者がある中に、最も蟲の好かぬのは、現代の政治家、宗教家の唱ふるところの信教の自由を壅塞する時代遅れの宗教法案等である。因循姑息と時代錯誤と、頑迷無智と不親切と、偽善生活、厚顔無恥、沒常識等をもつて充たされた連中が、萬世一系天壤無窮の神國の國政を料理しようとするのだからたまらない。憲政の逆轉か時代の錯誤か、時勢の要求か知らないが、今日の清浦内閣の顔觸れをみると、田舎の町はづれの方にありさうな八百屋店の、干からびた

かぼちやきうりだいこんかぶら
南瓜胡瓜大根蕪のやうな、到底中流の家庭の料理にも適せない、味の悪い齒切れ
のしない難物ばかりである。しかしながら吾々は政治家でないから、却つてかう
いふ内閣が出来たのが時代に相應してゐるのかも知れない。あるひは天意である
かも分らない。政治圏外に在る吾々はただ表面から見ただけの事をいふまでだ。
それよりもこの時代に當つて精神的文明を鼓吹し、國民信仰の中心とならねばな
らぬ宗教家の現状を見ると、これまた日暮れて道いよいよ遠しの感に打たれざる
を得ないのである。排他と猜疑と身勝手、自己愛と嫉妬より外に知らない圓頂緇
衣の徒や、アーメンの先生たちは何をしてゐるのであらうか。普選案が通過する
とか、即行されるとかいふ噂を聞きかじつて、佛敎家も牧師連も神職も教育家も、
全部手に唾して、逐鹿場裡に立つて出ようとすゝる形勢が仄見えてゐるやうだ。僧
侶や牧師などは特に政治以外に超然として神佛の敎を説き、國民を教化してこそ
宗教家の權威が保たれるのでないか。もし過つて宗教家が薬罐頭に湯氣を立て、
捺鉢巻で選挙場裡に立つやうなことがありとすれば、それこそ信仰上の大問題で
ある。壇家は嫉視反目し、信者は黨を作り、宗教家を敵視するやうになり、信仰

の中心人物を失つてしまふ。さうすれば従つて神佛の權威も失墜し、信仰の中心、思想の眞柱を失ふ道理だ。吾人は思ふ、たとへ普選案が通過し、宗教家や教育家に被選舉權が與へられたにしても、かかる俗界の仕事は俗人輩に任して、超然的態度を執つて欲しいものだ。

しかしながら翻つて宗教界の裏面を考へてみれば、超人間的宗教家は金の草鞋で日本全國を探しても、滅多に有りさうにもない。種々の惡思想の洪水が氾濫して、ヒマラヤ山上を浸さむとする今日の場合、釋迦、キリスト、マホメツト、孔子に老子、小にしては空海、日蓮、親鸞、法然その他高僧知識と呼ばれる連中を一つに圓め、團子にして喰ふやうな宗教界の偉人が現はれて來なくては、到底この人心の惡化を救ふことは出來ぬであらう。吾人は數十年間各宗教家を漁つて、超人間的人物を搜してみたが、寡聞寡見の吾々には到底求むる事を得なかつた。そこで、信仰に國境はないといふ點から、米國のバハイ教を研究し、朝鮮支那の新宗教を研究して、この現代の世界を救ふべき眞の宗教家はないかと探しつつあるのだ。腐敗墮落と矛盾とに充たされた現代の暗黒社會には、たうてい大宗宗教家、

大理理想家は現はれさうにもない。しかしながらどつかの山奥には、天運循環の神律によつて一人や半人ぐらゐは現はれてをりさうなものだ。

今年（ことし）は甲子更始（きのえねかうし）の年（とし）である。この葦原（あしはら）の瑞穂國（みづほのくに）（全地球（ぜんちきう））のどつかには、一大聖人（せいじん）が現（あら）はれるか、または太陽（たいやう）、大地（たいち）、太陰（たいいん）を串團子（くしだんご）となし、星（ほし）の胡麻（ごま）をかけて喰（く）ふやうな大豪傑（だいがうけつ）が現（あら）はれて來（き）さうなものだと思（おも）ふ。さうでなくては到底（たうてい）この無（む）明暗（やうあん）黒（こく）な世界（せかい）を救（すく）ふことは出（で）來（き）ないと思（おも）ふ。吾人（ごじん）は本年（ほんねん）甲子（きのえね）よりここ數年（すうねん）の間に（あひだ）おいて、たしかに斯世（このよ）を天國（てんこく）淨土（じやうど）に進（しん）展（てん）せしむべき一（いち）大偉人（だいいじん）の出現（しゆつげん）することを固（かた）く信（しん）じ、神佛（しんぶつ）を念（ねん）じて、待（ま）つてゐるのである。吾人（ごじん）が前陳（ぜんちん）の理（り）由（ゆう）に依（よ）つて、バハイ教（けう）と提携（ていけい）し、あるひは支那（しな）朝鮮（てうせん）の新進（しんしん）宗教（しうけう）と握手（あくしゆ）したのも、決（けつ）して現代（げんだい）の宗教（しうけう）家（か）のごとく自教（じけう）を擴張（くわくちやう）せむためでもなく、ただ單（たん）に我（わ）が國家（こくか）の前途（ぜんと）を憂（うれ）へ、世界（せかい）平和（へいわ）と人類愛（じんるゐあい）のために盡（つく）さむとする眞心（まごころ）に外（ほか）ならぬのである。惟（かむ）神靈（しんりやう）幸（ち）倍（ばい）坐（ま）世（せ）。

大正十三年一月十五日（舊十二年十二月十日）

月の歎かひ

吾は淋しき冬の月

下界を眺め大空に

涙の顔を曇らして

獨り慄へる悲惨さよ

濱の眞砂の星の數

銀河の岸につどへども

吾まつ星は一つだになし

いづれの星もことごとく

月の出ぬ夜を楽しむか

吾は淋しき冬の月

涙かくして大空に

ひとり 慄へる 悲惨さよ
大地一面草や木の
梢こずえに 遍あまねく おく霜しもに
冷つめたき宿やどを 求もとめつつ
千々ちぢに 心こころを 碎くだくかな

吾われは 淋さびしき 冬ふゆの 月つき
御空みそらに 高たかく 打うち 慄ふるひ
下界げかいは るかに 見渡みわたせば
吾わが 宿やどる べき 池水いけみづは
雪ゆきや 氷こほりに 鎖とみされて
映うつる 術すべなき 悲惨ひさんさよ

杜鵑ほととぎす

吾われは深山みやまの杜鵑ほととぎす

降ふりみ降ふらずみ五月さつきの空そらを

さまよひながら聲こゑ噎からし

友ともを求もとめて泣なき叫さけぶ

アアうらめしや照てる月つきを

深ふかく包つつみし天津空あまつそら

吾われは深山みやまの杜鵑ほととぎす

八千はっせん八や聲こゑ鳴なき暮くらし

血ちを吐はく思おもひの最さい後ごの聲こゑも

月つきがないたと言いはれてる

ほんに切せつない吾わが思おもひ

だいじふはちうわじままる
第十八宇和島丸

ふねのいましんかうはとば
船の今神港波止場を出でむとし

を惜しみみおく
惜しみ見送る八人乙女等

あてびと
艶人の波止場に立ちて振る比禮に

なみだ
涙にしめる風のさやれる

かんばん
甲板に立ちて波止場の見えぬまで

くびまき
首巻振りて別れを惜しむ

なみ
波の音船の響きもおだやかに

すべ
迂り行くなり瀬戸の内海

キラキラと夕日に映ゆる波の上を

こころしづか
心静かに進む楽しさ

すめかみ
皇神の深きめぐみは瀬戸の海

なみて
波照る今日の麗しきかな

紫の波の中より抜き出でて

永久に静けき淡路島山

夕日影波を照らして明石瀉

馳せ行く汽車の影の床しさ

東路の地のさわぎを餘所にして

静かに浮ぶあはぢ島山

照る波の宇和島丸に身をあづけ

心うきうき進む今日かな

窓開けて船の外面を眺むれば

胡蝶のごとき白帆漂ふ

淡路島呼べば答ふるばかりなる

磯邊をかすりて船の行くなり

天地も波も静けき船の上に

いと騒がしく八重の子鳥啼く

淑よき人ひとの送おくり來きたりし神かう戸べ港かうは

遠とほくかすみぬ心こころ淋さびしも

照てり渡わたる波なみのあなただに淋さびしくも

ひとり浮うかべる一つ松まつ島しま

牛うし島しまの影かげ目めに入いりて吾わが胸むねは

いとどかなしく成なりまさり行ゆく

ためしなき静しづけき海うみに浮うかびつつ

過すぎし昔むかしを思おもひうかぶる

九ここのとせ年前まへに開ひらきし神かみ島しまは

昔むかしながらに吾わが身み老おいぬる

瀬せ戸との海うみ隈くまなく晴はれて鷗かもめ飛とぶ

波なみはてるてる船ふねは良よく行ゆく

甲かん板ばんに立たち出でて海うな原はら見み渡わたせば

魚ぎ鱗りんの波なみに夕ゆふ日ひ輝かがやく

常つねになき波路なみぢと聞きけど甲板かんばんは

やはり冷つめたき風かぜの吹ふき來くる

八重やへの波なみおしわけ進すすむこの船ふねは

如何いかなる人ひとの造つくりしなるらむ

七人しちにんの男子をのこ女子をみなの一行いっかうが

俱ともにのり行く神かみの方舟はこぶね

波なみの音船おとふねのどよめき餘所よそにして

鳴なり渡わたるかな蓄音器ちくおんきの聲こゑ

十二夜じふにやの月つきの光ひかりを浴あびながら

浮世うきよの瀬戸せとの海渡うみわたるかな

冬ふゆの日ひの寒さむさも知らぬ船室せんしつに

一夜いちやを送おくりぬ瀬戸せとの海原うなばら

荒あるかと豫かねて思おもひし波なみの上うへ

いとも静しづかに越こゆる内海うちうみ

蓄音器鳴りを鎮めてあとしばし

波の話^{なみ はなし}を打ち解^{うと}け語^{かた}る

十二夜の月^{じふにや つき}は波間^{なみま}に碎^{くだ}けつつ

火龍^{くわりう}となりて海原^{うなばら}に躍^{をど}る

月寒^{つきさむ}く御空^{みそら}にふるひをののきて

星^{ほし}のまたたき清^{きよ}き海原^{うなばら}

十二月^{じふにぐわつ}十二月^{じふに}の月影^{つきかげ}浴^あびながら

水^{みづ}の御魂^{みたま}ぞ初^{はつと}渡^{たか}航^{かう}する

十二月^{じふにぐわつ}十二月^{じふに}の空^{そら}に瀬戸^{せと}の海^{うみ}

乗^のり行^ゆく火^ひ伏^ぶせ水^{みづ}の大^{おほ}神^{かみ}

たまさかの船^{ふね}の旅路^{たびぢ}に空^{そら}晴^はれて

立^たちもさわがぬ瀬戸^{せと}海の浪^{なみ}

空^{そら}はれて銀波^{ぎんば}ただよふ瀬戸^{せと}の海^{うみ}

のり行^ゆくわれぞ樂^{たの}しかりけり

煙突えんとつの黒煙空こくえんそらに蜓々えんえんと

風かぜに伸のび行ゆく龍りうの如ごとくに

吾わが船ふねの黒煙空こくえんそらをかすめつつ

月つきのおもてを包つつみつつ行ゆく

一ひとつ星波ほしなみの上へ近ちかくまたたきて

月つきをも待またで沈しづまむとぞする

西にしへ行ゆく月つき逐おはむとや吾わが船ふねは

波なみを蹴け立ててひた走はしり行ゆく

われ一人ひとりただわれ一人ひとり寒さむき夜よに

宿やどを立たちいで月つきに歎なげきぬ

月つき一つ御空みそらにふるひ地ちに一人ひとり

友ともなくふるふ吾われぞわびしき

空そらの月つき何をふるふか瑞みづの月つき

今いま海上かいじやうにあり近ちかく語かたりね

月つき清きよく大空おほぞら寒さむく星ほし晴はれし

波路なみぢをすべにふねる船ふねの長閑のどかさ

夜よもつきすがら月つきを友ともとし甲板かんばんに

立たちつふかつおも深ふかき思おもひしづに沈しづむ

燈臺とうだいの光ひかり目め當あてすすに進すすみ行ゆく

宇和島丸うわじままるの勇いさましきかな

島しまの影かげ波なみのまにまににう浮うき出いでて

静しづけよるき夜よるを淋さびしく送おくる

二ふたつ三みつ島しま影かげ見みえて海うみの音おと

一ひと入しほ高たかく鳴なり響ひびきつつ

波なみの音おといと高たか々と聞きこえけり

磯邊いそべに船ふねの近附ちかづきしならむ

あどけなき小娘こむすめ共ともに船ふねの旅たび

いとさわがしく海原うなばらすすむ

淑よき人ひとと手てをとり寒さむき甲板かんばんに

立たちて御空みそらの月つきを偲しのばゆ

月つき照てれる甲板でつきの上うへに汝なと二人ふたり

静しづかに立たてば鷗かもめ啼なくなり

若わかやぎて昔むかしの吾われに還かへりつつ

月げ下の甲板でつきに二人ふたりたたずむ

よき人ひとと二人ふたり甲板でつきにたたずめば

沖おきのかもめが千代ちよ千代ちよと啼なく

月つき一つ吾わが船ふね一つ甲板かんばんに

二人ふたりたたずみ風かぜを浴あびたり

吾わが友とものいねたるすきに起おき出いでて

意い中の月つきと甲板かんばんに立たつ

小夜さよ更ふけてかもめの聲こゑも静しづまりぬ

されどさやぎぬ意い中の月つきに

アアぬくいぬくいと窓まどにかけよつて

硝子がらすなめつつビスケット食くふ

一等室いっとうしつ吾わが一行いっかうに交まじはりて

狸老爺たぬきおやぢがただ一人居ひとりゐる

このやうな低ひくい所ところに電燈でんとうが

あるかと思みれば禿はげチヤンの天窓あたま

汽笛きてきの音ねいと高松たかまつにつきにけり

時ときしも既すでに午後ごごの九時前くじまへ

甲板かんばんに人ひとの足音あしおとしげくなりて

仲仕なかしの聲こゑも高松港内たかまつかうない

クナビーノ相手あひてとなして相撲取すまうとれば

あまり力ちからの入いれどころ無なし

瀬戸せとの海黄金うみがねの波なみをかきわけて

寶たからの舟ふねをやるぞ樂たのしき

小舟二隻またたく間に覆し

一伏したる瀬戸の荒浪

吾がのれる船は多度津の濱近く

なりて一入波音たかし

昨日より晴れ渡りたる港さへ

矢張世人は今治と言ふ

伊豫高濱上陸

吾がのれる宇和島丸は午前七時半

無事高濱に月汐の空

信徒の誠心こめて迎へたる

波止場の景色いと賑はし

松山城 まつやまじやう

松山城山の尾の上にそそり立ち

吾待ち顔に見ゆるおもほゆ

君が代のいづの榮えを松山の

空にそびゆる天守閣あはれ

道後公園 だうごこうえん

めづらしき岩石樹木おき竝べ

清く築ける貴の公園

松山の金龜の城を背景に

広く造れる道後公園

山水の粹をあつめし道後の
珍の公園見るもさやけき

道後温泉

久方の天津日の御子の天降りまして

憩はせ玉ひし貴の御室かな

艶人も浮世の衣を脱ぎ捨てて

赤裸々となり靈肉洗ふ

神靈の湯にひたりつつ信徒と

楽しく遊ぶ道後公園

浮き沈み七度八度のり越えて

裸の大丈夫神靈を洗ふ

神かみの湯ゆや靈湯たまゆの札ふだを賣うりひさぐ
これこの館やかたの麗うるはしきかな
天地あめつちの神かみの恵めぐみの最いとふかき
道みちの後しりなる神かみの湯ゆに浴いる

たちまちに四人よにんの記者きしやに取とりまかれ
おもはず費つひやす貴うづのタイムを
數十すうじふにん人うづ珍うづのまめ人ひとあつまりて

いと新あたらしく語かたり合あふかな
洋服やうふくや和装わさうの記者きしやが訪おとづれて
和洋折衷わやうせつちうの談話だんわ交かはしつ

岡をかの上へにいらかも高たかくかがやきて

道後見下ろす阿房宮かな

又しても二人の記者が訪れて

吾がスタイルを怪しげに見る

野も山も春めき初めて湯煙の

いと緩やかに立ち昇りつつ

冬ながら春の景色の漂へる

道後の花は城山公園

一生の願ひ叶うて和田の原

の乗りこえ來にし道後温泉

室外は春の光りの見えながら

窓を開けば冷風來たる

吾が姿カメラに入りて夕刊の

紙面に早くも立ちにけるかな

寫眞班道後ホテルに訪ね來て

カメラに吾を収め歸りぬ

感想は如何豫言はいかにぞと

五月蠅く打出す記者の言靈

宇宙間恐るるものは無けれども

神の誠の道に恐るる

排他的既成宗教はあとにして

開き行かなむ海の外まで

自然愛自己愛而已の現代に

何を語るも聞く人は無し

敗残の大本なりと見縊りて

訪ひ來る記者のけげん顔かな

日に月に權威の重なる大本を

誤解してゐる記者のをかしさ

凝神著書澄懷觀道。

晴耕雨讀。

凝神著書澄懷觀道の床の間の

掛軸吾にふさはしくおもふ

大小の島々あまた漂よへる

瀬戸のながめは天津神國

常磐木の茂り合ひたる浮島に

胡蝶のごとく信天翁飛ぶ

眞帆片帆往き交ふ状は天國の

珍の景色の俣ばるるかな

年十二月また十二月も十二

合はせて三六の今日の船出で

大正十二年舊曆十二月十三日

於道後ホテル三階

第一篇 清風涼雨

第一章 大評定（一七四六）

太平大西兩洋にまたがり、常世の波をせきとめて、割つた屠牛の片脚のやうに
ブラ下つてゐる南米大陸は、春夏はあつても秋冬の氣候を知らぬ理想的の天國で
ある。大洋より絶えず吹き來たる清風は、鹽分を含んで土地をますます豊饒なら
しめ、人頭大の果實は隨所に豊熟し、吾人が坐して尚あまりある如き數多の花は
四方に咲きみだれ、數萬種の藥草は至るところの山野に芳香を放つて繁茂し、ア
マゾン河におち込む數千の支流には數十萬種の魚族が棲息し、山には金銀銅鐵石
炭等の鑛物を豊富に包藏し、特に石炭の産額は全世界に其比を見ざるところであ
る。しかしながら現今は未だ充分に採掘の方法が備はつてゐないので、あたら寶
庫を地に委してゐる次第である。

アンデス山脈は高く雲表に聳え、海拔一萬四五千尺より三萬尺の高地である。そして山の頂には狭くて十里、廣きは數十里に亘る高原が展開してゐる。樹木の數も我が國より見ればなかなか多い。またブラジル國を流るアマゾン河の川幅は、日本全國を縦に河中に放り込んでも、まだ餘るやうな世界一の大河である。特にペルウ、ブラジル、アルゼンチン等の原野には、日本の柿の木やうな綿の木が所どころに天然に繁茂し、青、黄、赤、紫、白等自然の色を保つた綿が年中梢にブラ下つてゐる。また竹のごときも日本内地のすすき株のやうにかたまつて生え、太さは横に切つて、棺桶や手桶が造れるくらゐである。落の如きは一枚の葉の下に十人くらゐ集まつて雨を凌ぐことが出来るやうなのがある。牛馬羊豚などは際限もなき原野に飼ひ放しにされてゐるが、それでも持主はめいめい定まつてゐる。味の良き苺やバナナ、無花果などは少し低地になると厭になるほど澤山に出来てゐる。そして猿に鹿、野猪などは白晝公然と人家近くよつて来て平氣で遊んでゐる。鷹のやうな蝶や蝙蝠、また蜂のやうな蝶子、雀のやうな蜂、拳のやうな蠅が風のまにまに群をなしてやつて來ることもある。すべてが大陸的で日

本人の目から見れば實に肝を冷すやうなこと計りである。しかしながら瑞月は伊豫の國道後温泉のホテルの三階に横臥したまま目に映じたことを述べたに過ぎないから、あるひは間違つてゐるかも知れない。南米の事情に詳しく人がこの物語を讀んだならば、始めてその虚實が分るであらう。ただ靈眼に映じたままを述べたに過ぎない。

三五教の宣傳使國依別命が、神素盞鳴大神、言依別命の命に依り、瑞の御靈の大神が八人乙女の末女末子姫に娶ひて、アルゼンチンの珍の都の國司となりしより、天下泰平國土成就して四民和樂し、珍の天國を永久に築き上げ、國民は國司の仁徳を慕うて、天來の主師親と仰ぎ仕へまつることとなつてゐた。然るに常世の國よりウラル教の思想いつとはなく、交通の發達と共に輸入し來たり、日を追ひ月を重ねて、やうやく國內には妖蔽の兆を呈して來た。到るところに清家無用論や、乘馬階級撤廢論が勃發し、互ひに黨を作り派を争ひ、さしもに平和なりしアルゼンチンは、やうやく亂麻のごとき世態を醸成するに至つたのである。

國依別はやうやく年老い、城内の歩行にも杖を用ゐるに至り頭に霜を戴き、前

頭部はほとんど電燈のごとくに光り出した。末子姫もやうやく年若い、中婆さまとなつてしまつた。國依別末子姫二人の中に國照別、春乃姫といふ一男一女があつた。國照別は父國依別の洒脱にして豪放な氣分を受け、幼少より仁侠を以て處世の方針としてゐた。そして清家生活を非常に忌み嫌ひ、隙間があれば、城内をぬけ出し簡易なる平民生活をなさむと考へてみたのである。

國司を補佐して忠實につとめてゐた松若彦、捨子姫もやうやく年若い、松依別、常盤姫の二子をあげてゐた。そして松若彦の部下に伊佐彦、岩治別の左右の重職があつて、松若彦の政務を補佐しつゝあつた。

神素盞鳴の大神が

皇大神の經綸を

遂行せむと齋苑館

後に眺めてはるばると

天の岩樟船に乗り

アルゼンチンの珍の國

珍の都に天降りまし

八人乙女の末子姫

國の司と定めつつ

國依別の神司

夫と定めて合衾の式を擧げさせ勇み立ち

再びフサの産土の嚴の館に歸りしゆ

三十三年の星霜を經にける今日の都路は

蕘も高く立竝び數十倍の人の家

建てひろがりて南米に竝ぶものなき大都會

交通機關は完成し數多の役所は立ち竝び

大商店は櫛比して昔のおもかげ何處へやら

うつて變りし繁榮に驚かざるはなかりけり

國依別と末子姫二人の中に生れたる

國照別や春乃姫容色衆にぬきんでて

珍の都の月花と南米諸國に鳴りわたり

若き男女の情緒をばそそりて血をばわかせる

遠き神代の物語禱の上に横たはり

言靈車ころぶまに面白をかしく述べて行く

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ。

珍の都の高砂城内評定所の別室には、大老松若彦を始め、伊佐彦、岩治別の老中株が首を鳩めて秘密會議を開いてゐた。空はドンヨリとして何となく蒸暑く、一種異様の不快な零圍氣が室内を包んでゐる。松若彦は二人の老中株に打向かひ、水「ばな」をすすりながら、骨と皮との赤黒い腕を前へニユツと出し、招き猫よろしくの體で齒のぬけた口から、慄ひ慄ひ先づ火蓋を切つた。

「御兩所殿、今日は御多忙のところ早朝より能く御來城下さつた。今日お招き申したの、折り入つて御兩所に相談したきことがあつて、自分の決心を忌憚なく吐露し、御兩所の御援助を得たいと思ふのだ」

と言ひながら、コーヒーを一口グツと飲んで、顎鬚にしたたる露を、分の厚いタオルでクリクリと二三遍拭うた。

伊佐「御老體の身をもつて、何時も國家の重職に身命を捧げ下さる段、誠に感謝に堪へませぬ。そして今日吾々をお招きになつた御用件は如何なる事が存じませ

ぬが、吾々の力の及ぶ事ならば、國司のため、珍の國のため、あらゆる限りの努力を拂ふでございませう」

松若「イヤ、それを聞いて松若彦安心をいたした。岩治別殿、貴殿もまた伊佐彦殿と御同感でござらうなア」

岩治「いかにも、左様、吾々は元より身命を君國のために捧ぐる者、閣下のお言葉に對し一言半句たりとも、違背いたす道理はございませぬ。しかしながら今日の世は大いに改まつてをります。革新の氣分が漲つて參りました。それゆゑ慨世憂國の吾々、閣下のお言葉に依つては、或は國家の將來を慮るについて背かねばならないかも分りませぬ。そこは豫め御承知を願つておきます」

松若「なるほど、貴殿の言はるる通り、今日の社會は昔日の社會ではない。日進月歩、ほとんど止まるところを知らない世の中の情勢でござる。ついでには松若彦が御兩所に御相談と申すのは、御承知の通り老齡職に堪へず、大老の職を辭し、新進氣鋭の御兩所に吾が職を譲り、退隱の身となり、光風霽月を樂しみ、閑地に

つきたいと欲するからでござる。何と御兩所において吾が希望を容れ、後任者た

る事を承諾しては下さるまいか」

伊佐「これは怪しからぬ閣下の仰せかな。閣下は珍一國の柱石ではござらぬか。

上下の一致を缺き、清家と衆生との争鬪烈しき今日、國家の重鎮たる閣下が今日

の場合、萬々一退隱さるやうの事あつては、それこそ亂れに紊れし國家はいや

が上にも争亂を勃發し、社稷を危ふうするの端を開くのは最も明らかなる道理で

ござる。何とぞこの儀ばかりは思ひ止まつていただきたう存じます」

松若「貴殿の勸告は一應もつともながら、老齡職に堪へざる身をもつて國家重要

の職にをり、後進者の進路を壅塞し、國內の零圍氣をしますます腐亂せしむる

は、拙者において忍びざるところ、何とぞなにとぞ吾が希望を容れ、御兩所の中

において大老の職を預かつてもらひたい」

岩治「成るほど、松若彦様のお言葉の通り、齡幾何もなき老人が國政を執るは國

家の進運を妨ぐることも最も甚しく、かつ惟神の大道に違反するものならば、お望

みの通り御退隱なさいませ。拙者は實のところは數年前より只今のお言葉を期待

してをりました。實に賢明なる閣下の御心事、イヤはや感激の至りに堪へませぬ」

伊佐彦は憤然として言葉をあららげ、

「コレハコレハ御兩所とも、以ての外のお言葉、左様な意志薄弱なることでは民を治むる事は出来ずまい。あくまでも國家のために犠牲的精神を發揮遊ばすのが大老の御聖職ではござらぬか。岩治別殿は松若彦様に對し、御諫言申し上げることを忘れ、自らその後釜に坐り、畏れ多くも、國司様の代理權を執行せむとするその心底野望のほど、歴然と現はれてをりますぞ。左様な野心を有する役人が上にあつては、下ますます亂れ、遂には收拾すべからざる亂世となるでせう。拙者はあくまでも松若彦様の御留任を希望して止みませぬ」

岩治「これは怪しからぬ伊佐彦の言葉、拙者は決して野心なんか毛頭持つてゐませぬ。よく考へて御覽なさい。松若彦様はすでに御頽齡、かやうな時には、新進氣鋭の若者でなくては國家を支持し、民心をつなぐ事は出来ずまい。さすが賢明なる松若彦様、この間の消息を御推知遊ばされ、進んで自決の途に出でられたのは、天晴れ國家の柱石と稱讚申し上げる外はありますまい。及ばずながら御心配下さるな。みごと拙者が松若彦の後任者となつて、上は國司に對し、下國民に

對して、至眞至粹至美至愛の善政を布き、珍の天地を神素盞鳴大神が降らせ玉ひし、昔の天國淨土に立直して御覽に入れませう」

伊佐「おだまりなされ。貴殿は老中の地位に在りといへど、無能無策、到底國家の重任に堪へざるは、上下一般の認むるところでござる。常に大言壯語を吐き、私立大學を創立して不良青年を收容し、國家顛覆の根源を培ふ惡魔の張本、たうてい城中の政治を左右する人格者ではござらぬ。それだといつて外に適任者はなし、御苦勞ながら松若彦様に今一度の御奮發を願はなくは、たちまち貴殿のごとき非國家主義者が政權を掌握さるる事となつてしまふ。これ國家のために最も恐るべき大事變でござる。貴殿にして一片報國の至誠あらば體よく老中の地位を去り、爵位を奉還し、野に下つて民情をトクと視察し、その上更めて意見を進言なされ。この伊佐彦のある限り、どこまでも貴殿の欲望は遂げさせませぬぞ」

松若彦は心の中にて……到底今日の世の中、今まで通りではやつて行けないことは、百も千も承知してゐた。されど投槍思想を帯びた岩治別に政權を渡せば、たちまち國家の根底を覆すであらうし、眞に國家を思ふ伊佐彦に政權を渡せば、

時勢じせいおくれの保守主義ほしゆしゆぎを振りまはし、ますます民心みんしん離反りはんの端たんを開ひらくであらう、ハテ困こまつた事ことだなア、退ひくには退ひかれず進すすむにも進すすまれず、國內こくない一般いっぱんの民情みんじやうを見みれば、上あげもおろしも、自分じぶんの力ちからではなくなつて來た。たうてい清家政治せいかせいぢや閥ぼつ族政治ぞくせいぢのいつまでも續つづくべき道理だうりがない……否いなかくのごとく乘馬階級じやうめかいきふの政治せいぢてきけんり的てき權けん力りきは最早最後もはやさいごに瀕ひんしてゐる。何とかして國內こくないの空氣くうきを一新いつしんし、人心じんしんの倦怠けんたいを救すくひ、思想しさうの惡化あくわを緩和くわんわし、上下一致じやうげいっちの新政しんせいを布しきたいものだ。アアどうしたら可よからうかな、……と水みづ「ばな」をすすり、腕うでをくみて兩眼りやうがんよりは涙なみださへ滴したたらしてゐる。三人さんにんは何いづれも口くちを噤つぐんで互たがひに顔かほを見守みまもつてゐる。

そこへ浴衣ゆかたの上うへへ無雜作むざふさに三尺帶さんじやくおびをグルグル巻まきにして、鼻唄はなうたを唄うたひながらやつて來たのは國照別くにてるわけであつた。

國照くにてる「ヨ、デクさまの御集會ごしふくわいかな、たうてい、干ひからびた古い頭ふるあたまでは、碌ろくな相談さうだんもまとまりはしまい、……ヤア、松若彦まつわかひこ、お前まへは泣ないてゐるのか、お前まへもヤツパリ年としが老よつた加減かげんか、よほど涙なみだつぽくなつただないか、……ヤア保守老中ほしゆうらうちゆうの伊い佐彦ひこに投槍老中なげやりらうちゆうの岩治別いははるわけだな、……ヤ面白おもしろからう、一つ大議論だいぎろんをやつて退屈たいくつさま

しに僕に聞かしてくれないか。僕も實のところは清家生活がイヤになつて、どつかへ飛び出さうと思つてゐるのだが、何をいつても籠の鳥同様、近侍だとか、衛士だとか舊時代の遺物が僕の身邊にぶらついてゐるものだから、どうすることも出来やしない。これも要するに頭の古い大老の指圖だらう。僕の親爺は、決してこんな窮屈なことは、好まない筈だ。オイ酒でも呑んで、いさぎようせぬかい。高砂城内で涙は禁物だからのう」

松若彦は手持無沙汰に涙をかくしながら二三間ばかり座をしざり、疊に頭をすりつけながら、

「コレハコレハ、若君様でございますか、エライ御無禮を致しました。何とぞ何とぞ神直日大直日に見直し聞直し、無作法をお赦し下さいませ」

國照「オイ、爺、ソリヤ何をするのだ。左様な虚禮虚式的な事は、僕は嫌ひだ。モウちつと活潑に直立不動の姿勢を執つて、簡単に擧手の禮をやつたら何うだ、あまりまどろしいぢやないか」

松若「恐れ入りました。しかしながら城内には城内の規則がございますから、有

職故實を破るわけには参りませぬ。禮なくんば治まらずと申しまして、國家を治むるには禮儀が第一でございますから、之ばかりは何ほどお氣に入らなくても許していただかねばなりません。これは珍の國の國粹とも申すべき重要な政治の大本でございます。禮儀なければ國家は直ちにみだれ、長幼の序は破れ、君臣父子夫婦の道は亡びてしまひます」

國照「ウンさうか、それも結構だが、お前が若しも國替へをして、居らなくなつても、有職故實は保存されると思つてゐるのか、今日の人間の心はそんなまどろしい事は好まないよ。何事も手取り早く埒をつけることが流行する世の中だ。昔のやうに歌をよんだり、長袖を着てブラブラと遊んでをつた時代とは世の中が變つてゐる。昔の百倍も千倍も事務が煩雜になつてゐるのだから、そんな辛氣くさい事はたうてい永續すまいよ」

岩治「實に痛み入つたる若君様のお言葉、岩治別、實に感激に堪へませぬ。かくの如き若君様を得てこそ、珍の國家は萬代不易、國家の隆昌を期する事が出来るでせう。親君様はもはや御老齡、いつ御上天遊ばすかも知れぬこの場合、賢明な

る若君様の御心を承り、岩治別、イヤもう、大變な喜びに打たれ、勇氣が勃勃として湧いて参りました。この若君にしてこの臣あり、老中の仲間に加へられたる吾々なれど、未だ心まで老耄はしてをりませぬ。何とぞ若君様、微臣を御心にかけさせられ、重要事務は微臣に直接御命令下さいませ。松若彦殿は老齡職に堪へずとして、ただいま吾々の前に辭意をもらされました」

國照「ウンさうか、松若彦もモウ退いても可いだらう。伊佐彦もずるぶん古い頭だから、此奴も駄目だし、岩治別は少しばかり今日の時代に進みすぎてるやうでもあり、また遅れてるやうなところもあり、たうてい完全な政治はお前たちの腕では出来さうもない。僕が親爺に勸告して退職をさせ、簡易なる平民生活に入れやう、安樂な餘生を送らせたいと思つてゐるのだから、一層のこと、お前たちも大老や老中なんか廢して、安逸な田園生活でもやつたら何うだ。僕も大いに覺悟してゐるのだからな」

三人は國照別の顔を無言のまま、盗むやうにして打ち守つてゐる。國照別は無雑作に、

「高砂城の床の置物、無神経質の骨董品殿、三人よれば文殊の智慧だ。トツクリと衆生の平和と幸福とを擁護し、人民の思想を善導すべく神算鬼謀を巡らしたが可からう。アア六かしい皺苦茶面を見て肩が凝つてきた。ドーラ、馬にでも乗つて馬場でもかけ廻つてこうかな」
と言ひすて、足音高く奥殿さして進み入る。後見送つて松若彦はまたも涙を垂らしながら、

「肝心要の後継者たる若君様が、あのやうなお考へでは最早珍の國家は滅亡するより仕方ない。アア困つた事になつたものだ、なア伊佐彦殿」

伊佐彦は眞青な顔して、唇をビリビリふるはせながら禿げた頭をツルリと撫で、
「閣下の言はるる通り、困つた事でござる。どうして珍の衆生を安穩ならしめ、お家を永遠に榮ゆべき方法を講じたら宜しうございませうか。深夜枕をもたげて

國家の前途を思ひ見れば、實に不安の情に堪へませぬ」

岩治「アツハハハ、この行詰つた現代を流通させ、衆生が鼓腹撃壤の天國的歡樂に酔ひ、おのおの業を樂しむ善政を布くは何でもない事でござる。御兩所たちは

かう申すと憚り多いが、頑迷固陋にして時代を解し玉はざるためでございます。時代の潮流を善導してさへゆけば、珍の衆生は國司の徳を慕ひ、たちまち天國の社會が展開されるは明らかな事實でございます。ともかく退隱遊ばすが國家の進展上第一の手段だと考へます。徒に舊套を墨守して衆生の心を抑へ、社會の進歩を妨ぐるにおいては何時いかなる大事が脚下から勃發するかも知れませぬぞ。拙者は決して自己の權利を得むがため、または政權を壟斷せむがために論議するのではありませぬ。國家を救ふのは拙者の考ふところを以て最善の方法と思ふからです。御兩所におかせられても、速やかに色眼鏡を撤回して拙者の眞心を御透察下さらば、自らお疑ひが解けるでせう』

松若「佞辨をもつて己が野心を遂行せむとする貴殿の内心、いつかな、いつかな、その手に乗る松若彦ではござらぬ。及ばずながら拙者は珍の國の柱石、かくなる上は最早御心配下さるな。拙者は命のあらむ限り、君國のために、老齡ながら奮闘努力いたして見よう。ついでには伊佐彦殿、今日只今より岩治別に對し、老中の職を解くから、貴殿もさう考へなされ。そして今後は何事も拙者と御相談な仕ら

う

伊佐彦は喜色満面にうかべかがら、「ヤレ邪魔者が排斥された」……と言はぬばかりの態度にて、

閣下の仰せ、ご尤も千萬、國家のため、謹んで祝し奉ります。岩治別殿、大老よりのお言葉、ヨモヤ違背はござるまい。サア速やかに此場を退出召され」と居丈高になつて罵つた。

岩治「これは怪しからぬ兩所のお言葉、拙者は貴殿等より任命された者ではござらぬ。永年國務に鞅掌いたした功勞を思召され、國司より老中の列に加へられたる者、然るを大老の身をもつて吾々に免職を言ひつくるのは、實に不届き千萬ではござらぬか。貴殿等は神權を無視し、國政を私するものと言はれても遁るる言葉はござりますまい。亂臣賊子とは貴殿等のことではござる」

と居丈高になり聲荒らげて睨めつけた。

松若彦、伊佐彦は目配せしながら、ソツとこの場を立つて國依別國司の御殿に進み入る。

後に岩治別は雙手を組み、越方行末のことなど思ひ浮かべて、慨世憂國の涙に
くれてゐた。そこへ若君の國照別は慌しく只一人入り來たり、
「オイ、岩治別殿、一時も早く裏門より逃れ出でよ。汝を捉へて獄に投ぜむと、
二人の老耄爺が大目付を呼び出し手配りさしてゐる。サア、時遅れては取返しが
つかぬ、早く早く」
とせき立てた。岩治別は擧手の禮を施しながら「ダンコン」とただ一言を残し、
夕暗を幸ひ、姿を變じて裏門より何處ともなく消えてしまった。
三五の月は東の山の端を照らして、高砂城内の騒ぎを知らぬ顔にニコニコと眺
めてゐる。

(大正一三・一・二二 舊一二・一七 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第二章 老斷(一七四七)

松若彦、伊佐彦の大老、老中株は數多の目付を指揮し、急進派の老中岩治別を捉へしめむとしたが、何時の間にやら耳ざとくも城内を脱け出し姿をかくしてしまつたので、心配はますます深くなり、煩悶苦惱の吐息をもらし、兩人はふたたび評定所に卓子を圍んで、コーヒーをすすりながら善後策を協議してゐる。

松若彦は悲痛な聲で、

「伊佐彦殿、國家は眞に暴風の前の燈火に等しき危機に瀕したではござらぬか。少しばかり進歩した頭だぐらみに思つて、かれ岩治別を老中に推薦し、國務の樞機に参加せしめむとし、彼を招いて吾が退職を口實に意見を叩いて見れば、天地容れざる國家の逆賊、大野望を包藏してゐる岩治別。如何にせば此の珍の國家を泰山の安きにおくことが出来るであらうかな」

と早くも兩眼より紅淚滂沱と滴らしてゐる。伊佐彦は深い吐息をつきながら、
「いかにも閣下のお言葉の通り、實に深憂に堪へませぬ。しかしながら最早くなる上は、閣下と拙者とあらむ限りの努力をもつて國家を未倒に救ひ、國司の御心を慰め奉り、國民安堵の途を開かねばなりません。しかしながら彼れ岩治別、

敏捷にも罪のその身に及ばむことを前知し、鳩のごとく鼠のごとく暗に紛れて姿を隠しました以上は、何れどつかの國の涯にひそみ、三平社や労働者、對命舎などを驅り集め、國家顛覆を企圖し、己が欲望を達せむとして、時を俟ち捲土重來せむは案の内。何とか豫防の方法……否かれを討滅の手段を講究しなくてはなりませんまい。かかる天地容れざる逆賊を國內に放養しておくは、猛虎を野に放つよりは危険なことでござりませう。閣下においては、定めて妙案奇策のおはしますことと存じますが……」

と心配氣に松若彦の顔を眼鏡越しに覗きあげ、光つた頭を右の手でツルリツルリと二三べん撫でまはし、藥罐の尻を手巾で拭うた。

松若「本當に困つた事だ。最早かうなる上は手ぬるい手段では駄目であらう。この城下に保安令を布き、目付やサグリを増員し貧民窟の隅々までも、疑はしき者とは望まれないであらう。現代のごとき人心悪化の頂點に達した社會には、もはや、煎藥や水藥の治療では駄目でござる。外科的大手術を施し、彼ら醜類を根底

より剿滅し、國難を未然に防ぐより方法はござるまい。幸ひ吾々は目付の權を手に握り、かつ有事の日には大名、士を使役するの特權を有しをれば、吾々の今日の立場として、最早懷柔も善政も駄目でござらう』

伊佐『成るほど仰せ御尤もながら……私考へます。まづ衆生の喜ぶ相談權を與へ、徳政案とかその外衆生の人氣に投ずる政策を標榜し、以て今や破裂せむとする噴火口を防ぎ、曠日彌久、以て一時登りつめたる人心を倦ましめ、骨を抜き、血を絞り、元氣を消耗せしめて、しかして後絶對無限の權威を示しなば、さしもに熾烈なる衆生運動も、投槍思想も其の他の惡思想も首を擡ぐるに由なく自滅するでござらう。閣下の御意見は如何でございますか』

拙者とても妄りに國家の干城を動員し、或は衆生を目付やサグリをもつて鎮壓するは拙の拙なるものたることは承知し居れども、焦頭爛額の急に迫つた今日の場合、これより方法はあるまいと存ずるからだ。直相談案の餌に、民心を籠絡するも一策だらう、徳政案も一時の緩和劑となるだらう。今日は最早正直では執れない。某々のごとき政治家は正直過ぎるから、何時も内甲を見すかされ、失敗を

繰返し、遂には黨の分裂を來たしたではないか。非常の時には非常の手段が必要だらう。伊佐彦殿、如何でござらうかな」

「成るほど、今日の時局に對しては清廉潔白とか正直とかいふ事は、害あつて益ないこととでございませう。仰せのごとく權謀術數、あるひは妥協政治をもつて現代に處するのが最も賢明なる行方とでございませう」

と次第に聲が高くなり、兩人は拳を握り、卓を叩いて花瓶にさした山吹の花辨を一面に散らしてゐる。そこへ輕装をして又もや國照別が現はれ來たり、

「八八八御兩所とも、國家のため心慮を惱ませられ、國照別身に取り恐懼措くところを知らざる次第とでございませう。何といつても珍の國第一流の大政治家の巨頭の會合、定めて神案妙策がひねり出されたことでせう」

と擲揄ひはじめた。二人は若君に茶化されて怒るわけにもゆかず、「チエー」と秘かに舌打ちしながら、ワザと謹嚴な態度で椅子を離れ、直立して兩手を帶の下あたりまで垂直に下げ、立禮を施しながら、

松若「若君様、よくこそ入らせられました。微臣等には國政上の問題に就き、秘

密の相談もございませうれば、どうか暫く、恐れながら奥殿へお歸り下さいませ」
伊佐「大老の仰せのごとく、ただいま國務上の件につき、大至急相談を要する場
合でございませうれば、恐れながらどうぞ少時お引取りを願ひまする」
國照「八八八岩治別の投槍老中が消滅したので、定めて、圓滿な熟議が凝らされ
るだらう。ヤ、國家のため拙者は大慶至極に存ずる。しかしながら兩老に尋ねた
い事がある」

松若「ハイ恐れ入りました。何事なりともお尋ね下さいませ」

國照「お前は今廊下で聞いてをれば、某々は正直すぎるから、黨の内紛を醸し失
敗したと言つたぢやないか。正直すぎるとは、ソラ一體何の事か。要するに正直
もよいが、チツとは詐欺もやれ、權謀術數を用ひなくては今日の政局は保てない
といふのであらう。某のごとく正直過ぎるため失敗したのならば、本望ではない
か。上下一般の人間を詐つてまで、政權を掌握する必要がどこにあるか。正直過
ぎるといふその意味を聞かしてもらひたいものだ」
とつめかけられ、兩人は返答に詰まり、顔赤らめて、「ハイ」と言つたきり俯向

いてゐる。

國照「ハハハ、ヨモヤ返答は出来ようまい。正直過ぎる政治家が用ひられない世の中だから、お前たちの羽振りが利くのだらう。そしてモ一つ問ひたい事がある…… 國家樞要の事務を協議してゐる最中だから、奥へ引取つてくれといったでな
いか。なぜ政治の樞機に俺が参加することが出来ないのだ。若輩者と見くびつての故か、ただしは俺を信用しないのか、言葉の上において若君若君と尊敬しながら、汝等の心中においては、すでに俺を認めてゐないのか、サアその返答を聞か
してもらはう」

と二の矢をさされて二人はグウの音も出で、俯むいて慄うてゐる。

國照「アツハハハハ、オイ、兩人、藥罐が漏つてゐるぢやないか、みつともないぞ。一層のこと、兩人とも國家のために老職を廢業して、市井の巷に下り、餛飩屋でもやつたらどうだ。それの方がよほど國家の利益になるかも知れないぞ。岩治別のやうにトツトと尻をからげて退却した方が、何ほど衆生の氣受けがよいか分つたものぢやない。腐り鯛が火箸にひつついたやうに、いつまでもコビリつい

てゐると、誰も見返る者がなくなつてしまふぞ。一にも権力、二にも暴力を唯一の武器として國政を維持するやうなことで、どうして王道仁政が布かれると思ふか。お前たちの行る政治はいはゆる權道だ、霸道だ、強きを扶け、弱きを壓倒せんとする惡魔の政治だ。僕はお前達の陰謀を前知し、岩治別に内報して裏門より遁走させ、お前たちの計略の裏をかかしてやつたのだ。それが分らぬやうな事で、どうして一國の大老がつとまるか。沐猴の冠するといふは所謂デモ大老の状態を遺憾なく言ひ現はした言葉であらうよ、アツハハハ。テモさてもつまらなさうな……心配さうな面付だのう。到底その顔は二年や三年では復興せうまいよ。自轉倒島の震災のやうに復興するのは容易だあるまい、アツハハハ

松若彦は容を正し、

「コレハコレハ若君様の御錠とはいひ、あまりに理不盡なお言葉、この老臣を見るに牛馬をもつて遇せらるるは怪しからぬ事ではござらぬか。拙者は正鹿山津見神様の御代より祖先代々國政を預かり、御母上末子姫様にこの國土を奉還いたし、御父上を迎へて國司と仰ぎ仕へまつり來たりし者、外の臣下とは少しく違ひます

ぞ。いかに珍うづの國司こくしの若君わかぎみなればとて、拙者せつしやをさしおき、自由じゆうに施政方針しせいほうしんをおきめ遊あそばす事は事實じじつにおいて出來できないといふ不文律ふぶんりつが定たつてをりますぞ。』

と祖先そせんを引張ひっぱり出して氣色きしよくばみながら一矢いつしを酬むくうた。國照別くにてるわけは平然へいぜんとして、

『ハツハハハハ、昔むかしの歴史れきしを引張ひっぱり出して、何某なにがしの國司こくし累代るあだいの後胤こういんなどといふやうなバラモンの言草てきいひぐさは、數十年過去すうじふねんくわこの時代じだいに用もちゐられた言葉ことばだ、さやうな古い腦ふるなう味噌みそだから國家こくかが治をさまらないのだ。今日こんにち珍うづの國くにの人心じんしんの荒すさんでゐるのは、要えうするに國司こくしの罪つみでもない。この國くには神様かみさまのお守まもりある以上いじやう、決けつして亡ほろぶるものではない。しかしながら汝おまへのごとき沒常識わからずや漢うへが上あひだにある間あひだは、世よはいつまでも平安へいあんなることは望のぞまれない。珍うづの國くにを今日こんにちの状態じやうたいに導みちびいたのは汝等おまへらの大責任だいせきにんであるぞ。よく兩人りやうにんとも胸むねに手てを當あて、自みづから省かへりみ、自みづから悔くい、その無能むのうを恥はぢ、無智むちを覺さとり、時代じだいに目めを醒さまし、天命てんめいを畏おそれ、もつて最善さいぜんの處決しよけつをしたが可よからう。俺おれも何時いつまでも若君様わかぎみさまではをられないのだから……』

松若まつわか 『そらさうでございませうとも、國司様こくしさまは御老齡ごらうれい、何時いつも御病氣ごびやうきがち、何時いつ御上天遊ごしやうてんあそばすかも知しれませぬ。さうなれば若君あなたが一國いつこくの柱石ちゆうせき、いつまでも嬢ぢやうや坊ぼん

でもゐられますまい。それだから少しは爺の言ふこともお耳に止めていたただかねばなりません」

と顔の居ずまひを直し、仔細らしく述べ立てる。しかし今國照別が……何時までも若君様ではをられない……と言つたのは、近い内清家生活から放れ、民間に下つて徹底的に社會を改造せむと考へてゐた事をフツと漏らしたのである。しかしながら兩人は若君にそんな考へがあるとは神ならぬ身の夢にも知らなかつたので、この場は無難に濟んだのである。

國照別は冷笑を泛かべながら、足音高く吾が居間に歸つてゆく。後に二人は首を鳩め、聲を低うして、
松若「伊佐彦殿、若君様がアアいふ御精神では、吾々も到底職に止まることが出来ぬではござらぬか。一層のこと潔く辭職をいたし、閑地については如何でござらうかな」

伊佐「あなたのお言葉とも覺えませぬ。あなたは國司を補佐すべきお家柄の生れ、吾々のごとき氏素性の卑しき者と同日に考へることは出来ません。たとへ御退

隠遊いんあそばしても、内局ないきよく組織そしきのときには國司こくしからもキツとお尋ねたづもあるだらうし、また腰拔こしぬけの政治家せいぢかどもがお百度ひやくど参りまゐをしてお指圖さしづを仰あふぎに行ゆくでせうから、到底たうていあなたは珍うづの國くにの政治圈外せいぢけんぐわいを脱だつすることは出来できますまい。それが貴方あなたの珍うづの國くにに對たいする忠誠ちうせいでございますからな」

松若まつわか「なるほど、それも思おもはぬではないが、あまりのことで實じつは心こころが迷まよふのだ。

アア人生政治家じんせいせいぢかとなるなかれ……とはよく言いつたものだなア」

と青あをい吐息といきをつく。

伊佐いさ「御苦心ごくしんお察さつし申まをします。しかしながら國司こくし様のまへ前で、あなたは假かりにも辭じ意いをお洩もらしになつてはいけませぬぞ。御老齡ごらうれいの國司こくしに御心配ごしんぱいをかけては、臣子しんしたる者の役やくがすみませぬからなア。それだけは伊佐彦いさひこが命いのちに替かへても御注意ごちういを申まをし上げておきます」

松若まつわか「いかにも貴殿きでんの言いはるる通りとほだ。しかしながら進すすみもならず退しりぞきもならず、實じつに困こまつた世態せたいになつたものだなア。アアどうしたら可よからうかなア」

次の間つぎから若い聲わかいこゑで

「展開の道はただ辭職の一途あるのみだ」

と叫ぶ聲が聞こえて来る。二人はハツと驚き耳欬て考へ込んである。少時すると、隔ての襖を無雜作に押し開き、浴衣のまま現はれ来たのは春乃姫であつた。

春乃「二人の老爺さま、お兄さまのあれだけの御注意がまだ分らないのかい。本當に古い頭だね」

二人は春乃姫の顔を見るより、にはかに威儀を正し、頭を下げながら、松若「恐れ入ります。何分任重くして徳足らず、實に國司様の御心慮を惱まし奉

り、申し譯がございませぬ」

春乃「ホホホ嘘ばかり爺達は言ふぢやないか。任重くして徳足らぬといふ事の

自覺がついてゐるのなら、なぜ早く挂冠をせないのか。今妾に言つたことは表面

を飾る辭令にすぎないのだらう。任は重し、徳あり智あれども時代の進展上この

上施すべき手段なし、吾にして斯くの如しとすれば、その他の末輩どもが幾度出

でて其の任に當るとも、たうてい吾以上の政治はなし能はざるべし。たちまち國

家を滅亡の淵に投入するならむ。乃公出でずむば、この國家と蒼生を如何にせむ

底ていの自負心じふしんにかられてゐるのだらう。それに違ちがひはあるまいがな、ホホホホ。若わかい女をんなの分際ぶんざいとして経験けいけん深ふかきお爺ぢいさま達たちに失禮しつれいなことを申まをしました。神直日大直日に見直みなほし聞直ききなほし、速すみやかに許ゆるして頂戴ちやうだいね。大おほきに失禮しつれいさま、ホホホホ」と笑わらひながらスタスタと廊下らうかを傳つたうて奥殿おくでんに進すすみ入いる。二人ふたりは少時しばらく熟議じゆくぎをこらし上うへ、相携あひたづさへて國司こくしの居間ゐまに、何事なにごとか進言しんげんせむと進すすみ行ゆく。にはかに聞きこゆる警鐘けいしゆ亂打らんたの聲こゑ、フト廊下らうかの高欄かうらんから城下じやうかを瞰みおろせば、遠方ゑんぱうの方に黑煙こくえん天てんを焦こがし、可かなり大おほき火災くわさいが起おこつてゐる。

（大正一三・一・二二 舊一二・一二・一七 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録）

第三章 喬育けういく（一七四八）

國依別くによりわけは元來くわんらい磊落らいらく豪放かうほうにして、小事せうじに齷齪あくせくせず、何事なにごとに對たいしても無頓着むとんちやくなる性質せいしやうとて、珍うつつの國くにの國司こくしに封ほうぜられてより、一切いっさいの政務せいむを重臣ぢゆうしんの松若彦まつわかひこに一任いちにんし、

自分^{じぶん}はただ事實^{じじつ}上^{じやう}虚器^{きよき}を擁^{よう}してゐたに過ぎ^すなかつた。それゆゑ^{うづ}珍^{うづ}の國^{くに}の大小^{だいせう}の政^{せい}治^ちは、松若彦^{まつわかひこ}その他の閥族^{はつぞく}の手裡^{しゆり}に握^{にぎ}られてゐた。國依別^{くによりわけ}はただ朝夕^{てうせき}皇大神^{すめおほかみ}の前^{まへ}に拜禮^{はいらい}をするのみにて、花鳥^{くわてう}風月^{ふうげつ}を樂^{たの}しみ、昔^{むかし}の宣傳使^{せんでんし}時分^{じぶん}の氣樂^{きらく}さを思^{おも}ひ出^いだしては、時々^{ときどき}吐息^{といき}をもらし、末子姫^{すゑこひめ}に酌^{しやく}をさせ、城中^{じやうちゆう}に伶人^{れいじん}を招^{まね}いて歌舞^{かぶおん}音樂^いに悶々^{もんもん}の情^{じやう}を慰^{なぐさ}めてゐた。そして實子^{じつし}の國照別^{くにてるわけ}、春乃姫^{はるのひめ}に對^{たい}しても家庭^{かてい}教育^{けうい}などの七^{しち}むつかしいことは強^しひず、自然^{しぜん}の成熟^{せいじゆく}に任^{まか}してゐた。ゆゑに親子^{おやこ}の關係^{くわんけい}は兄弟^{きやうだい}のごとく圓滿^{ゑんまん}にして少^{すこ}しの差別^{さべつ}もなく、和氣藹々^{わきあいあい}として春風^{しゆんぷう}のごとき家庭^{かてい}を造^{つく}てゐた。國依別^{くによりわけ}は球^{きう}の玉^{たま}の神德^{しんとく}によつて、凡^{すべ}ての世^よの中^{なか}の成行^{なりゆ}きを達觀^{たつくわん}してゐた。それゆゑ^{うづ}ワザとに時^{とき}の來^きたるまでは政治^{せいぢ}に干與^{かんよ}せず、なまじひに小刀^{こがた}細工^{なさいく}を施^{ほどこ}すとも、時^{とき}至^{いた}らざれば殆^{ほと}んど徒勞^{とらう}に歸^きすることを知^しつてゐたからである。それゆゑ^{うづ}當座^{たうざ}の鼻塞^{はなふさ}ぎとして、實際^{じつさい}の政治^{せいぢ}を永年^{ながねん}間^{かん}松若彦^{まつわかひこ}一派^{いっぱ}に委任^{ゐにん}してゐたのである。奥^{おく}の間^まの丸窓^{まるまど}を開^{ひら}いて夏風^{なつかぜ}を室内^{しつない}に入^いれながら、脇息^{けうそく}にもたれ、作歌^{さくか}に耽^{ふけ}つてゐた。そこへしづしづと襖^{ふすま}を押開^{おしあ}け入來^{いりき}たるは末子姫^{すゑこひめ}であつた。國依別^{くによりわけ}は作歌^{さくか}に心^{こころ}を取^とられ、末子姫^{すゑこひめ}の入^いり來^きたりしことに氣^きがつかかなかつた。末子姫^{すゑこひめ}は兩手^{りやうて}をつ

いて、言葉もしとやかに、

「吾が君様、御氣嫌は如何でございますか……」
と四五回繰り返した。國依別は色紙に目を注ぎながら、

「黎明に向かはむとして天地は

朝な夕なに震ひをののく

大空に月は照れども村雲の

深く包みて地上に見えず

甲子の春をば待ちて開かむと

雪に堪へつつ匂ふ梅ケ香

時は今天地暗し刈菰の

みだれに紊る黎明の前に

天地の神の恵みの深ければ

世を守らむと地震至る」

と口吟くちずさんでゐる。末子すゑこ姫ひめは一層いつそう聲こゑを高たかめて、

「吾わが君きみ様さま、御ご機き嫌げんは如何いかにでございます」

と繰くり返かへした。國くに依より別わけはハツと氣きがつき、

「アア末子すゑこ姫ひめか、何なんぞ用ようかね」

末子すゑこ「ハイ、至急しきふ御相談ごさうだんがございまして、御ご勉強けんきやうの最中さいちゆうをお驚おどろかせ致いたしました」

國くに依より「ナア二、勉強べんきやうでも何なんでもない。三十一みそひと文字もじの腰折こしをれをひねくつてゐたのだ」

「立派りっぱなお歌うたが詠よめたでせう。妾わらはにも一度いちど聞きかして下さいませぬか」

「ナア二、聞きかせるやうな名歌めいかぢやない。あまり氣きがムシヤクシヤしてゐるので、歌うたまでがムシヤついてゐる。今日けふは何時いつにない出で來きが悪わるいよ」

「あなたの歌うたは後のちになるほど、良よくなりますからね。お詠よみになつた時は、失禮しつれいながらこんな歌うたと思おもつてゐましても、後日ごじつになつて拜讀はいどくしますと、お歌うたがみな豫よげ言録んろくとなつて現あらはれてをりますの。松若彦まつわかひこも我わが君きみのお歌うたはウツカリ見逃みのがすことは出来できぬ、残のこらず豫言よげんだと言いつてをりましたよ」

「豫言よげんか五言ごげんか妖言ようげんか知しらぬが、大たいしたことはないよ。ともかく自身じしんのためによ

んだ歌だからな、ハハハ」

「工、何と仰有います。また謎を言つてゐらつしやるのでせう。近い内に地震がある」と仰有るのですか」

「ウン、地震、雷、火事、親爺、現代はモ一つ加へ物が出来た、それはいはゆるお媽だ、ハツハハハハ」

「わが君様、上流の家庭において、お媽なんて、そんな下卑た言葉をお使ひなさいますな。倅や娘が聞きましては、また見習つて困りますからね」

「ナア二奥様といつても、後室といつても、御令室といつても、山の神といつても、お媽といつても、ヤツパリ女房だ。人間の附した名稱ぐらゐに拘泥する必要はないぢやないか」

「今あなたは地震、雷、火事、親爺……とおつしやいました、それもキツと深遠な謎でございませう。どうも貴方のお言葉は滑稽洒脱の中に恐ろしい意味が含まんでゐるのですから、容易に聞き流しは出来ませぬワ」

「ハツハハハハ、地震雷といふことは、國依別自身が神也といふことだ。お前は

自信力が神様のやうに強いから、ヤツパリお前も自信神也だ

「ホツホホホ、よくしらばくれ遊ばすこと、そんな意味ではごさいますまい。

火事親爺といふことは何ういふ意味でございますか、それを聞かして下さいな」

「いま警鐘亂打の聲が聞こえてみただらう。松若彦、伊佐彦の親爺連が、薬罐頭

を陳列して、國政とか何とかの評議の最中へ火事がいつたものだから、親爺が驚

いて高欄から轉落し、腰を打つて、吾が部屋へかつぎこまれ、媽アの世話になつ

たといふ謎だよ、ハツハハハハ」

「あれマア、松若彦が高欄から轉落したことを誰にお聞きになりましたか」

「そんなことは靈眼でチャンと分つてるのだ。それだから國依別自身は神也とい

つたのだ。火事に驚いて親爺が轉落したから火事親爺だ」

「その松若彦で思い出したが、今お伺ひに参りましたのも松若彦に關しての事で

ございます。幸ひ捨子姫が參勤してみたので、直ちに自分の居間へ擔ぎ込まれ、

捨子姫の介抱を受けてをります。妾もあまり可哀さうなので病床を見舞つてやり

ました、松若彦は大變に憤慨を致してをりますよ」

「それは廁かわえ相さつに糞外ふんぐわいしてゐるのだらう。俺おれだつて日ひに一遍いっぺんぐらゐは高野参かうやまゐりをして糞外ふんぐわいするのだからな、ハツハハハハ」

「冗談じょうだんおつしやるも時ときと場合ばあひによります。一遍いっぺん彼の言いふことも聞きいてやつていただかねばなりません」

「そりや聞きいてやらぬことはない。倅せがれや娘むすめに擲から揄かはれて薬罐やくわんから湯氣ゆげを立て、火くわ事に二度吃驚にどびつくりして負傷ふしやうしたといふのだらう。マアいいワイ、松若彦まつわかひこもモウいい加減かげんに引込ひきこんでも可いい時分じぶんだからのう」

「どうぞ、今日けふは眞劍しんけんでございますから、眞面目まじめに聞きいて下くださいませ。何時いつも瓢へう箆たんで鯰なまづを抑おさへるやうに、又ルリ又ルリと言靈ことたまの切先きつさきをお外はづし遊あそばす貴方あなたのズルサ加減かげん、いつも風かぜを繩なはで縛しばるやうな掴つかまへ所ところのない、困こまつた我わが君様きみさまだと、松若彦まつわかひこがこぼしてゐましたよ。無頓着むとんちやくも宜よろしいが、あなたは何なんのために珍うづの國くにの國司こくしにお成なりなされたのですか」

「何なんの爲ためでもない、大神様おほかみさまや言依別様ことよりわけさまがお前まへの夫をととになつてやつてくれとおつしやつたものだから、厭いやで叶かなはぬ事ことのないお前まへの夫をととになつたばかりだ。その時ときにお前まへ

も知つてるだらうが、大神様や言依別様にダメを押しおいたぢやないか。……私わたしは若い時ときから家潰いへつぶしの後家倒ごけたふし、女をんなたらしの野良苦良者のらくらもの、こんなガラクタ人間にんげんを末子姫様すゑこひめさまの婿むこになさつたところで駄目だめですから……といつてお断ことわり申し上げたら、それが氣きに入いつたと大神様おほかみさまがおつしやつたぢやないか。これでも俺おれは十分じふぶんに窮屈きうくつな目を忍しのんで、勃々ぼつぼつたる勇氣ゆうきを抑おさへ神命しんめいを守まもつてゐるのだ。この上俺おれに追つい及きするのは殺生せつじやうだ。政治せいぢなんかは俗物ぞくぶつのやることだ。老子經らうしきやうにいふてあるぢやないか、太上たいじやう下知有しもこれあるをしる之……といつて、國民こくみんがこの國くにに國王こくわうが有あるといふことだけ知しつてをればそれで可いいのだ。なまじひに、チヨツカイを出だし、拙劣へたな政治せいぢでもやつて見みよ、國依別くによりわけの名なはたちまち失墜しつたふし、引ひいて大神様おほかみさまの御名おんなまで汚けがすぢやないか」

「お説せつは御尤ごもつともでございませうが、太上たいじやうとは大昔おほむかしのこと、人智未開じんちみかいの古いにしへなれば、國くにに王わうあることさへ知しれば、それで民心みんしんは治をさまりましたが、今日こんにちの世態せたいはさういふわけにはゆきませうまい」

「老子經らうしきやうには太上たいじやう下知有しもこれあるをしる之、其次親而譽之そのつきはしたしみてこれをほむ、其次畏之そのつきはこれをおそる、其次侮之そのつきはこれをあなどる……と出でてゐる

ぢやないか。世の中が段々進むに連れ、徳がおちて来ると慈善だとか、救濟だとかいつて、萬衆の機嫌を取らねばならぬやうになつて来る。そこで萬衆に施しをするから仁者だ、堯舜の御世だと言つて頭主をほめるのだ、其の次に之を畏るといふことはつまり斯うだ、餘り頭主の仁慈に狎れて、衆生が氣儘になり、慢心した結果、不正義をたくらんだり、強盜殺人放火等あらゆる悪事を敢行し、世の中の秩序を紊すやうになつて来る。そこで頭主は嚴しい法規を設けて、善を賞し、悪を罰するやうになつて来る。丁度八衢の白赤の守衛を勤めるやうなものだ。それならまだしも可いが、世が段々進むと、其の次には之を侮るといふ事になつてくる。遂に衆生心汚濁して頭主大老豈種あらむやなど稱ふる馬鹿者が出来て来る。要するに頭主たる名は神の代表者として、國の中心に立つてゐれば可いのだ。色々な小刀細工をするやうなことでは最早駄目だ。だからこの國依別は珍の國の衆生からは國司と仰がれてゐるが、自分としては國司でも何でもないやハリ一個の國依別、元の宗彦だ。誰が……馬鹿らしい、大きな面をして表へ出られるものか……

『アーア』

と大缺伸をし、兩手の握り拳を固めて頭上高く差し上げた。

「モウ仕方がありません。何時も貴方はそれだから愚昧な妾の言ふことは一口に茶化されてしまひますからね。しかしながら我が君様、あまり貴方は天然教育とか自然教育とかおつしやつて、二人の子供を氣儘に放任しておかれたものだから、松若彦、伊佐彦の老臣に向かひ、傍若無人の暴言を吐き、……お前のやうな骨董品は一時も早く引退した方が國家の利益だとか衆生の幸福だらう……とか言つたさうですよ。何ほど放任教育がよいといつても、チツとは教誡を與へて下さらぬと困るぢやありませんか」

「子供の教育は母にあるのだ。お前は世のいはゆる良妻賢母だから困るのだ。賢妻良母でなくては本當の教育は出来ないよ。國依別は教育家でもなければ子守でもなし、家庭教師でもないから、そんなことア畑違ひだよ。しかしあの時代遅れの親爺連に、倅も娘も引退を迫つたといふのか、さすがは俺の子だ、アア感心々々。この父にしてこの子あり、國依別知己を得たりといふべしだ、アツハハ

ハハ

「アア困つたことになつたものだなア。まるで我が君様に向かつては如何なる箴言も豆腐に銚、糠に釘だワ。此のままにして放任しておかうものなら、倅も娘も新しがつて乗馬生活を捨て、兩親を捨て、どこへ逐電するか分らないと氣が揉めてならないのですワ。松若彦もそれが心配でならないといつてみましたよ」

「倅も娘も乗馬生活を嫌つて何れは出るだらう。何といつても、俺の血を受けてる子供だからな。今こそ斯うして珍の國の國司の假名に捉はれ、鍍金の權威を保つてすまし込んであるものの、元を糾せば、お勝と巡禮をしてをつた宗彦の成れの果だ、その倅だもの當然だよ。親に似ぬ子は鬼子といふから、俺もヤツパリ誠の子を持つたと見えるワイ、アツハハハハ。オイ末子姫、人間は教育が肝心だよ。教育の行方によつて、人物が大きくもなり小さくもなるのだからな」

「ホホホホ、教育が聞いて呆れますワ。あなたの教育の教は獸扁に王の狂でせう」

「無論獣でも王になれば結構だが、しかし俺のいふ教育の教はそんなのではない。森林の中に雲を凌いで聳え立つ喬木の喬だ。現代のやうな教育の行方では、床の

間に飾る盆栽は作れても、柱になる良材は出来ない。野生の杉檜松などは、少しも人工を加へず、惟神のままに生育してゐるから、立派な柱となるのだ。今日のやうに兒童の性能や天才を無視して、壓迫教育や詰込教育を施し、せつかく大木にならうとする若木に針金を巻いたり、心を摘んだり、つつぱりをかふたりして、小さい鉢に入れてしまふものだから、碌な人間は一つも出来やしない。惟神に任して、思ふままに子供を發達させ、智能を伸長させるのが眞の教育だ。大魚は小池に棲まず、倅もよほど人格を練り上げたと見えて、この狭い高砂城が窮屈になつたとみえる。それでこそ世界的人物だ、いや崇敬すべき人格者だ、てもさても神様の御恵み有難う感謝いたします。』

と拍手しながら神殿に向かつて拜禮する。末子姫は餘りのことに呆れ果て、返す言葉も知らなかつた。

(大正一三・一・二二 舊一二・一二・一七 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第四章 國の光（一七四九）

珍うづの都みやこの大都會だいたくわいにも、世よの變遷へんせんにつれて立たチン坊ぼうや貧民窟ひんみんくつが、場末ばすゑの方ほうには、かなり澤山たくさんに出來できた。そして國くに依別よりわけの國司こくしに對たいしては餘あまり怨嗟ゑんさの聲こゑも放はなたなかつたが、松若彦まつわかひこ以下いかの施政方針しせいほうしんについては、至いたるところに不平ふへいの聲こゑが勃發ぼつぱつし、いつ不祥事件ふしやうじけんが突發とつぱつするかも分わからないやうになつて來きた。人力車くるまの帳場ちやうばに二三人にさんにんの輓ひき子こがあぐら座ざになつて、配達はいたつして來くる新聞紙しんぶんしを讀よみながら、揅鉢卷ねじはちまきしたまま政せい治談ぢだんに耽ふけつてゐる。

甲か「オイ愛州あいしう、つまらぬぢやないか、俺おれたちは朝あさから晩ばんまで、額ひたひに汗あせをし埃ほこりまぶれになつて、ゼントルメンとかいふ奴やつの馬うまとなり、重おもたいゴム輪わをひいて送おくつてやつたところで、御苦勞ごくらうとも吐ぬかさず、お札ふださまを一枚いちまいほど與あたへられ、へいへいハイハイと米こめつきバツタよろしくといふ體裁ていさいで生活せいくわつを送おくつてゐるのだが、此世このよに平等愛べうとうあいの神かみがござるとすれば、なぜ何時いつまでも、こんなみじめな生涯しやうがいに俺達おれたちを見みすてておくのだらうか、本當ほんたうに合點がってんがゆかぬ」

愛「オイ浅、今日もまた弱音を吹くのか、チツとしつかりせい。車輓だつて、さう悲觀したものだない。珍の都の國司だつて、若い時は、バラモン教の巡禮にもなり、人の門に立つて乞食もなさつたといふ事だ。車夫だつて時が來れば、どんな出世が出來よまいものでもないワ。なア國公、お前どう思ふか」

國「ウン、そらさうだ。あまり苦にする必要もあるまい。己がたつた今、アルゼンチンの大統領となつてお前たちを救うてやるから樂しんで待つてゐるが宜いワ。何といつても國さんは國の代表者……オツとドツコイ國の柱だからなア」

浅「ヘン、偉さうに言ふない、蛇は寸にして人を呑む、梅檀は二葉より芳ばしいといふぢやないか、お前のやうな青瓢箪の蒲柳性の肉體を持つてゐて、どうしてそんな大それた事が出來やうかい、法螺を吹くも程があるワイ」

「マア見ておれ、新政黨でも組織して衆生を教導し、捲土重來、タコマ山の風雲をまき起し、一擧にして天教地教の山を踏み碎き、天國淨土を建設してみせる。俺は天下の救世主だからなア。汝のやうに與力同心が恐ろしうて、自轉倒島の地震のやうにビリビリ慄つてゐるやうな天ん若は例外だが、俺たちは、俺たちとし

ての成案が十二分にあるのだ」

「ヘン、誰が慄うてゐるか、國、汝こそ陰辨慶の外すぼり、朝寒にボロ一枚で慄ひ通してゐるだないか。あまり振つた事をいふと、車夫仲間から除名するぞ、ア
ン」

「ハハハハ、慄ふのは此頃の流行物だ。不斷的の大地の震動は言ふも更なりだが、先づ世の中の人間どもの行る事を考へてみよ。みな慄うてるだないか。汝が女房をもらうた時にも三々九度を行つただらう。その時には手が慄ひ胴體まで慄うたといふだないか。始めての泥棒に、近所の火事、遺書の文句、女房からもらうた三行半をよむ時、始めての大道演説、葱の義太夫に出刃庖丁の小包をもらうた時、取締に一喝された時、咬んだ唇、弱蟲の夜道、死刑の宣告、まあザツとこんなものだ、皆ふるつてゐるだらう。慄ふのが今日の世態だ。普選即行だといつて、衆生が一致團結、城下に迫るや否や、元老の自由とか言論の自由とかが、壓迫するとか、壓迫されたとかいつてふるひ落とされるだないか。清遊會でさへも分裂して新黨を樹て、惡玉をふるひおとしてゐるだないか。まだもふるふてゐるのは、

古手親爺の跋扈跳梁だ。車夫だつて、古くなりや車もロクに輓けやしないぞ。車夫組合でも作つて、お前たちのやうな老齡職にたへざる者は振ひおとす考へだ、イツヒヒヒヒヒ」

「オイ愛公、汝も一つ加勢してくれ、國公は其筋の犬かも知れないよ。どうみても乗馬面をしてゐるだないか。松若彦の奴、世の中が怖ろしくなつたものだから、俺等の仲間の様子を考へようと思つて國公をよこしよつたのかも知れぬ。此奴、車夫に似合はぬ錢使ひがあらゐ。そしていつも帳場に坐つて、足が痛いのが痛いのと吐かして、一度も客を乗せた事はないぢやないか。うつかりしていると足許から鳥が立つやうな目に會はされるかも知れぬぞ。俺たち下層社會の祕密を探つてる奴だから、どうだ今の内に殺んで了はふだないか、エエー」

愛「オイ淺、汝は國公を今まで普通の車夫と思つてゐたのか、エエトンマだな。そんなウス鈍では車夫だつて勤まりやしないぞ。今日の世の中の有様を考へてみる、宣傳使や比丘の連中はいかめしく法衣をまとつて淫事にふけり、神佛を悪用して正直な人間をだまし、武士は錢を愛し、暫消の力を悪用して衆生を壓迫し、

黄金力を濫用してトラストを作り、利権を獲得し、不時の災害に附け込んで暴利を貪る商人が頻出し、懺悔の生活を喰物にする偽君子が現はれた世の中だ。俺たちのやうにボロ車を輓いたり、その間には俯向いて土を掘り、汗や脂で取り上げた収穫を吸ひとられ、本當に地獄道の生活をしてゐるやうなものだ。大きな面をしてゐるやがる連中は、懷手で握り拳丸で飯をくらひ、白晝大道の眞中を自動車の土埃を立てながら、賣笑婦と共にかけ廻り、人の迷惑はそ知らぬ顔、おまけに俺たちの子供を引き倒しておいて、屁一つ放りかけてゆくといふ不人情な、不合理な、不正義な無人道な世の中を誰だつて歎かないものがあらうか。俺達はこれからかふいふ邪道を通る横着者の内面をことごとく暴露し、天地の道理を明らかにして、純眞な人道に返し、この宇宙をして光明世界に換直さねばならないのだ。實のところを言へば、この國さまもこの愛さまも、生れついでの子だない。ちよつと様子があつて社會改造のために、顯要の地位をすて、兩親や家來に叛いて、貧民窟の研究にかかつてゐるのだ。實際の事いへばお前たちは可哀さうなものだ。彌勒菩薩は土から現はれるといふことだが、今日の乘馬社會には吾々を徹底的に

救うてくれるやうな聖人君子は現はれないだらう。それだから俺たちも身を下して下層社會の仲間に入り、民情を研究してゐるのだ。しかしながら最早天運循環、上下揃へて枘かけひきならず、といふ御神勅の實現期が近付いたのだから、まあ安心して玉へ。やがて普選にもなるだらうから、その時はお前も代議士の名乗りを上げて議政壇上に咆哮し、珍の天地を昔の神代に返すのだな、アツハハハハ」

浅「果して普選が即行され、俺達でも代議士になつて社會の爲に盡すやうなことがあるだらうかな。凡て世の中は思ふやうに行かぬものだ。まして現代のごとき信用の出来ぬ世の中では、俺たちを買うてくれるものはあるまい。何ほど普選を即行しても、やはりゼントルマンが黄白をまきちらして、ますます俺達を泥濘の中へつき落とすに違ひなからうと思ふよ。何故にまたこれほど虚偽と罪惡に充ちた世の中だらう。よく考へて見る、一つだつて信用されることはないぢやないか。地震博士の豫言、天氣豫報、海老茶式部の兄さまといひ、媒介者の口からいふ初婚と品行問題、新聞の攻撃記事にはかの中止、如何なる重症も一週間に根治するといふ梨田ドラックの廣告、新聞雑誌の發行部數、福引の一等當選品の行方、葬

禮の出棺時間、賣藥屋のお禮廣告、連日連夜満員大人の提燈持ち、正何時に御來會下され度候、天下無比の大勉強店は弊店のみ、と、何から何まで嘘で固めた世の中ぢやないか。普選だつて、やつぱり賣藥屋の廣告同様で、一時のがれの人氣取りだらうよ。俺は決してここ二年や三年の間には普選が實行されるものとは思はないね。マア孫の代ぐらゐになつたら、せうことなしに普選斷行と出かけるだらうよ。それよりも俵夫は俵夫としての立場から、一文でも高値を吹きかけて、不當の賃錢を取つてやるのだなア。お前たち兩人は何だか乗馬出のやうな口吻をもらしてゐたが、自分から名乗る奴に口くな奴アありやしないワ。おほかた稻田大學の落第生ぐらゐだらうよ。取締にもなれず、教員にもなれず、政治家になるには金が要るし、放蕩の結果俵夫に成り下り、見事理窟だけ覺えて來て法螺を吹いてるのだらう。俺の靈眼に、汝の顔に墮落生だと書いてあるのが見えすいてゐるのだからな、ウツフツフフ』

と互ひに不得要領な法螺を言ひかはしてゐる。其處へ靴音忍ばせやつて來たのは交通係の印を腕に巻いた色の青白い營養不良的な面をした取締であつた。三人は

思はず、かいてゐた胡坐を元へ直し、キチンとすわり込んだまま取締の面を見上げた。

(大正一三・一・一九 舊一二・一二・一四 於道後ホテル 松村眞澄録)

第五章 性明「一七五〇」

珍の都の町はづれ、深溝町の俥帳場に國、愛、淺三名の輓子が大氣焰を擧げてゐるところへ、交通取締の青白い瘡せこけた先生が三人の話を立聞きした上、素知らぬ面してツツと這入つて來た。そして厭らしい目をギョロつかせてゐる。三人は今この話をこの取締に聞かれたのではないかと、いささか胸部に動搖を感じたが、キチンと行儀よく坐り直し素知らぬ顔。

淺「へー、旦那何用でございますか。車體の検査でございますか。二三日前にお役所へ行つて調べてもらつたばかりの健康車體でございますから、めつたにお客さ

まを泥道に轉覆させるやうな氣遣ひはございやせぬ。どうぞ早く歸つて下さい。
あなたが店に永くゐられますと、何だか博奕でもうつてゐて、またお叱言を頂戴
してるのぢやなからうかと、客が怖がつて寄りつきませぬ。さうすれば、たアち
まち、吾々の鼻の下が干上つてしまひます。ドツサリと膏は取られ、車體の修繕
は命ぜられ、おまけに營業の妨害をせられては、俵夫だつてやり切れませぬから
ね」

取締「イヤ、車體検査でも何でも無い、僕は交通取締だ。あまり面白さうに政治
談が流行つてをつたので、僕も一つ聞きたいと思つて這入つて來たのだ。ずゐぶ
ん偉い氣焰を上げたものだ。僕だつて稻田大學の墮落生だから、君等と同じ仲
間だよ。先づ安心して胸襟を開いて、君の抱負を聞かしてくれ玉へ、アーン」
「ヘン、今の取締は何とか彼とかいつて衆生の氣に合ふやうなお世辭をいひ、腑
の底まで喋らしておいて、ソツと役頭に上申し、ご褒美をもらふ事ばかり考へ
てゐるのだから、滅多に政治談などは話せないのだ。何ほど取締だつて俺たちの
汗膏で飯を食つてゐるのだ。言はば俺等は旦那さまだから、あまり横柄に言はな

いやうにしてくれ。これまでタツタ今普選施行になれば天下の代議士だからなア」
「ハハハ、ソロソロ臍腑を見せ出したな。ヤ面白い、僕も賛成だ。君が立候補をやつたら、僕を買収して呉れたまへ。僕も一票の権利はあるんだからな」
「ヘン、君等の一票が何になる。君等に投票してもらふために金を出すのならば、モチツとらしい人間に投票してもらふワ、ヘン、濟みまへんな」
「大老だつて、清家だつて、富豪だつて、俺だつて君だつて、矢つぱり権利は一票だ。買喰大將の一票も、俺たちの一票も效能は同じことだ。あまり見くびつてくれない」

「フーン、そんなものか。さうすると、俺たちも買喰大將も普選即行となれば同等だな。ヨシうまい、それでは労働者を味方につけ、大いにやつて見やうかな、大政黨を組織して黨首となり、内閣をとつて衆生のために大いに經綸を行ふつもりだ、イツヒツヒ。その時には君も滅多に交通取締ぐらゐはさしておかないよ。ドツと拔擢して大目付ぐらゐには任じてやるからな」

「アツハハハ面白面白い……時に、君は國さま、愛さまでないか。どうして

又またこんな所ところにこんな商賣しょうばいをしてゐるのだ。モウ隠かくしても駄目だめだから、何もかも言いつてもらひたい」

國くに「僕は國くにさまでも何でもなんないよ、黒くろさまだよ。だから下層階級かそうかいきふに帳場ちやうばの哥兄あにいをして苦勞くろうをしてをるのだ。あまり見違みちがへてもらふまいかい。それよりも早くはや四辻よつ辻に立たたないか。また田車でんしゃと兒童車じどうしゃの衝突しょうつとつがあつちや、たちまち雄おんとか雌めんとかの字じを頂戴ちやうだいして、おまけに煙多けむたイ所ところへブチ込こ込まねばならぬやうな羽目はめに陥おちいるぞ」

取締とりしまり「何なんとマア、君きみは偉えらいものだね。よく變相へんさうした者ものだ。隠かくしても駄目だめだよ。しかしながら君きみの行動かうどうは僕ぼくもずるぶん氣きに入いつたね。兒童車じどうしゃや田車でんしゃが衝突しょうつとつしたつて何なんだい。將來見込しやうらいみこみのある君きみの乾兒こざんになれば、今日けふからこの十手じつてを棒ぼうに振ふつたつて恨うらむことはない。あの兒童車じどうしゃには、いつもブルブル階級かいきふが狸町たぬきまちの藝者げいしやを乗のせて、そり返かへつてゐやがるのだから、一遍いっぺんぐらゐ衝突しょうつとつさしてやつたら却かへつて通街つうがいだ、アツハハハハ」

「これは怪けしからぬ。汝おまへは食務しょくむに不忠實ふちうじつな奴やつだな」
「ナニ、それが却かへつて忠實ちうじつになるのだよ」

愛「ハハア、たうとう白状しやがつたな。交通取締とは表面を詐る口答鼠輩だな。何だか怪しい目をしてゐると思つた。モウかうなれば仕方がない、言つて聞かしてやらう。俺はヒルの都の楓別の倅國愛別といふ男だ。愛州と名乗つて民情視察のために此處へ來てゐるのだ。さうしたところ、この國州にベツタリコと出會し、互ひに胸襟を開いて、大いに天下蠻衆のために盡さむとしてゐるところだ。汝も大方松若彦のお先だらうが、あんな古親爺に何時までついてをつても末の見込みがない、社會の廢物だからな。それよりもこの國さまの乾兒になつて、天下刻下のために大活動をする氣は無いか。かう打明けた以上は、口八では歸さないのだ。サアどうだ降參するか、従ふか、二つに一つの返答だ。俺たちも自分の素性を明かした以上は、このままお前を歸すわけには行かぬ、返答を聞かしてもらはふかい」

取締「ヤ、仕方がない……ではない、結構だ。萬事君に任すから、良きやうにしてくれたまへ」

國「僕も實のところは普通の人間ではないのだ。しかしながら本名をいふのだけ

は待つてもらはう。いつ密告されるやら分らないからな。併しながらこの國さまは、強きを扶け弱きを挫く惑酔會員でもなければ、猜疑と嫉妬に充たされた三平社員でもないから安心し給へ」

「ヤ、分つてる。名は聞かいても、君の風采といひ、言葉といひ、大抵どこの狸か狐かぐらゐは呑込んでゐる。名乗らなけや名乗らいつでも可い。マアともかく互ひに胸襟を開いて刻下のため、相提携しようだないか」

「實のところ、刻下刻下と鶏のやうにいふのも結構だが、いつそ人類愛のためと言つた方が時代相應だらうよ」

「實のところは僕は、松若彦の御家人で幾公といふ者だが、何時までも馬通族の提燈持ちをしてゐるのも氣が利かない、いい加減に足を洗つて時代に目覺めねばならないと思つてゐたところだ。それでは國さま、如何なる貴い方の血統か知らぬが、先づ國州、愛州で交際つて貰ひたい。君が誤大老になつた時はまた敬語を使ふからな、ワツハハハハ」

「ヨシ氣に入つた。そんなら幾公、サア握手だ」

幾いく「イクらでも握手あくしゅならして呉くれ。なにぶん資本しほんが要いらぬのだからな」

國くに「二ふたつ目めには資本しほんだとか何なんとか、そんなケチなこと言いふない。僕ぼくはモウ資本しほんだとか清家せいだとか、そんな聲こゑを聞きくと、耳みみが痛いたくなり胸むねが悪わるくなり、胚はちの中なかに擾亂ぜうらんが勃發ぼつぱつするやうな氣きがしてならないワ。今いまの資本家しほんかはいはゆる足あしの四本家しほんかだから

なア」

愛あい「幾公いくこうが俺おれたちの素性すじやうを嗅かぎつけるやうに、寒犬かんけんも鼻はなが利きき出だした以上いじやうは俵夫しやぶも最早も駄目だめだ。キツと他ほかの奴やつが嗅かぎつけて來きよるに違ちがひないから、どうだ、一つ、

これから俠客けふかくにでもなつたら、將來しやうらいの計畫けいかくじやうつ都合がふが好よいかも知しれないぞ」

國くに「ソラ面白おもしろい。しかし誰たれが親分おやぶんになるのだ」

幾いく「まづ親分おやぶんは國くにさまに願ねがはうかな。しかしモ少すこし年としがいつてると睨にらみが利きいて可いいのだがなア」

國くに「そんなら淺あさの野郎やろうは腰拔こしぬけだから、例外れいぐわいとして俺おれの乾兒こぶんにしてやる。君きみは愛州あいしうの兄弟分きやうだいぶんとなつては何どうだ。この珍うづの都みやこの北きたと南みなみで俠客けふかくの親分おやぶんとなり、霸はを利きかさうぢやないか」

三人「賛成賛成大賛成だ」

國「そんなら直様ここで結黨式……いな分列式を行らうだないか……オイ淺公、横町のお多福屋へ行つて、豆腐と酒を買つて來い。湯豆腐で一杯、柔らかう四角う杯をしよう。しかし淺州、誰にも言つちやアいけないよ」

淺「ヨシ合點だ」

と徳利をぶら下げ、裏口からチヨコチヨコ走りに出でて行く。

表の大道にはどつかに馬鹿旦事件が怒つたといふので、喧平隊が四五十人列を正して走つて行く靴の音が、三人の耳に異様に響く。

暫くすると一升徳利を二本ぶら下げて淺公は歸つて來た。

淺「ハアハア、エライ エライ、雀の子が待つてゐると思つて、一生懸命に走つて來た。サア一杯やらう。二升なれば、四五二十だ。五合宛になるから一寸酔へるだらう。早くから喉の蟲奴がギウギウ ゴウゴウと催促してゐやがらア、ヘツヘツへ」

幾「オイ、豆腐はどうしたのだ」

「酒呑に豆腐が要るかい。都府は此の間の地震で滅茶めちやになつたと言ふことよ。今福幸院を起して震議の最中だから、暫く待つてゐるが可からう。シロ都風も焼豆腐もサツパリ滅茶めちやだよ。何といつても松若彦の老體がナマクラの別荘で梯子段に壓せられて死んだとか至難とかいふ問題で、豆腐どころの騒ぎぢやないワ。まづ酒さへあれば何とか酒段がつくだろ」

「どうも仕方がないな。オイ兄弟、モウ仕方がない、豆腐は無くて、このまま徳利の口から呑み廻してやらうかい」

「エ、邪魔くさい、こんな小つポケな口からチヨビチヨビやつてゐてもはずまないワ。徳利の尻を叩き割つて風の通ふやうにすりや能く出て来るだらう。卵でも一方口では吸へないから、兩方へ穴を開けるだないか」

と言ひながら、俵の梶棒に徳利の尻をコンと打つけた機に、徳利は切腹して忽ち庭の土は一升の酒を舐めてしまつた。

「チエツ、金城鐵壁も國さまの一撃に遇つてサツパリ滅茶々々だ。ヤツパリ酒たる徳利が備はつてをらぬと見えるわい、ハハハハハ」

浅あさ 「オイ國州くにしゅう、イヤ親分おやぶん、何なんといふ勿體もつたいないことをするのだい。土つちがみな結構けつこうな酒さけを呑のんでしまつたぢやないか。本當ほんたうに一いつ生しやうの損そんをしたものだ」

國くに 「德利階級とくりかいきふの口くちばかりへ入いれてるのも勿體もつたいないから、チツとはズブ下したの土つちにも呑のましてやりたいと思おもうて爆發ばくはつさせたのだ。タコマ山やまでもチヨイチヨイ爆發ばくはつするだないか。未まだ、ここ一本いっほん残のこつてる、これを汝きさまたち自由じいうにしたが可よからう。俺おれはモウ呑のむよりも、かうして胚はらを打割ぶちわつて酒さけの洪水こうずみを起おこす方ほうが、何なにほど痛快つうくわいか知しれないワ、アツハハハ」

愛あい 「一いつ升しやうの酒さけを之これから四よ人にん寄よつて平たひらげることとしよう。さうすりや一人いちにん前まへ二に合がふご五ご勺しやく位くらゐだ。マア肴さかなには「公侯こうこう」でも持もつて來きてバリバリとやるんだな。そして藝げい者しやもなし、一人ひとり注ついで呑のめば私酌ししやくにもなり、男をとこのお給仕きふじに注つがせば男酌だんしやくにもなり、小間物店こまものみせを出だせば吐はく爵しやくにもなるのだから、これで爵しやくの病やまひを癒なほし、溜飲りういんを下さげることに仕様しやまつかい」

浅あさ 「私酌ししやくも男酌だんしやくも結構けつこうですが、どうです親分おやぶん、三筋みすぢの絲いとが這はい入いらないと餘あまり面白おもしろくないぢやありませんか。私わたしがこれから刑務所けいむしょ……オツとドツコイ……藝務所げいむしょへ

走つて行つて、生首でも白首でも引張つて來ませうかな』

國『おけおけ、藝務所は梅毒の養生所だ。また一筋縄や二筋縄で負へぬ奴が、三筋の糸で鼻の下の長い奴を操つてゐるのだから、そんな代物を輸入されちや背水の迷惑だ』

かく雑談に耽りながら、四人は一升の酒を喇叭呑みにして平らげてしまつた。かかるところへ、新聞配達の烈しき鈴の音チリンチリンと響きくる。

國『オイ淺、號外を一つ買つて來い、キツと變事が突發したに違ひないからな』淺は言下に尻引きまくり、號外屋の跡を追つかけながら、「オーイ オーイ」と熊谷もどきに徒いて行く。後に三人は淺の歸るのを今や遅しと待つてゐる。

國『地震でもなし、政變でもなからうが、今の號外は何だらうかな。どうも吾々は氣懸りでならないワ』

愛『さうだな、こいつア、普通ぢやあるまい。吾々の一身上に關する大問題が起つたのだあるまいか。コラ幾州、汝は俺たちの話を立聞きしやがつて、新聞記者の奴にでも、何か喋つたのだらう』

幾いく「なに、俺おれは何なにも喋しゃべらない。惡徳新聞あくどくしんぶんの記者きしやが此處ここの軒のきに立たつてペンを走はしらしてゐるから、こいつア可怪をかしいと思おもつて近寄ちかよつて見みれば、記者きしやの奴やつ、妙めうな面つらして、どつかへ姿すがたを隠かくしよつたのだ。それから其その後あとを少すこしばかり俺おれが聞きいたただけだ。あまり大おほきな聲こゑで話はなしてゐたものだから「國照別くにてるわけ傳帳場まぢやうばに潛ひそむ」ぐらゐな見み出しで號外がうくわいでも出だしたのかも知しれないよ。さうすりや大變たいへんだ、大目付おほめつけの奴やつ驚おどろいて部下ぶかの取締とりしまりに命めいじ、俺達おれたちを逮捕たいほに来くるかも知しれない。サア身みを隠かくさう、俠客けふかくの成なり始はじめに捕つかまつては幸先さいさきが悪わるいから……」

三人さんにんはサツと面かほの色いろが變かはつた。そこへ轉ころげるやうにして歸かへつて來きたのは淺公あさこうである。淺公あさこうは門口かどぐちから、

「オイ、タタタ大變たいへんだ。クク國くに依別よりわけのセセ倅せがれ、國照別くにてるわけが、この帳場ちやうばに潛伏せんぷくしてゐるから其その筋すぢの手てが都下と一いち面めんに廻まはつたと、ゴゴ號外がうくわいに書かいてあるワ。クク國照別くにてるわけが捉つかまへられたら、オオ俺おれも乾兒こぶんだから同罪どうざいだ。サア何なんとかして此この場ばを遁にげやうぢやないか」

國照別くにてるわけは平然へいぜんとして、

「八八八、面白い面白い、これでこそ願望成就時到れりだ。オイ愛州、幾公、淺、俺に徒いて来い。第二の計畫に移らうぢやないか」と言ひながら悠々として裏口から、一行四人は夕暮の暗を幸ひ、何處ともなく姿を隠した。

（大正一三・一・一九 舊一二・一二・一四 於伊豫道後ホテル 松村眞澄録）

第六章 背水會（一七五一）

珍の城下深溝町の俥場に、車夫と化け込んでゐた國愛別の愛州は、取締上りの幾公と共に、横小路に可なり廣い邸宅を借り受け、賭場を開帳してゐた。數百人の乾兒は忽ち集まり來たり、「親分親分」と尊敬し、親分の命令とあらば生命を鴻毛よりも輕んじ、如何なる事にも善惡ともにその頤使に甘んじ、難に殉ずるをもつて、乾兒たる者の光榮としてゐた。愛州は普通の俠客とは違つて、元がヒ

ルの國楓別の國司の倅だけあつて、どこともなく氣品が高く、かつ豪膽にして少しもものに動ぜず、一旦頼まれた事は決して厭と言はなかつた俠客である。世の中の一一般の行り方が癢にさはつて堪らぬので、遙ばる遠き山坂を越え、尊貴の身を捨てて、珍の都までやつて來たのである。

生れついでての皮肉家で、世の中を革正するためとて、内面には博奕を渡世となし、表看板には萬案内所といふ看板を金文字で現はしてゐた。

一、因循姑息お望みの方は、最寄の取締所へお出で下され度候

一、頑迷無恥お望みのお方は、世ごとく濁る吾獨り澄むと自惚れてゐる梨田ドラツク氏へお訪ね下され度候

一、喧譁亂暴お望みの方は、惑酔會へお訪ね下され度候。また口先ばかりの自稱對命舎および政黨屋をお訪ね下され度候

一、不親切お望みの方は、口實職業紹介所へお訪ね下され度候

一、多角關係お望みの方は、妃向國の新しき村へお出で相成度候

一、偽善生活お望みの方は、一度花の都の一燈園東田地香氏方をお訪ね下され度候。しかしながら同氏に對し、少しにても利益を與ふる掛合ひならば極めて親切に取扱ひくれ候

一、山子欺しお望みの方は、變態愛國者苦糟大異へお訪ね下され度候。但し畸形的愛國者に限り申候事

一、沒常識お望みの方は、珍の都の四ツ辻便所へお出で下され度候

一、金儲けお望みの方は、富人世界雜誌社ならびに心零犬灸會同人へお訪ね下され度候

一、厚顔無恥お望みの方は、新聞ゴロおよび勞働ブローカーへお訪ね下され度候

一、時代錯誤お望みの方は、石火暴死團へお訪ね有之度候

一、その他何事に仍らず矛盾と誤解と虚偽と偽善とお望みの方は、嘔吐白住持社へお訪ね下され度候

一、公平社と爭論希望の方は、惑酔會へお訪ね下され度候

と言ふやうな大きな看板を掲げて、往來の人の足を止めてゐた。其處へ面をしかめて、十手を下げてやつて來た一人の取締がある。

取締「コリヤコリヤ、當家の主人はをるか」

門口を掃いてゐた乾兒の八公は取締の姿を見て、

「ハイ、親分は奥にをられますが、めつたに博奕は打つてをりやせぬから、どうぞ歸つて下つせい」

取締「イヤ、博奕は今打つてゐなくても、拘引しようと思へば何時でも拘引できるのだ。新刑法によつて賭博常習犯人とブラツクリストについてゐるのだから、

非現行犯で引張つてやらうかな」

八「ヘーン、そんな細い體をして、キラキラ光る物をブラつかせ威喝したつて駄目でい。そんなことに驚く親分だございやせぬわい。わつち達の仲間は一遍でも餘計藝務所の門を潜つたら顔が好うなるのでげすから、マア奥へ這入りなさい。卑怯未練に逃げるやうな侠客ア一人もをりませぬよ。横町の蜈蚣の權太の親分のやうに、取締が來たというて二階から飛び出し、脛を折つたり、腕を折つたりし

て、取つ捉まるやうなへまなこたア致しやせぬ

「汝では譯が分らぬ、親分を此處へ呼んで来い」

「へん、吾々に取つては神様同様に、命まで捧げて仕へてる親分、さう易々動か

すわけにはゆきやせぬわい。愚圖ぐづしてゐると、お前さま、笠の臺がなくなり

ますよ。早くお歸りなさい」

かく話してゐるところへ、奥から兄貴分の照公が二三人の兄弟分と共に現はれ

来たり、

照「ナナ何だ何だ」

八「兄貴、今この取締先生が、ゲン糞の悪い、朝つばらからやつて来て、グツグ

ツいつてるのだ。俺昨晚負けて来て、今日はムカついてたまらないのに、グツグ

ツ吐かすんだもの、癩にさはつて仕方がねいのだ。早くボツ歸してくれないかね

照「へー、わつちや、愛州の乾兒でげして、照公と申し、チツタア、珍の都で名

を知られた、ケチな野郎でげす。どうかお見知りおかれまして、可愛がつて下せ

い。侠客渡世はしてをりまして、面にも似合はねえ優しい男でげすよ。八公が

どんな無禮なことを申しやしたか知りやせぬが、どうかわつちの面に免じて許してやつて下つせえ。そして今日お出でになつたのは何の御用でげすかなア」

取締「外でもない、役頭の命令によつて、當家の看板を撤回させに來たのだ。不穩文書を張出し、怪しからぬといふので、誰か譯のわかる男に屯所まで來てもらひたいのだ。そして一時も早く本漢の目の前で引落とし、片付けてしまひ、人心悪化の極に達した今日、かやうな看板を掲載されたら、取締所として黙過するわけにやゆかない。サ、早くお上の命令だ、撤回しろ」

「何の御用かと思へば、わつちの商賣の看板を除れとおつしやるのですか、ソリヤなりません」

「お上の許可を受けた上で、掲揚するならしても可からう。ともかく速やかに下ろしたがよからう」

「アア、コリヤわつちのこの親分の商賣でげすから、商賣の妨害までは、何ほど取締權が絶対だといつても、そこまでの干渉は出來すまい。斷じて撤廢は致しませぬ。そもそも此の案内の看板に書いてあることは少しも虚偽はありません。」

事實有りのままの事が記してあるのですから、別に詐欺でもなければ悪事でもありません。事實のことをやつてをるのが悪いのですか。こんな小さいことを咎めるよりも、モツと大きい泥棒をお調べなさいやせ。何十萬圓、何百萬圓といふ大泥棒が、玩具をピカつかせて、都大路を横行闊歩してるのが、あなたがたのお目につきませぬか。自分の金で自分が勝負してるのに、賭博犯だといつて、拘引したり、牢へ打ち込んだり、そんな末の末の問題に頭を悩ますより、法の權威を極端に發揮し、天下の大道を白晝に横行してる大泥棒を擧げなさい。何ほどその方が國家のためだか知れやせぬよ。お前さまも僅かな月給でチボの後を追ひかけたり、門で片肌脱いだり小便【こい】てる人間を叱り飛ばしてるよりも、どうだいい、俺たちの仲間へ這入つて、一生を面白う可笑しく快活に暮したら、いいでせう、どうでげす」

『生活の道は保證してくれらうな』

『宅の親分は頼むと言はれて、後へ引くやうな安つぱい腰拔男とは違ひやす。サアサア合羽を脱いだり脱いだり、ヤ、男は決心が第一だ。かうやつて出て来る取

締を片つ端から乾兒にし、珍の都に取締が一人も無いとこまでやつてやらうといふ、背水會の主義綱領だ」

「イヤ、モウ君たちに掛つたら命武者だから仕方がない。そんなら僕も、女房があるでなし、何時雄とか雌とかをもらふか分らぬのだから、安全地帯の親分の膝下に跪づくことにしやうかな」

「ヨーシ、呑みこんだ。直接の親分の乾兒にはなれぬぞ。俺の直參だ。俺の上にまた兄貴がある。その兄貴の兄貴の兄貴の親分が大親分だ。まづ軍隊でいへば、俺は少佐ぐらゐな者だから、さう思うて俺のいふことを聞くのだぞ。その代りに三日も飯を食はぬとをらうとママだし、寒の中裸で慄はうとママだし、アヒサに拳骨を二つや三つ喰はされやうとママだから、マアさうして膽力を練るのだなア、アツハハハハ」

「ウツフツフ」

取締の名は佐吉といった。到頭照公の言靈に打ち捲かれて、取締から侠客社へ背進してしまつた。

大親分の愛州は二三の幹部を伴ひ、裏口からソツと脱け出で珍の都の十字街頭に立ちつつ唼鳴り始めた。群衆は喧嘩だ、狂人だ、大事件の突發だと口々に呼ばはりながら、蟻のごとくに愛州の周囲を取捲いた。愛州は手近にあつた餛飩屋の床几を無斷で道路の眞中に引張り出し、その上に直立して雷聲を張り上げ、
「珍の國を守るといふ武士達よ。汝の自己愛的なる嚴めしき鎧甲を脱げ。排他と猜疑と狡猾と無恥とに飾られた宗教家よ、汝の着する法衣を脱げ。政治家も教育家も一般衆生も、汝が朝夕身にまとへる虚偽と虚禮と虚飾の衣服を脱げ。更始革新の今日、一切の舊衣を捨て、新しき愛と眞との淨衣と着替へよ。汝らのまとへる舊衣に、舊き思想と矛盾の蚤が巣ぐつてゐる。偽善的精神や奴隸的根性の蛆蟲が蔓つてゐるぞ。汝等は斯くの如き弊衣を脱がないかぎり、汝らの生活は虚偽の生活だ、まことの人間生活ではないぞ。人間として、人間の生活の出来ないくらゐ詰らぬものはなからうぞ。一時も早く眼を覺せよ。一時も早く新しき淨衣と着かへて眞實の人間生活に入れよ。この淨衣には人間生活に必要な新思想の光明が燦然として輝いてゐるぞ。芳ばしき蘭麝の香が充ちてゐるぞ。何をぐづぐづ躊躇

踏ちよするか。萬まん々まん一いちこの更衣かういの神業しんげふに妨害ぼうがいするものあらば、汝等なんぢらの仇敵きうてきとして其奴そいつを倒たふせ。然しからずんば汝等なんぢらは自ら着ちやくせる舊衣きういのために自滅じめつの厄難やくなんに遭あふであらう。この目的もくてきを貫徹くわんてつするには、何人なにびとも背水はいすいの陣ぢんを張はつてかかれ。これくらゐの事ことが出來でぬやうでは、人間にんげんとしての價値かちは絶無ぜつむだ。體ていよく人間にんげんを廢業はいげふしたが良いからう。僕は背水會はいすいあくわいの會長くわいちやうどうりけ泥池はすこつの蓮公はすこつさまだ。權門けんもん勢家せいけに尾をを掉ふるな。金銀きんぎんに腰こしを屈くつするな。時代じだいは駸々しんしん乎ことして潮うしほのごとく急速きふそくに流ながれてゐるぞ。珍うづの國くにの衆生しゆじやうは文明ぶんめいの世界せかいにおける落伍者らくごしやをもつて甘んずるものではなからう。畏かしこくも神素盞鳴尊かむすさのみことの子しそ孫んの神臨しんりんし玉たまふ光輝くわうきある歴史れきしを持つた國民こくみんではないか。豪毅がうぎと果斷くわだんとは汝等なんぢら祖先そせん以來いらいの特性とくせいではないか。時ときは今いまなり、時ときは今いまなり、三千萬さんぜんまんの同胞どうほう、背水會はいすいあくわいの宣言せんげん綱領うりやうに眼めを覺さませ〆と滔々たうたうとして傍若無人的ぼうじゃくぶじんてきに演説えんぜつする時ときしも、數十人すうじふにんの取締とりしまりは前後左右ぜんごさいうより襲來しふらいして愛州あいしうを引摺り落おとした。群衆ぐんしうは「ワイワイ」と動搖どうよめき立ち、衆生しゆじやうと取締とりしまりとの血迷ちまよひ騒さわぎが各所かくしよに演えんぜられた。愛州あいしうは幸かうか不幸ふかうか、數十人すうじふにんの取締とりしまりに取卷とりまかれ、高手たかて小手こてに縛しばり上げられ、ボロ

自動車に乗せられて、珍の城下の暗い牢獄へ投込まれてしまった。數多の乾兒どもはこの話を聞くより、躍氣となり、列を作つて赤襪に赤鉢巻をしながら、棍棒、竹槍、薙刀、水鐵砲などを携へ、牢獄目がけて潮のごとく押し寄せ、忽ち附近は修羅の巷と化してしまつた。取締はおひおひ繰出す。時々刻々に侠客の連中は得物を持つて蝟集し來たる。一方に百人殖ゆれば一方に百人殖ゆるといふ有様で、人をもつて附近の廣場は埋められた。そこへ彌次馬が侠客の聲援をなすべく、面白半分によつて來て、後ろの方から石を投げる。たちまち大混亂大争鬪の幕がおりた。そこへ兄の在所を尋ねてゐた春乃姫は、葦毛の馬に鞭うち、この場にかへ來たり群集の騒ぐのを見て、まつしぐらにかけ入り、馬上につつ立ちながら、春乃「雙方とも、解散せよ」

と優しい涼しいカン聲で呼ばはつた。數多の取締は春乃姫の姿を見て、抗辨するわけにもゆかず、唯々諾々として一人も残らず根據地へ引上げてしまつた。あとに「ワイワイ」と鬨の聲をあげて、侠客の乾兒連や彌次馬がドヨメキ立つてゐる。春乃姫は一同に向かひ、

「いかなる間違ひか知らぬが、妾がキツとあとを聞いてあげるから、一先づお退きなさい」

乾兒の源州は恐る恐る前に現はれ、

「今日の場合となつては、後へひくことは出来ませぬが、國司様のお姫様のお言葉を畏み、一先づ此の場は退却いたします。私は珍の都の侠客愛州の身内の者、親分愛州が取締のために捕へられ牢獄に投ぜられましたので、これを取返さむと乾兒どもが押寄せましたところでございます。何分よろしくお願ひ申しやす」

春乃「アアさうであつたか。親分一人のために、數多の乾兒が命をすてて救ひ來たのか、ヤ感心だ。人間はさうなくてはならぬ。しかしながら窮屈な法規が布かれてある法治國だから、妾の自由にさう着々と解放するわけにはゆかぬ。しかしながら妾が仲裁に這入つた以上は、キツと汝等の親分を救ひ出し無事に渡すであらう。まづ安心して引取つて下さい。今すぐといふわけにもゆくまいが、今後十日の間にはキツと助けてやるほどに、妾の言葉を信用して早くお退きなさい」

源州は有難涙にくれながら、

「何分なにぶんよろしくお願いねがひ申まをします」
と幾度いくども頭あたまも下さげ、數多あまたの乾兒こぶんを引ひきつれて、横小路よここうぢの親分館おやぶんやかたへと歸かへつて行く。

アアこの結果けつぐわは如何いかに落着おちやくするであらうか。

(大正一三・一・二二 舊一二・一二・一七 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第二篇 愛國あいこくの至情しじやう

第七章 聖子せいし「一七五二」

珍うづの都高砂城みやこたかさごじやうない内ないにおいて、進歩老中しんぽらうぢうあるひは投槍老中なげやりらうぢうと仇名あだなを取とつてみた岩治いははる別わけが、風かぜをくらつて何處いづこともなく姿すがたを隠かくせしより、彼かれは何事なにごとか大望たいまうを畫策くわくさくし、酒しゆ

偽者と語らひ捲土重來して、一擧に松若彦、伊佐彦兩老を引退させ、珍の天地の空氣を一掃し、再び正鹿山津見神の聖代に世が立直るならむと、種々の流言蜚語が盛んに行はれ、人心恟々として安からず、よるとさはると、どこの大路も、裏町も、長屋の嬖連が井戸端會議にも喧傳さるるやうになつてきた。

松若彦は事態容易ならずとして、老衰の身を起し、賢平や取締などを市中隈なく配置し、あるひは私服取締を辻々に横行せしめ、怪しき言をなす者は片つ端から檢舉せしめ、夜中になれば恐れて一人も外出する者なく、さしも繁華な都大路は曠野の觀を呈し、火の消えたるごとく淋しくなつてきた。

岩治別はその實岩公と名を變じ、俠客の愛州が館の奥深く普通の俠客となつて住み込んでゐた。命知らずの若者ばかり數百人、蜂の巢のごとく固まつてゐるので、さすがの賢平も取締もこの館のみは一指を染むることだも躊躇してゐたのである。愛州親分は岩公の岩治別老中なることは當人の懇請によつて、萬事呑込んでみたが、しかしながら胸中深く秘めおいて、他の乾兒どもには一言も示さなかつた。それゆゑ數多の乾兒は老耄親爺の岩州と口汚く酷き使ひ、よその見る目も

氣の毒な次第であつた。

話替つて高砂城の大奥には、國依別の國司を始め、末子姫、春乃姫、松若彦、伊佐彦の五柱が卓を圍んで、何事が重要會議を開いてゐた。

國依「松若彦殿、爾も老齡の身を持ちながら、晝夜寢食を忘れて國務に執掌するその誠實は實に感歎の至りだ。豫も末子姫も常に爾の至誠至實なる行動について時々感謝の意を表し、何よりも先に爾の噂をしてゐるのだよ。しかし今日爾の請求によつて、豫は妻子と共に爾兩人と何事が協議する運びに至つたのは、要するに神の攝理であらう。今日は眞面目に豫も耳を傾けるから、忌憚なく兩人とも意見を吐露せよ」

松若彦は嬉しげに笑を泛かべて、

「常になき我が君のお言葉、この老體も始めて甦つたごとき心地がいたします。誠に申し上げにくい事ながら、御世子國照別様はお行方が分らなくなりましたので、大責任の地位にある微臣、我が君に對して申し譯なく、また衆生に對しても會はず顔がございませぬ。それゆゑ我が君様には濟まぬ事ながら、内々探りを市

中に配り、搜索いたさせましたなれど、今にお行方が分りませぬ。誠に監督不行届きの罪、萬死に値いたしますれば、松若彦はこの責任を負うて、大老職を拜辭し、一切の政務を伊佐彦殿に譲らうと存じまする。何とぞ何とぞこの儀御聽許下さいませれば有難う存じまする」

國依「ハツハハハハ、倅が行方を晦ましたのは、豫はとづくに存じてゐる。別に心配する必要はない。如何に親なればとて、吾が子の思想まで束縛するわけにも行かない。その事については決して心配いたすな」

と平然として笑つてゐる。松若彦は國司の怒に觸れ、雷のごとくに叱咤さるるかと思ひの外、あまり平然たる態度に呆れ果て、返す言葉も出なかつた。

伊佐「わが君様、かかる重要問題が突發いたしましたのは、全く微臣等の罪のいたすところ、何とぞ嚴重なる御處分を願ひたうござりまする」

國依「去る者は逐はず來たる者は拒まずだ。何ほど引止めやうとしても、逃げやう逃げやうと考へてゐる者は駄目だ。倅も比較的大人物になつたと見えて、この狭苦しい鳥屋の中が厭になつたと見えるワイ。そして爾ら兩人骸骨を乞はむと申

し出てをるが、爾ら兩人が幽靈となれば後の國政は何ういたす考へだ。後任者を推薦して、向後の國政上支障なきまでに準備を整へ、しかして後骸骨を請へよ。

後繼者の物色は濟んだのか、それが先づ先決問題だ

松若「ハイ、恐れ入りました。しかしながらこの珍の國におきまして寡聞なる吾々の目より窺ひますれば、一人として國家の重職に適當な人物はないやうでござり

ます。いづれの役人も皆ハイカラ的氣分に襲はれ、眞面目に國家を思ふ者は一人として見當りませぬ。實に國家の前途は寒心に堪へませぬ

國依「アアさうすると、後繼者の適當な者がないと言ふのか。爾ら兩人は實に不忠不義の甚しき者だ。下りをれッ

と雷聲を發して嚴しく叱咤した。兩人は縮み上がり涙を押さへながら、口を揃へ

て、

「吾々は不肖ながら、主家のため國家のため身命を賭して國務に鞅掌いたしてを

ります。しかるに只今のお言葉、不忠不義とは心得ませぬ。たとへ國司なれば

とて、このお言葉に對しては何處までも明りを立てていたただかねば、吾々は一步

もこの場を退きませぬ」

國依「爾等、豫を詐つてゐるではないか。老齡職に堪へずとか、責任を負ひて辭任するとか言ひながら、國家の柱石たる人物がないと言つたでないか。後繼者なきを知らながら辭任を申し出づるは、全く國司家を脅かす者だ。いな豫をして困惑せしむるものだ。かかる心理を抱持してゐる爾兩人に對し、不忠不義と言つたのが、どこが悪い」

と一層強く怒鳴り立てられ、兩人は一たまりもなく縮み上つてしまった。末子姫はこの體を見て氣の毒がり、

「我が君様、暫くお待ち下さいませ。彼等兩人は國家を思ふのあまり、君の決心を促さむと、今のごとき詭辨を弄し奉つたのでございませう。何といつても珍一國の柱石、少々の過ちは赦しておやりなさいませ」

國依「赦されぬ此の場の仕儀なれども、最愛の末子姫殿の御仲裁とあらば止むを得ない、まづ盲従しておかうかい、アツハハハハ」

と最前の怒り聲は何處へやら、氣樂さうに大口開けて笑ひ出した。兩人はハツと

息をつぎ、縮み上つた鞆丸の皺をやうやく伸し始めた。

松若「年にも似合はず我が君に對し、不都合なことを申し上げ恐れ入りました。ございます。どうぞ唯今の私の失言は、廣き仁慈の御心に見直し聞直し下さいまして、従前の通りお召使ひを願ひたう存じます」

伊佐「微臣も同様、御使用のほどお願い申し上げます」

國依「ウン、ヨシヨシ、分れば別に文句はないのだ。モウこれからは心にもない辭令を振りまはずな。汝等兩人の内心は何處までも政權に戀々として、その執着を去る事は出来ないであらうがな」

兩人「ハツ」と顔を赤らめ、無言のまま俯むく。

末子「時に吾が君様、今日兩老が君の御出場を願ひましたる要件と申しますのは、すでに御承知の通り、世子國照別の行方が分りませぬので、一層のこと、春乃姫を後繼者となし、上下人心の安定を計らねばならないと兩老から申し出でまして、その御承認を得たいためでございますれば、よく御熟考下さいまして何れなりとも、都合よき御命令を仰ぎたいのでございます」

國依別は無頓着に、

「ウンさうだ、春乃姫さへ承認すればそれで可い。姫の意思まで強壓的に曲げることは出来ぬ。この問題は姫に聞いたが早道だらう」

末子「女が後を繼ぐとは前代未聞ではございませぬか、養子でもせなくちやなりません。さうすれば萬代不易の國司家は斷絶するぢやありませんか」

國依「三五教の教にも女のお世繼が良いと示されてあるではないか。女の世繼と

しておけば、腹から腹へ傳はつてゆくものだから、その血統に少しも間違ひはない。

もし男子の世繼とすれば、一方の妻の方において、夫に知らさず第二の夫を拵へ

てみた場合、その生れた子は何方の子か分らぬやうになつて来る。それだから却

つて女の方が確實だ、現に國照別だつて、豫の正胤であるか、或は末子姫殿が第

二の夫を私かに拵へてその胤を宿したのか、分つたものぢやないからのう、ハツ

ハハハハ」

末子姫は泣聲になつて、

「お情けない吾が君のお言葉、妾がそれだけ不信用でございませぬか。また誰かと

姦通かんつうをしたと仰有おつしやるのでございますか、残念ざんねんでございます』
と地ちに伏ふして泣なく。

國依くにより『八八八、嘘うそだ嘘うそだ、比喩たとへにひいたまでだ。貞操ていさうの神かみとまで尊敬そんけいされてゐる、家庭かていの女神めがみ様だ。豫よは決して毛筋けすぢの横巾よこはばほども、汝そなたの行状ぎやうじやうについて疑うたがつてはゐない。いな、大おほいに感謝かんしゃしてゐるのだ。マア心配しんぱいするな、比喩たとへだからのう』
と背中せなかを二三遍にさんべん撫なでさする。末子すゑこひめ姫ひめはやうやく機嫌きげんを直なほし、涙なみだと笑顔えがほを一緒いっしょに手巾けちで拭ふきながら、

『ホホホそれで安心あんしんいたしました。そんなら吾わが君様きみさま、妾わらはをどこまでも信用しんようして下くださいますね』

國依くにより『雀百すずめひやくまで牝鳥めんどりを忘れぬといつて、今は夫婦めうととも皺苦茶しわくちやだらけの爺婆ぢぢばばになつてしまつたが、時々ときどき昔むかしのあでやかなお前の姿まへを心こころに描えがいて、笑壺えつぽに入いつてゐるのだ。その時ときだけは實じつにはなやかな思おもひがするよ』

末子すゑこ『そりや違ちがひませう。昔むかしの事ことを思おもい出し、はなやかな氣分きぶんにおなりなさる肝かん心の玉たまはお勝かつさまぢやございませぬか』

國依「ウン、お勝もヤツパリ追想中の一人だ。しかしながら最も秀れて印象に残つてゐるのはヤツパリお前と結婚當時の艶麗な姿だよ、ハツハハハハハ」と娘や老臣の前で夫婦が、あどけなき意茶つき合ひを始めてゐる。松若彦、伊彦もつい話に引きずられて腮の紐をとき、粘着性の強い涎を七八寸ばかり、天井から蜘蛛が下つたやうに絲を垂れてゐる。

國依「春乃姫さま、最前から一同の話聞いて略承知だらうが、どうだ、世繼になる氣はないかな」

春乃「厭ですよ、人生長者となる勿れといふ諺もございませう。窮屈な籠の中へ祭り込まれて、心にもなき追従の雨をあびせかけられ、敬遠主義を取られ、二三政治家の傀儡となつて一生を送るといふやうな不幸な事はございませぬワ。妾はお父さまやお母アさまのお身の上を見て、實にお氣の毒な境遇だと同情の涙にくれてゐるのでですよ。兄さまもまたお父さまの二の舞をなさるかと思へば、氣の毒で堪らなかつたのですよ。さすがの兄さまも二三政治家の傀儡に祭り込まれるのは人間として氣が利かないといつて、風ををくらつてどつかへ逃げ出し、自由の

天地に横行闊歩する幸福な身分となつてゐられます。本當に賢明な兄さまですワ。妾も兄さまの兄妹、自ら知つて窮屈な不自由な身分となりたくはありません。之ばかりはお赦免を願ひたいものでございますワ」

國依「八八八八、さうだらう、さうだらう、父もかねて覺悟してゐたのだ。厭がる者を無理に押へつけるのは無慈悲だ。親たる者のなすべき事ではない。お前の好きなやうにしたが可からうぞ」

末子「モシ吾が君様、兄の國照別は家出をするなり、妹の春乃姫は世繼は厭だと申しましたならば、國司家はここに斷絶するぢやありませんか。あなたは如何なるお考へで左様な氣樂なことを仰せられます。ここは可哀さうでも春乃姫にトツクと言ひ聞かせ、國柱保存上、厭でも應でも、世繼になつてもらはねばなりませんまい」

國依「フン、別に春乃姫に限つた事はない。松若彦にも倅もあり娘もあることだから、一層のこと松若彦の倅松依別を吾が養子として後をつがせたら何うだ。それとも本人の意思に任すより仕方がない。松若彦、お前はどう思ふか」

松若彦はおどろいて、

「これはこれは、吾が君様とも覺えぬお言葉、未だ臣をもつて君となした例はございませぬ。左様なことを仰せられずに、ここは春乃姫様にお願ひ申し上げ、お世繼となつていたただきたいものでございます。ましてや愚鈍な倅、左様な事がどうして勤まりませう。こればかりは平にお斷わりを申し上げます」

國依「何事も惟神に任すのだなア」

末子「いつも貴方は惟神々々といつて、凡ての問題を葬らうとなさいますが、かかる重要事件はさう惟神ばかりではゆきまずまい」

國依「サアそこが惟神だよ。身魂の濁つた國依別の血統をもつて床の置物にせななくても置物になりたがつてるお人好しは三千萬人の中には三人や五人はキツとある。そんな心配は要らぬ。……どんな身魂がおとしてあるか分らぬぞよ……と御神諭にも現はれてるぢやないか。觀報をもつて床の置物召集令を發するか、新聞記者を呼んで廣告欄に載せさすか、幾らでも方法がある。それでゆかねば、お神力をもつて、氣の善い人物を物色するのだ」

と氣樂さうに言つてのける。

末子「それでは世が治まりますまい。匹夫下郎が俄かに高い所へ上つたところで、

國民の信用が保てますまい」

國依「國民は汝たちの思ふごとく吾々を尊敬してはゐないよ。また吾々の腹から

出た娘だといつて、心の底から敬意を拂つてゐるのではない。バラモンの色彩を

もつて包んでゐるから、やむを得ず、畏敬の念を拂つてゐるのだ。そんな事を思

つてゐると、時勢に目のない馬鹿者と、衆生から馬鹿にされるよ、アツハハハハ

ハ

松若「何と仰せられましても、かうなる上は春乃姫様をお願ひ申さねばなりません

ぬ

春乃「厭だよ厭だよ、忪へて頂戴よ」

伊佐「是非とも、姫様にお願ひ申し上げます」

春乃「エエ好かんたらしい爺だね。一度厭といつたら厭だのに、……ねーお母さ

ま、お父さま、人の意思を束縛することは罪惡ですからねえ」

末子「何といつてもこの場合、國司家と國家のために犠牲的精神を發揮して、世繼になつて下さい。母が一生の願ひだから……」

春乃「妾に注文がございますが、それを承諾して下さい、世子になつても宜しい」

末子「どんな事でも、あなたの要求を容れますから、世子になつて下さるでせうな。そしてその注文とはどんな用件ですか」

春乃「一、自由自在に城の内外を問はず出入し得る事、

一、吾が身邊に侍女または厳しき士を附隨せしめざる事、

一、自分の夫は自分にて選定する事、

一、化儀に依りては世子を辭し、理想の生活を營むやも知れざる事、

一、罪を寛恕する事、

一、大老、老中以下の任免黜陟をなす實權を有する事、

以上マアざつとこれだけの條件は、御承知を御兩親に願つておきたうございます
國依「面白い面白い、吾が意を得たりといふべしだ。さすがは春乃姫、偉いもの」

だ。これには兩老も參つただらう、アツハハハハハハ
松若彦、伊佐彦兩人は澁々ながら、已むを得ずとして春乃姫の條件を寄れ、世子と定め吐息をつきながら、神殿に感謝祈願の詞を奏上し、國司夫妻に慇懃に挨拶をなし、吾が館を指して歸り行く。

この日蒼空に一點の雲翳もなく、太陽の光は殊更清く、赤く、涼風おもむるに吹き來たり、百鳥の鳴く聲もいと爽やかに聞こえ、四邊の雰圍氣は何となく爽快に、天空よりは微妙の音樂響き渡り、芳香四方に薰じ、あたかも第一天國の紫微宮にあるの面持ちであつた。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一三・一・二三 舊一二・一二・一八 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第八章 春乃愛(一七五三)

高砂城の世子國照別が、何時とはなしに城内より姿を消してから、松若彦、伊

佐彦の兩人が必死となつてその搜索にかかつてゐた。松若彦は大老として大小の政治を監督し、伊佐彦は賢平、取締などを使役し、専ら國照別世子の搜索に全力を擧げてゐたが、深溝町俣帳場に車夫となつて化け込んでゐたことが新聞紙によつて喧傳されてからは一層打ち驚き、自ら變装して晝夜の別なく市井の巷を探り、車夫らしき者は片つ端から面體を查べ、家を外に活動を續けてゐた。そこへまた横小路の俠客愛州が不穩な演説をやり、ますます人心惡化の徵候が見えたといふので、眠むたい目を腫らして自ら探りの任に當つてゐた。

伊佐彦の妻樽乃姫は、四斗樽のごとき大きな腹を抱へた不格好な女である。そして彼は極端なるサデスムス患者であつた。さてサデスムスとは嫉妬でもなく憎悪でもなくして、自分の最も愛する異性に對し、普通一般人の想像だも及ばざるやうな殘虐な行爲を加へて、性欲の興奮と満足を得るといふ病的な人間をいふので、醫學上からかかる部類の人間を、サデスムスすなはち性的殘忍症といつてゐる。かくのごとく變態的性欲狂は、如何なる名醫も藥劑もほとんど治療の望みなき者である。樽乃姫はこの病氣に冒されてゐた。脂こく肥満した元氣な肉體をも

ち、性欲の興奮を抑へ切ることが出来ず、毎夜空闇に嫉妬の角を生やし、連夜夫伊佐彦の歸つて來ないのを見て、外に増す花が出来たのではあるまいか、自分は元來不格好な女性である、たうてい夫の愛しさうなスタイルではない。かう毎晩家を外にして、國家の老中ともあるべき者が、女房にも顔を見せないのは、キツとどつかの待合へどつかの女性を引張り込んでヤ二下つてるに違ひない。かうなれば可愛さ餘つて憎さが百倍だ。今に主人が歸つてきたら、ピストルに玉をこめ、いきなり眉間を狙つて一思ひに打ち殺し、他の仇し女の弄具となつた股間の珍器を油揚にして、狐に食はしてやらうと、恐ろしい瞋恚の炎を燃やし、悋氣の角を生やし、おみつ狂亂のやうなスタイルで髪を逆立て、眉毛を縦にして、吐息をつきながら待ちかまへてゐた。家臣や下女には事毎に八當りとなり、見るもの、觸るもの、癩にさはり、家具をブチ破り、箆笥の引出から夫の衣類を引出してはベリベリと引き裂き、夫の用ゐた食器や下駄、靴に至るまで、メチャメチャに壊してしまひ、どうにもかうにも、鎮撫の仕方がなくなつてゐた。そこへ高砂城から春乃姫様のお使だと言つて、伊佐彦に向かひ、一通の書状を送つて來た。

樽乃姫はその書状を手早く手に取り、表書を見れば、「伊佐彦老中殿、春乃姫より」と記してある。この文字を見るより、又もや髪を逆立てて、齒をくひしぱり、大きな鼻の孔をムケムケさせながら、バリバリと封押し切り、披いて見れば、いと美はしき水莖の跡、お家流でサラサラと流るごとくに書き流してある。樽乃姫は……サアいい證據を掴んだ……と息を喘ませながら讀んでゆくと、

一筆示しまゐらす。先日は妾が身の上につき色々と御親切に仰せ下され、一度は否まむかと思ひ候ひしも、國家の前途を考へ、また兩親の意見を斟酌し、貴殿の赤心を容れて、遂に貴意に従ふことと相成りたるは、既に貴殿の知らるところなり、今後は互ひに胸襟を開き、上下の障壁を斷ち、抱擁歸一互ひに心裡を打ち開け、あたかも夫婦間の愛情におけるがごとき親密なる態度をもつて、國家のため盡力いたしたく、この段貴意を得參らす、めでたくかしこ

と記してある。……サア、サデスムスの樽乃姫は怒髪天を衝き、たちまち殘虐性と

を發揮し、ピストル大劍を左右の手に携へ、行きがけの駄賃にと、家令、家扶、下女などを、或は狙撃し、或は斬り捨て、往來の人々に當るを幸ひ何れも敵とみなして、斬り立て薙ぎ立て、打ちまくり、……吾が怨敵の所在は高砂城内……と夜叉のごとくに髪振り亂し、泡を吹きながらあばれ行く。たまたま高砂城の馬場で駿馬に跨がり、こなたに向かひ驅け來たる夫伊佐彦に出會ひ、矢にはに馬の足を切り、馬腹に風穴を穿ち、その場に顛倒せしめた。伊佐彦は形相變つたその面體に、自分の妻とは知らず、賢平、取締を指揮して、苦も無くこれを捕縛せしめ、町はづれの牢獄に投込ましめた。

樽乃姫は侠客の親分愛州の繋がれてゐる隣の牢獄に、四肢五體を厳しく縛られ投込まれた。そしてほとんど半狂亂状態となり、無性やたらに喋り立ててゐる。

「エー、残念や口惜しや、妾に何科あつて斯やうな醜しき牢獄へブチ込んだのか。妾は勿體なくも高砂城において、老中と尊敬されたる伊佐彦が女房、樽乃姫様だ。しかるに賢平の奴、尊き身の上も知らず、盲滅法界に妾を縛り上げ、穢しい牢屋に投込むとは何の事だ。今に仕返しをしてやるから、思ひ知つたがよからうぞ。」

エー残念やな、クク口惜しやな。この縛めが解けたならば、かくのごときヒヨヒヨの牢獄、ただ一叩きに打ち破り、吾が夫を寝取つた春乃姫をはじめ、夫伊佐彦の生首を引き抜き、みんな事敵を討つて見せうぞ。坊主が憎けりや袈裟まで憎い。國依別の國司も末子姫、松若彦も片つ端から斬り立て薙ぎ立て、恨みを晴らさでおかうか。モウかうなる上は樽乃姫は鬼だ、悪魔だ、夜叉明王だ、阿修羅王だ。この世の中を泥海にしてでも、恨みを晴らさにはやくもものか。とキリキリキリと齒切りをかみ、晝夜の別なく、同じ事を繰返し繰返し吠鳴り立ててゐる。隣室に繋がれてゐる愛州は、樽乃姫の狂的獨語を聞いて、興味を感じ歌ふ。

□ うば玉の暗の世なれば曲津神
牢屋の中まで忍び來るかな
サデスムス病みて夜晝あれ狂ふ
烈しき性欲に狂ひタルの姫

吾われは今いま正義せいぎのためために捕とらへられ

ままならねども心こころは平たいらか

吾わが身みをば殺ころす魔ま神がみの來きたるとも

指ゆびもさされぬ魂たまの命いのちは

國くにさまや幾いく公こう淺あさ公こう其その外ほかの

眞ま人びとはいかに世よを過すごすらむ

ヒルの國くにヒルの都みやこを後あとにして

思おもひもよらぬ惱なやみする哉かな

暗やみの世よのいと深ふかければ黎明れいめいに

近ちかきを思おもひて獨ひとり樂たのしむ

世よの中なかに眞まことの神かみのゐます上うへは

救すくひ玉たまはむ吾われの身み魂たまを

今いましばし牢いとや屋やの中なかに潛ひそみつつ

神かみにうけたる靈みたまきよめむ

可憐なる樽乃の姫の繰言を

聞きて世のさま明らか

樽乃姫しばらく待てよいかめしき

鐵門の開く春や來たらむ

汝が身を救ひやらむとあせれども

ままならぬ身の如何に詮なき

かく口吟んでゐる。

そこへ盛装を凝らした妙齡の美人が從者をも連れず、牢屋の巡視を名目に愛州の在所を訪ねてやつて來た。數多の科人が澤山の牢屋の中に放り込まれてゐるの
で、一目も見たことのない春乃姫には、どれが愛州だか見當がつかなくかつた。春乃姫は淑やかな聲にて歌ひながら愛州を尋ねてゐる。

ここは名に負ふ珍の國

高砂城の町はづれ

罪ある人も罪のなき

人も諸共盲たる

司が縛りあつめ来て

無理に投込む地獄道

珍の都に名も高き

白浪男の愛州は

どこの牢屋に潜むやら

乾兒の源州その他の

數多の乾兒に頼まれて

汝を救ひに來た女

名乗れよ名乗れ愛州よ

仁と愛とは天地の

神の尊き御心ぞ

今常暗の世の中は

表に愛を標榜し

陰に潜みて惡をなす

牢屋にいます愛州は

惡を表に標榜し

普く愛を發揮して

市井の弱者を扶けゆく

神か佛か眞人が

かかる尊き侠客を

おのれの都合が悪いとて

あらぬ罪名をきせながら

牢屋に投込む憎らしさ

これぞ全く醜司

表に忠義を飾りつつ

己が野望の妨げと

なる眞人を悉く

苦しめなやまし吾が望み

立てむがための企み事

看破したれば春乃姫

人目を忍び今ここに

現はれ來たりて愛州の

命を救ひ助けむと

心を千々に碎くなり

早く名乗れよ愛の神

愛の女神は今此處に

汝が在所を尋ねつつ

下り來にけり逸早く

名乗らせ玉へ愛の神

珍の都の男伊達

珍の都の男伊達

と歌ひつつ愛州の牢屋の前に來たる。愛州はこの歌を聞くより、驚喜しながら、

やや疲れたる聲にて、

雪霜にとぢこめられし白梅も

春乃光に會ひて笑はむ

曲まがりたる事ことしなさねど醜しこがみ神かみの

忌き憚たへんにふれて捕とらへられける

吾わが身みをば救すくひ助たすくる春はる乃の姫ひめの

あつき心こころに涙なみだこぼるる

屋やに打うち向むかひ、
春はる乃の姫ひめはこの歌うたを聞きくより、愛あい州しゅうなることことを悟さとり、
手て早はやく錠ぢやうをばづし、暗くき牢らう

花はなは開ひらき木この葉はのめぐむ春はる乃の姫ひめ

いざ導みちびかむ花はなの御み園そのへ

愛あい州しゅう 有あり難がたし辱かたじけなしと述のぶるより

宣のる言こと靈たまを知らぬ嬉うれしさ

「いざ早く出でさせ玉へこの牢屋

醜しこの司つかさに見つけられぬ内うち」

「男伊達心ならずも汝が君の

恵めぐみにほだされ牢屋を出でむ」

と返しながら春乃姫に導かれ、非常門口より兩人手に手を取りて夜陰に紛れ、何れともなく落ちのび、二人は一生懸命に北へ北へと町外れの道を、轉こけつ輓まろびつ、日暮の森へと驅けつけ、古ぼけた鎮守の宮の床下に夜露を凌ぐこととなりぬ。

愛州「尊たふとき姫様の御身をもつて、俠客けふかくごとき吾々一人を助けむがために御苦勞を
かけまして、誠まことに感謝かんしゃに堪へませぬ。この上は如何なる事がございませうとも、
命いのちの親おやの貴女様、命いのちを的まとに御恩返しを仕ります」

と改めて感謝の辭を述べた。

春乃「あなたは俠客の愛州さまとは此世を忍ぶ假の御名、あなたはヒルの都の楓別様の長子國愛別命様でございませうがな」

と星をさされて、愛州はハツと胸を押へ、

「イエエ決して決して左様な尊い身分ではございませぬ。ホンの市井のならず者、博奕を渡世に致す酢でも蒟蒻でもゆかない、ケチな野郎でござえやす。勿體ない、そんな事を言つてもらひますと、罰が當つて目が潰れるかも知れませぬよ、アツハハハハ。御冗談も可いかげんにして下さいませ」

春乃「イエエお隠しには及びませぬ。吾が兄國照別からソツと手紙が參つてをります。その手紙によれば、横小路の俠客愛州といふのは自分の兄弟分だが、實際の素性を明かせば、ヒルの國の城主の御長子國愛別様だと書いてございましたよ。そしてお前も理想の夫が有ちたいだらうが、兄の目から見たお前に適當な夫は、あの愛州様だと書いてございましたもの。あなたは何ほどお隠しになつても、兄が證明してゐるから駄目でございますよ」

愛州「拙者やア、國さまとか、國照別さまとか、そんな尊いお方と一面識もござ

いやせぬ。ソラおほかた人違ひでございやせう。愛といふ名はわつち一人ぢやございやせぬ。どうか、お取違ひのないやうお願い申しやす」

春乃姫はポンと肩を叩き、

「國愛別様、駄目ですよ、お隠しには及びませぬ。サアこれから横小路のお館へ歸らうではありませぬか。妾は源州さまにキツと親方を近い内に手渡しすると、約束がしてあるのですから、是非一度は源州さまに、あなたの身柄をお渡しせねばなりませんからね」

愛州「ヤア御親切は有難うございます。しかしながら只今となつては、破獄逃走者としてズキがまはり、吾が館は賢平取締をもつて、十重二十重に取まいてをりませう。左様な危険な所へ歸るのは考へものですな。世のため、人のため命を捨てるのは、少しも惜しみませぬが、ムザムザと命を捨てるのは残念でございませうから……」

春乃「御心配なさいませぬ。妾は不肖ながらも高砂城の世繼春乃姫でございませう。たとへ幾萬の捕手が來たるとも、ただ一言にて解散をさせてみせませう。そして

此後は役人どもに指一本さへさせませぬから、御安心なさいませ」

「有難うございます、左様なればお言葉に従ひ、吾が家へ歸りませう。送つてもらふのも何だか乾兒の前、恥づかしいやうな氣分が致しますから、あなたはどうぞお歸り下さいませ。私はボツボツ乾兒が待つてゐませうから、吾が館へ歸るところに致しますせう。何分後のところは宜しくお願いいたします」

「左様なれば、妾はこれから城内へ歸ることにいたします。今しばし城内に止り、世子の位地に立つてゐなければ、何かの都合が悪うございますから……然しながら何時までも清家的生活は致したくありませんから、將來は夫婦……いな兄妹のごとくなつて、世のために盡さうではございませぬか、ねえ國愛別様」

「ハイ、有難うございます」

と右と左に立別れ、朧夜の影に包まれてしまつた。

(大正一三・一・二三 舊一二・一二・一八 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第九章 迎酒（一七五四）

横小路の侠客愛州の留守宅には、源州、平州、藤州、橘公、三州、泉州、相州、空州の兄分株が數百人の乾兒共を集めて、親分の歸り來たるの遅きにやや不安の念を起し、冷酒を煽りながら善後策について協議を凝らしてゐる。

平「オイ源州の兄貴、親分が捕まつてから今日で十日目になるが、まだニヤンが屁こいたとも便りがないぢやないか。われわれ乾兒として此のまま坐視することア出来まい。何とか救ひ出す工夫はあるめえかな」

源「まア今日一日は待つたが可からうぞ。畏れ多くも高砂城の春乃姫様が仲裁を遊ばし、……今すぐにといふわけにも行かぬが、十日の間にはキツと救ひ出してやらう……と大勢の前で立派におつしやつたのだから、滅多に間違ひはあるめえ。俺たちは姫様の尊いお言葉を信じ、おとなしく待つてるのだ。その代り今日中待つて親分が歸えねえとすれば、われわれも安閑としては居られねえ。味方を一人も残らず集め、非常手段と出かけるつもりだ。まア少時のところ俺に免じて待

つてくれ』

平「ウンそれもさうだが、あんな事を言つて一時逃れに俺たちを胡魔かしたのぢやあるめいかな。それならそれで俺たちにも覺悟があるからなア』

岩公は側より、

岩「オイ兄貴心配するな。高砂城の春乃姫様といつたら、仁慈深い、そして時代を解した、立派な思想を持つた、人類愛主義の女神様だ。たとへ一日や二日遅れても、キツとおつしやつたことは、命に代へても履行して下さるから、ここはおとなしく待つてをるがよからうぞ』

平「老耄の末席の分際として偉さうなと言ふない。ナニ汝がそんな事分らうかい。春乃姫様なんて、拜んだ事もないくせに、知つたかぶりを吐くない。こんなところへチヨツカイを出す汝の幕ぢやない。あつちへ行つて便所の掃除でもやつて來い』

岩「ソリヤ、兄貴の言ふことに反くわけにや行かぬから、便所の掃除もせぬことはないが、今日は乗るか反るかの肝心要の評定の場合ぢやないか。いかに末輩の

俺だつて、大親分の身内に違ひない。親分を思ふ赤心は兄貴だつて、末輩だつて、チツとも變りはないぞ。外の問題ならば順序を守り、こんな所へツン出て意見は述べないが、親分の一身上に關する大問題だから、わつちの意見も言はしてくれ
たまへ」

平「老耄爺の古い頭で、どうして重要な問題の解決が着くものか。チヨン猪口才な、そつちへ行つてをれつたら……本當に五月蠅奴だな。この平さまはな、汝は何と思つてるか知らぬが、背水會の創立者だぞ。源州の兄貴と兩人が、伊佐彦の老中に頼まれて、背水會の元を作つたのだ。大親分の愛州さまは俺達が頭に戴いてるものの、背水會の創立者はやつぱり俺達だからな。いはば俠客の神様だ。俠客には俠客の法があるのだから、汝等は順序を守つて、すつ込んでをれ」

藤「オイ平州の兄貴、さう沒義道にこき下ろすものぢやない。この岩州だつて、普通の乾兒とは、ちつたア違つたところがあるよ。かふいふ大切な場合には、誰の意見でも参考のために聞いてみる必要があらうぞ」

平「さうかも知れねえが、何だか蟲の好かねえ面をしゃがつて、横合から茶々を

入れやがると、ムカついて堪らねえのだ。この岩州はヒヨツとしたら寒犬かも知れないよ。何だか目付が怪しうて仕方がねえ。しかしながら親分が何時も「岩々」といつて腰巾着のやうにどっこへ行くにも荷持に連れて行くのだから、親分にどんなお考へがあるか知れぬと思つて、俺たちや見逃してるのだが、實に癩に障る奴だ。高砂城の老中見たやうな根性魂を下げてるやがるのだからな」

藤「エライところへまた舌鋒が脱線したものだな。そんな話よりも焦眉の急を要する問題は親分の一身上に關する事だ。源州の言ふ通り今晚の十二時まで待つて見て、親方の顔が見えないとすれば、いよいよ足装束を整へ、非常手段をオツぱじめるのだなア」

平「そんならさうに定めておかう。オイ兄弟、乾兒連中に、何時でも發足の出来るやうに準備を命じてくれ。そして酒樽の鏡を抜いて、今出立といふ時に呑んで出るやうに準備をしておくのだなア」

三州、泉州、相州、空州の幹部連は裏の大部屋に集まつてる數百人の乾兒に向かつて右の趣を傳へ、用意にかからしめた。

源州、平州、藤州、橘公の幹部連は元氣をつけるため、酒を爛しながら數の子の肴でチヨビリチヨビリと呑み始めた。だんだん酔ひが廻つて來て互ひに氣焰を吐き出した。

橘公廻らぬ舌で、

「アア、思へば思へば侠客なんて、つまらねえもなアありやしねえワ。なア兄弟、よく考へてみる。喧譁して切られても痛いといふわけにやゆかず、殺されても逃げるわけにもゆかねえし、本當に引合はぬ商賣ぢやねえか。もし卑怯な言葉でも出してみよ、彼奴ア「なきがら」だといって、仲間の奴から擯斥され、先代の親分の名まで汚し、また乾兒の面に泥を塗らねばならぬ。さうすりや、乾兒の巾が利かなくなつてしまふ。彼奴の親分は切られて痛がつたとか、死にがけに吠えたとか歌つたとかいはれて、「なきがら」「なきがら」と貶され、乾兒の渡世が出来ねえやうになつてしまふ。それを思へば喧譁して腕の一本くらゐ落とされても、痛さを恠へて無理に笑顔を作り、劫託を竝べて胡魔かさねばならず、本當に世の中にこれくらゐつまらねえ商賣はねえぢやねえか」

平州ヅブ六に酔ひながら、

「さうともさうとも、橘のいふ通り、本當に詰らねえな。伊佐彦の奴、對命舎や投槍派が恐ろしくなつたものだから、俺たちを甘く釣り込みやがつて……國家の保護に任ずる者は、腐敗墮落の今日の中に、侠客を置いて他に無し……などと煽て上げ、背水會を組織してくれたら充分の保護を與へ、凡ての便宜を與へてやると吐かしやがつたものだから、珍の國の大親分六十餘人に檄を飛ばし、……伊佐彦老中の請求だから、一度珍の城下へ集まつて、背水會の組織をしてくれまいか……と言つたところ、どの親分も二つ返事で賛成をしてくれたのだ。侠客といふ者は、時の權威者の鼻つ柱を打挫くのが天職だから、ヨモヤ老中の走狗にならうといふ親分は一人もなからうと信じてゐたのに、エーエ、豈圖らむや妹計らむやだ。今の侠客ア、魂が脱けてゐるから、伊佐彦老中のお聲がかりだと聞いて、欣喜雀躍して珍の都のスカタン・ホテルへ、蟻の甘きに集ふごとくやつて來たのだ。その時の親分衆の勢ひつたら素晴らしいものだった。これだけの者が協心戮力して當らうものなら、どんな事でも成功疑ひなし、と思はれたよ」

源「最前から聞いてをれば、自分一人が背水會を組織したやうに言ってるが、その衝に當つた者は汝ばかりぢやねえ、俺が先頭ぢやねえか」

平「ウーン、それもさうだ。サアこれから兄貴の番だ。酒の肴に一つ兄弟の前で、背水會組織の顛末を聞かしてやつてくれ、オイ兄弟、ずるぶん面白いぞ」

源「望みとあらば言つてやらぬ事もない。俺たちの勇氣といふものは大したものだぞ。エー實のところは此の源州の所へ、伊佐彦老中のところから頼みに來たのだ。それで平州と相談した上、珍全國の親分株を集め、スカタン・ホテルへ行つて、それから老中へ電話をかけ、横波局長に照會したところ、横波の奴、吃驚しやがつて、……決して上の方から侠客なんか依頼したこたアない。そちらの方に用があるなら、老中局へやつて來い……なんて、木で鼻を擦つたやうな挨拶をしやがるのだ。俺たち二人は六十餘人の親分に對し横波がそんなこと言つたと、どうして言はれうか。切腹でもして言譯しなくちや男の顔が立たねえ。そこでこの平州を引連れ、俺はドスを腰にブラ下げ、平州はピストルを懷にして、老中局の玄關にあばれ込み……横波局長を此所へ引きずり出せッ……と呶鳴つたところ、

横波の奴吃驚しやがつて、チツとも面出しやがらぬ。受付に萎びた爺が一足けつ
かつて、……マアマア何用か知りませぬが私が承りませう……といひやがる。
……エー薬罐親爺奴、ぐづぐづさらしてると捻りつぶしてやる……と、平州がやつ
たところ、親爺奴縮み上りやがつて、……私は大泡吹造と申します……と言ひや
がつて、大泡吹造とは醜偽院の偽長もやつてみた奴だなアと思ひ出し、……そん
なら親爺、横波に俺の出で来た用件をトツクリと話して、侠客の面を立てるやう
にするか、でなくちやこつちにも覺悟がある……と槍を一本入れて、スカタン・
ホテルへ歸つて來ると、老中局から十數臺の自動車を持つて、俺達一行を迎へに
來やがつたのだ。それから始めて、局内の評定所へ這入つてみると、生れてから
見た事もないやうな美しい毛氈を布き、眞白な頭をしたブルケーとかブルカーと
かいふ奴がやつて來やがつて、挨拶をしやがる。後から考へてみると、此奴が松
若彦の命令によつて、珍の國の政權を握つてる白頭翁だと分つたので……何だ老
中といふ者はこんなものかい……とやや輕悔の念が咄嗟に湧いて來た。そこへ横
波が恐る恐るやつて來て、米搗バツタのやうにペコペコ頭を下げ……皆さま遠方

ご苦勞様でございます。先刻はエライかけ違ひで失禮いたしました……と挨拶を組織する事になつたのだ。何と偉いものだらう』

藤 〇それだけ上の奴から背水會を力にしてる以上は、吾々に對しても餘ほど便宜とか特典とか與へてくれさうなものだのに、博奕を打てばやはり人竝みに牢獄へブチ込みやがるなり、喧譁して人を斬れば、刑法だとか何とかいつて刑場へやられるなり、自分の都合の好い時は背水會背水會と言つて、無茶苦茶に扱き使はれ、本當に彼奴等の機械に使はれてるやうなものぢやないか。今度の親分だつて、背水會の大頭たる以上は、チツとは大目に見さうなものだのに、牢獄へブチ込みやがつて馬鹿にしてる。こんなことならモウ背水會を叩き潰し、昔のままの俠客でやつて行かうぢやないか。本當に詰らねえからなア』

源 〇さうだ、俺も同感だ。なア平州、三州、泉州、相州、空州も贊成だらう』

〇尤も尤も、贊成、贊成』

と手を拍つて迎へた。

平「ウエー、大分に酔ひも廻つたが、最早子の刻だ。親分がいよいよ歸らねえとすると、全體を引き連れて、非常手段と出かけやうぢやないか。そして序に俺たちを詐りやがつた春乃姫を血祭りにして來うぢやないか。それぐらゐな勇氣が無くては侠客と言はれないワ」

としきりにメートルを上げてゐる。

源「さう急ぐには及ばぬぢやないか。半日や一日遅れたつて、どういふ御都合があるか知れないワ。かう何時でも、出動準備が出來てるのだから、勢揃ひの上は満を持して考へねばなるまいぞ。一旦弦を離れた矢は再び歸らないからの。猪突主義も結構だが、却つて親分に迷惑を及ぼすやうな事があつては、乾兒としての道が立たないからのウ」

平「卑怯なことを言ふない。もはや戦闘準備が整うた上はぐづぐづしてゐられない。士氣を沮喪する虞れがある。サアこれから鏡を抜いて乾兒どもの元氣をつけ、暴虎馮河の勢ひで出陣することにしようかい」

源州も止むを得ず、平州の舌劍に切りまくられ、不承々に贊成をしたので、

いよいよ出陣の準備として四斗樽の詰を抜き、乾兒は各杓に掬うては呑み掬うては呑み、部屋の中は山嶽も吹き飛ばす底の活気がみなぎつて来た。そこへ表戸を叩く者がある。岩公は戸の入口に神妙に番をしてゐたが、足音や戸の叩き方によつて大親分の歸つて来たことを悟り、錠をはづして、表戸をガラリと引開け、

「ヤ、親分、歸つて来たか、待ち兼ねたよ」

と小聲でいふ。愛州は、

「ヤ、失禮しました。やうやくのことで、春乃姫様の計らひで歸ることが出来ま

した。ずゐぶん奥は賑はしいやうですな」

岩「實のところは、親分が今日十二時に歸らなかつたら、乾兒一同を引連れ、非常手段をやるといふので出陣の用意をしてるのです。マア危機一髪の所へ歸つてい

ただき互ひに結構です」

と囁きながらズツと奥へ入り、

「オイ兄貴連、喜びたまへ。親分が無事歸つて来られたぞ」

源州はじめ一同の者は、

「ナニ、親分がお歸りといふのか、ソラ有難い。門出の酒が歓迎の酒となつたのか、何とマア嬉しい事が出来て来たものだなア。ああ惟神靈幸倍坐世」
と嬉しさのあまり、常には神佛に手を合さなんだ侠客連も思はず知らず合掌した。少時すると愛州の館は山嶽も崩るるばかり、「萬歳」の聲が雷のごとくに響き渡つた。

(大正一三・一・二三 舊一二・一二・一八 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第一〇章 宣兩〔一七五五〕

城下外れの極めて淋しい河原町の餛飩屋の店に、四五人の若者が餛飩を肴にコップ酒を呑みながら、配達して来る新聞を見て、いろいろと話の花を咲かしてゐる。

甲「オイ、ずるぶん世の中も物騒になつて来ただないか、このごろの新聞をみて

みよ。何時^{いつ}とても吾^{われ}々の肝^{きも}を冷^{ひや}すやうなことが、一^{ひと}つや二^{ふた}つは出^でてゐるだないか。ヒルの都^{みやこ}の大地震^{おほざしん}にエトナ山^{ざん}の破裂^{はれつ}、……といひ又^{また}、珍^{うづ}の都^{みやこ}の國照^{くにてる}別^{わけ}様^{さま}が顯^{けん}要^{えう}の地位^{ちゐ}を嫌^{きら}つて人力^{じんりき}車^{しや}夫^ふとなり、あるひは老^{らう}中^{ちゆう}の岩^{いは}治^{はる}別^{わけ}が陰^{いん}謀^{ぼう}露^る顯^{けん}したとか何^{なん}とかで姿^{すがた}を隠^{かく}し、伊^い佐^さ彦^{ひこ}老^{らう}中^{ちゆう}の家^{かない}内^{たる}樽^の乃^の姫^{ひめ}といふ大^{たい}兵^{ひやう}肥^ひ滿^{まん}の樽^{たる}女^{をんな}はサデスムスとか何^{なん}とかに罹^{かか}つて、人^{ひと}を斬^きる打^うつ、そして牢^{らう}獄^{ごく}へ入^いれられる。横^{よこ}小^こ路^{こう}の親^{おや}分^{ぶん}は牢^{らう}へぶち込^こまれるといふ大^{おほ}騒^{さわ}ぎだ。そして春^{はる}乃^の姫^{ひめ}様^{さま}が大^{たい}變^{へん}なハイカラで、そこら中^{ちゆう}を馬^{うま}に乗^のつて驅^かけ廻^{まは}り、その上^{うへ}彼^あ方^{ちら}に強^{がう}盜^{たう}、こちらに火^{くわ}災^{さい}、殺^{さつ}人^{じん}、姦^{かん}通^{つう}、會^{くわい}社^{しや}銀^{ぎん}行^{かう}の破^は綻^{たん}、重^{ぢゆう}役^{やく}の持^{もち}逃^にげに詐^さ欺^ぎ、破^は産^{さん}、ル^るーブル紙^し幣^{へい}の落^げ、本^{ほん}當^{たう}に世^よの中^{なか}はモウ末^{すゑ}だな。この先^{さき}、俺^{おれ}等^{たち}やどうして生^{せい}活^{くわつ}を續^{つづ}けたら良^よからうかと心^{しん}配^{ぱい}でならないワ」

乙^{おつ}「それだから、衆^{しゆう}生^{じやう}一^{いつ}般^{ぱん}が生^{せい}活^{くわつ}難^{なん}の聲^{こゑ}に脅^{おび}かされ、人^{じん}心^{しん}は日^ひに惡^{あく}化^{くわ}して、ソシアリズムやアナーキズムが蔓^{まん}延^{えん}するのだよ。これも時^じ代^{だい}の影^{えい}響^{きやう}だから仕^{しか}方^{かた}がないな」

「だといつて、俺^{おれ}たちア、やつぱり家^か族^{ぞく}制^{せい}度^どの國^{くに}に生^うまれたのだから、家^か族^{ぞく}制^{せい}度^どの破^{やぶ}れるやうな主^{しゆ}義^ぎには贊^{さん}成^{せい}したくないのだ。私^{しゆう}有^い財^{ざい}産^{さん}撤^{てつ}廢^{ぱい}とか土^と地^ち國^{こく}有^{いう}とか、い

るいろの議論が新聞紙上にのつてゐるが、困つた社會になつたものだな」

「別に困る必要はないだないか。偉さうに汝いつてゐるが、猫額大の土地も所有せず、嬢の湯巻まで質においてる分際として、家族制度が好きだの嫌いだなんて、柄にないこと吐かない。俺等はソシアリズムでも、アナーキズムでも結構だ。人間は生の執着を持つてゐる以上は、完全なる生活を営まねば、牛馬にも劣るやうな

ことでは人間を廢業するより外に仕方がないからかう」

丙「ウン、そらさうだ。俺だつて朝から晩まで營々兀々と、ブルのためにこき使はれ、労働と賃錢の不統一のため、悲惨な生活を送つてゐるのだ。嬢の着替一つあるでなし、正月が來ても子供に下駄一足買つてやるわけにもゆかず、大勢の家内が高家賃を取られて、三疊敷や二疊敷に雑魚寢をしてる生活に甘んじてゐるのだから、本當に世の中に生存の價値も何もあつたものでないと思ふよ。三五教の教に、神が表に現はれて善と惡とを立分けるとかいふ事があるさうだが、早く救ひの神が現はれて、この暴惡な殘虐な、吾よしの強い者勝ちの世の中を立直し、四民平等の幸福と平和を得るところの世の中に會ひたいものだ。大きな聲でこん

な話をすれば、すぐ取締りに取捉まへられて、臭い飯を食されるなり、本當に弱者となれば頭の上らない時節だなア

乙「それだから、アナーキズムやソシアリズムが頭を擡げ出したのだ。神が表に現はれる現はれると昔から言つて來たが、ねつから現はれさうにないぢやないか。救主は東方の天より現はれるとか聞いているが、根つから吾々を救うてくれる光明も神靈も現はれた例もなし、本當に苦しい暗黒な世の中だな」

かく話すところへ宣傳歌の聲が聞こえて來た。

☐ 神は此世の救主 嚴と瑞との二柱

常世の暗をはらさむと 天津空より降ります

助けの神と現はれて 善惡邪正を立分ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

直日の御靈現はれて 惡を戒め善を賞め

貧しき人を富しつ 生活難に苦しめる

可憐の民を救ふなり
誤解と矛盾に充たされし

悪魔の世界を射照らして
松の神代に立直す

救ひの神は天にあり
恵みの神は地にます

天と地との眞中に
生ひ育ちたる民草は

いづれも神の御子ぞかし
神は汝等の親なるぞ

わが子の悩み苦しみを
如何でか見すて玉ふべき

神には神のそなへあり
暫く待てよ神の子等

五六七の柱現はれて
光りと榮えと喜びに

充てる社會を建設し
神人和合の瑞祥を

來たし玉ふは目のあたり
心を研き身をきよめ

その日の境遇に甘んじて
天地の時を待てよかし

旭は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

星は御空にきゆるとも
山裂け海はあするとも

たとへ地震強くして
大廈高樓たちまちに

地上に壊れ崩るとも 恵みの神は誠ある

可憐の御子を救ふべし 喜べ勇め四方の國

山野に生ひたつ人草よ 山野に生ひたつ神の子よ

神は汝と共にあり 勇めよ勇めみな勇め

勇んで時の至るをば 神に祈りて待てよかし

ああ惟神々々 神にまされる力なし

神の恵みに如くはなし 吾は此世を教へゆく

三五教の宣傳使 齋苑の館に現れましし

瑞の御靈の大神の 聖き教を世に弘く

宣べ傳へゆく神司 何れの人も世の中に 吾が目の前に集まりて

合點のゆかぬ事あらば 吾等は神の御使

深き教を聞けよかし 完全に委曲に諭すべし

神に代りて何事も 御靈の恩頼を願ぎ奉る

ああ惟神々々

御靈の恩頼を願ぎ奉る

かく歌ひつつ年若き女宣傳使が店の前を通り過ぎた。甲乙丙丁戊等は宣傳使の後を追つかけて、どこまでもと従いて行く。宣傳使は被面布をかぶり、蓑笠をつけ、手甲脚絆草鞋の扮装にて金剛杖をつきながら、足拍子を取り、優しき聲にて、五人の男の追跡するのも知らず進み行く。

向かふの方より馬に跨がつて、やつて来たのは横小路の侠客愛州であつた。愛州は馬上ながら四ツ辻に立ち、聲高らかに歌ひ出した。

珍の都の人々よ 早く眼をさませかし

物質文明の世の中は もはや終りとなりけり

これの御國はその昔 高天原に現はれし

桃上彦の天降りまし 恵みの露を降らせつつ

汝等の祖先を守りまし 神人和樂の神國を

いや永久に樹て玉ふ 珍の御國ぞ神の國

四民平等博愛の 聖き教を樹て玉ひ

上下和合し官民は

一致の歩調を取りながら

世は安國と平らけく

治まりゆきし御代なれど

近き御代より常世なる

怪しき國の曲教

蔓り來たりて珍の國

先づ第一に上に立つ

醜の司の魂を

物質本位に惑溺し

優勝劣敗吾よしの

教をしきりに吹き込みて

衆生の痛苦は白河の

夜舟と枕を高くして

大廈高樓に安臥なし

尸位と素餐の譏りをば

受けつつ知らぬ曲津神

上のなす事下倣ふ

上流濁れば下にござる

中間連中はことごとく

上流階級に壓倒され

國家の中堅ことごとく

影を隠せし今日は

如何にせむ術なきままに

吾等は神に祈りつつ

苦しむ衆生を救はむと

背水會を組織して

義侠をもつて任じつつ

衆生の權利を壟斷し 私利を營む奴原の

鼻つぱしをばねぢ折りて モルヒネ注射を斷行し

なほも自ら悟らずば 吾に正義の劍あり

珍の御國の御爲に 尊き命を犠牲とし

衆生に代つて大掃除 敢行せむと思ふなり

仁義に富める人達よ 義侠に強き諸人よ

吾等が傘下に集まりて 震天動地の大業に

参加し玉へよ時は今 天と地とは轉倒し

上と下とは逆轉し 善惡正邪を誤りて

悪人ますます世に榮え 善人將に亡び行く

この現状を見ながらも 吾が身の安全計るため

袖手傍觀する奴は 姿は人間なればとて

體は畜生の容物だ 早眼をさませ眼をさませ

虚偽と猜疑と罪惡に 満ちたる舊衣を脱ぎ捨てて

仁慈と進歩と幸福に

満てる新衣と着替へかし

正義に刃向ふ刃なし

誠を辿る吾々に

神の守りのなからむや

衆生よ衆生よ奮起せよ

起つて醜類打ち倒せ

汝等起つて倒さずば

たちまち汝等亡びなむ

人間興亡の黄泉坂

振へよ振へ今の時

と唼鳴つてゐる。女宣傳使は愛州の姿を被面布起しに眺めて、何思つたか、コソと横道へ姿を隠してしまつた。これは春乃姫が宣傳使と變装して、市中を宣傳に廻つてゐたのである。女宣傳使に従いて來た五人の男は、愛州の演説に氣を取られ、女宣傳使の行方を見失つたのも氣がつかなかつた。愛州は馬の頭を立て直し、横小路の吾が家の方面を目がけて、

神が表に現はれて

善惡邪正を立別ける

との御教は昔より
今に傳はりましませど

今まで神の現はれし
例を聞きし事はなし

物質界の現代を
救うて神の天國を

建設するは肉體の
神に等しき眞人の

力でなければ世の中は
決して立つては行かうまい

吾等はそのをば感じしゆ
ヒルの國をば後にして

これらの都に進み入り
先づ第一に吾が身をば

犠牲となして濟世の
模範を示し世の中の

眠れる僧侶や宣傳使
比丘や比丘尼の目をさまし

此世の泥をすすがむと
覺悟をきはめ俠客の

身分となりて朝夕に
人類愛護の本旨をば

遂げむが爲に勵むなり
ああ惟神々々

神は萬物普遍なる
誠の靈にましまして

人は天地の經綸を
司るべき器なり

神人茲に合一し

無限絶對無始無終

太き力を發揮すと

三五教の御教に

示させ玉ふを自ら

事實に現はしたためさむと

思ひ立つたる侠客の

義侠にみちし愛州ぞ

如何なる妨害あるとて

恐るな屈すなためらふな

神は汝と共にあり

神の守りし人の身は

如何なる曲も襲はむや

いざ諸人よ振ひ立て

勇めよ勇め世の爲に

寶も名譽も打ちすてて

來たらむとする神の世の

犠牲となつて盡せよや

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ

と歌ひながら己が館を指して、馬上豊かに歸りゆく。道筋は人の山を築き、市中の人氣は鼎の沸くが如くなりける。

(大正一三・一・二三 舊一二・一二・一八 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第一章 氣轉使（一七五六）

都大路の中心、赤切公園の眞中に浮浪階級大演說會が始まつた。數多の取締は出口入口を固め、角袖は聽衆一人に一人ぐらゐな割合で數千人繰り出だし、物々しき警戒振りを現はしてゐる。浮浪階級演說會の會長ブルドックは獅子の咆哮するごとき聲にて、

「取締何ものぞ、法規何ものぞ」

と言はむばかりの勢ひをもつて、決死的大演說會を始めてゐる。

ブルドック「諸君よ諸君よよく聞け 世は常暗となつて來た

日月空に晃晃と 輝きわたれど如何にせむ

中空に村雲ふさがりて さも晃々と輝ける

光を包み隠しつつ 世は刈菰の涯もなく

紊れ行くこそうたてけれ かくも亂れし原因は

何處いづくにあるかと尋たづねれば 諸君しよくんもすでに御承知ごしやうちの

事こととは思おもへど今いまここに 一口火蓋ひとくちひぶたをきり放はなつ

四民平等しみんべうどうの神國しんこくを 壅塞ようそくしたる曲神まががみは

松若彦まつわかひこに伊佐彦いさひこを 先まづ先頭せんとうにその外ほかの

諸もの司つかさや持丸もちまるよ 彼等かれらは地位ちゐと私欲しよくをば

みたさむ爲ために衆生しじやうの 迷惑めいわくなどは夢ゆめにだも

辨わきまへ知らぬ盲めくらども 權威けんゐを笠かさに衆生しじやうの

汗あせや脂あぶらを絞しぼりつつ 倉廩さうりん充みたす憎にくらしさ

吾われら衆生しじやうは飢うゑに泣なき 寒さむさに凍こごえ枕まくらする

茅屋あばらやさへも無なきままに 路傍ろばうに佇たたずみ眠ねむりをれば

さも横暴わうぼうな取締とりしまりが 法規はふき違反ゐはんと吐ほぎきつつ

残のこらず吾等われらを牢獄らうごくに 投なげ込み無限むげんの恥辱ちじよくをば

與あたへゆくこそ憎にくらしき 霜しもふり雪ゆきつむ冬の夜ふゆも

また永久えいきうのものでない 必かならず花咲はなき風薫かぜり

水も温みて草木の
百花千花咲き出づる

嬉しき春の來たるごと
必ず吾等が身の上に

恵みの雨は降りぬべし
さはさりながら冨の

吹きすさびたる荒野原
越えずばいかで春の野の

いと麗しき温光に
浴することを得べけむや

深く根ざせる喬木の
幹をば拂へ枝を切れ

月日の光を覆ひかくす
醜の喬木ある故に

地上にすだく諸草は
恵みの露を遮られ

神の光をかくされて
いや永久に日蔭者

同じ地上に生ひながら
所を得ざる吾々は

一生つまらぬ者ぞかし
この難關を切りぬける

唯一の望みは天空を
封じて立てる喬木の

枝葉を打ち切り棄つるより
他に手段はなかるべし

振へよ起てよ諸人よ
いかなる壓迫來たるとも

十手の鞭の數多く

芒のごとくに攻め來とも

命を的に放り出した

吾等はいかでか恐れむや

天の御聲を汝等に

傳達いたすブルドック

語を替へ言へば救世主

吾が言の葉を耳さらへ

完全に委曲に聞きおうせ

眠れる眼を醒ませよや

これほど曇つた世の中を

神や佛は何してる

察するところ神と言ひ

佛といふも道法衆の

一時の方便に過ぎなかる

俺らはもはや神佛を

表にかざして臨むとも

絶対的の無神論

神も佛も認めない

ただ吾が持てる腕力を

唯一の力とするのみぞ

勇めよ勇め諸人よ

吾が言靈を諾ひて

この世を救ふ働きに

参加を望む人たちは

怯めず臆せず壇上に

登つて所信を吐露せよ

この世をこのままおいたなら

吾ら世界の弱者等は
すべて最後の解決は

亡びゆくより道はない
運根鈍に限るぞよ

と述べ立てる。取締は「中止、解散を命ず」と大聲叱呼する。辨士は次から次へと取締の制止を聞かず登壇して各自に熱をふく。取締は引摺り落とさうとする。たちまち数千の取締と数千の聴衆との間に大格闘を演じ、何者の悪戯か、あちこの町々より、黒煙濛々と立上り、チヤン チヤン チヤンと警鐘亂打の聲聞こえ來たる。取締も群衆も狼狽の極に達し右往左往に散亂して爲すところを知らなかつた。そこへ馬に跨がつて、愛州、源州、平州、藤州は數多の部下を指揮し、消防隊を組織して、燃え上る火災を残らず消しとめ、喇叭を吹いて悠々として引きあげてしまった。火事もすみ、騒動も稍おさまつたところへ、取締所のポンプが數多の取締に保護されてやつて來た。

一旦逃げ散つた群衆は又もや赤切公園に集まり來たり、再び演説會が開催された。辨士は代る代る熱辨を揮ひ、伊佐彦内閣倒壊、持丸階級の討滅、清家階級を

打破せよなど勝手な熱を吹き立てる。群衆は刻々其數を増し、「ワイワイ」とどよめき亘り、辨士の聲も遂に耳に入らなくなつてしまつた。取締もまた次第々々にその數を増し、十重二十重に取りまいて、ここに第二の修羅場を演出した。今回の鬪争は最も激烈を極め、阿鼻叫喚の聲四方に起り、ほとんど戦場のごとき景況を呈し、何時果つべしとも見當がつかかなかつた。賢平も取締も武器を衆生に取りながら、聲も涼しく宣傳歌を歌つて出て來た女性がある。

「オレオン星座を立ち出でて 豊葦原の中津國

珍の都へ天降りたる 神の使の松代姫

此の世を救ふその爲に 白馬に跨がり現はれて

衆生一同にさとすなり みな静まれよ静まれよ

汝等一同皇神の 恵みの露に包まれし

尊き誠の珍の子ぞ 兄弟垣に鬨ぐとは

何たる心得違ひぞやはるかに天よりこの世界

聖き眼で見わたせば上に立つ者下にゐる

民草どちらも良くはない互ひに意地を立て通し

名利物欲第一と思ひひがめて肝腎の

吾が魂を省みずいと淺ましき修羅場を

ここに現出したものぞ何れも一同心をば

静めて神の教を聞き天教山に現れませる

木花姫の御言もて珍の御國の衆生をば

天國淨土に救はむと今や現はれ來たりけり

松若彦を初めとし伊佐彦司の政策は

全く時勢を顧みぬ無謀至極の行方ぞ

下萬衆の心根も神をば忘れ肝腎の

吾が魂の所在をば忘却したる酬いぞや

人は神の子神の宮天津國より精靈が

神の御心畏みて 此の世の人と生れ来る

その肉體を有ちながら この有様は何事ぞ

人たる者の所作でない 虎狼か熊猪か

但しは八岐の大蛇奴か たとへがたなき醜體を

天地にさらせし淺ましき 悔い改めよ諸人よ

上と下との隔てなく 貴き賤き別ちなく

心を協せ力をば 一つになして珍の國

神の賜ひし靈國を 堅磐常磐に守れかし

いざいざさらばいざさらば 吾はこれより八重雲を

かきわけ天に昇り行く 萬一神の言の葉に

反く衆生のありとせば 神罰忽ち下るべし

ああ惟神々々 皇大神の御心を

茲に傳達なし了る

と言ひながら、馬に鞭うち淺原山の山頂目がけて雲を霞みと驅けり行く。今現在は松代姫と稱する女武者は、その實松若彦の娘常磐姫であつた。常磐姫は春乃姫と謀し合せ、奇智を弄して天使と化け込み、一時の擾亂を平定せしめむがために現はれたのである。

賢平も取締も群集も酒偽者も、神を信ずる者も信じ無い者も、麗しき美人の出現に膽を潰し、猛り切つたる勢ひを削がれ、争闘の手を止めて、ただ茫然と淺原山を指して逃げ行く怪しき女の姿を見送つてみた。

かかる所へ蓑笠草鞋脚絆の扮装にて、被面布を被りながら、聲も涼しく宣傳歌を歌ひつつ進み來たる女がある。

☞ 神が表に現はれて 三千世界を引きならす

すべて此の世は天地の 神の造りし樂園ぞ

この地に生ふる人草は 貴き卑きの隔てなく

互ひに睦び親しみて 神の賜ひし寶をば

互たがひに別わかち萬まん遍べなく

分ぶん配ぱいすべき御み律りぞや

一いつ方ぱうに高たかく寶たからをば

積つみ重かさぬれば一いつ方ぱうは

必かならず缺かけて低ひくくなり

一いつ方ぱうに樂たのしむ者ものあらば

一いつ方ぱうに苦くるしむ者もの出で來きる

ここれでは平へい和わといはれない

今いまや天てん運うん循めくり來きて

高たかさ砂じやう城の奥おく深ふかく

救すくひの神かみは現あらはれぬ

吾われは春はる乃のの姫ひめなるぞ

この衆しゆ生じやうの難なん儀ぎをば

救すくひやらむと朝あさ夕ゆふに

凡すべての寶たからを打うち捨すてて

模も範はんを示しめし蓑みの笠かさを

身みに纏まとひつつ町まち々まちを

巡めぐりて誠まことを諭さとせども

清せい家か階かい級きふ持もち丸まるは

欲よくにからまれ目めはさめず

耳みみは塞ふさぎて衆しゆ生じやうの

この號がう泣きふの悲ひ鳴めいさへ

分わからぬまでになり果はてぬ

ああ惟かむ神ながら々かむ々ながら

モウこの上うへは神かみ様さまの

御み手てにすがりて黎れい明めいの

世よをひら開ひらくより道みちはない

目めざめよ目めざめよ上うへ下したの

各階級の人々よ
 天津國より皇神の
 御言を畏み下り来て
 國依別の御子となり
 今まで城中に育ちしが
 いよいよ天の時來たり
 神の柱と現はれて
 汝ら衆生に説き教ゆ
 ああ惟神々々
 神の言葉に二言なし
 悔い改めよ戒めよ

と言つたきり、煙のごとく何處ともなく姿を隠した。群衆は異口同音に春乃姫と
 聞いて感歎の言葉を絶たなかつた。負傷した役人も衆生も、一言の叱言も言はず
 おのおの家路に歸り行く。はたして今後は春乃姫の出現に依りて衆生の心が鎮靜
 し、取締と衆生との争鬪の根が斷たれるであらうか。

(大正一三・一・二三 舊一二・一二・一八 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第一二章 悪原眠衆（一七五七）

松若彦は吾が館の奥の間に捨子姫と共に、七むつかしい面をさらしてブツブツ小言を言ひながら、愚癡つてゐる。

「コレ捨子姫、お前の教育があまり放縦だから、倅の松依別は日日毎日變装して、悪原遊廓へ通ふなり、妹の常盤姫はお轉婆になり、姫様の御用だとかいつて、家を外なるこの頃の行状、これでは清家の權威も保たれまい。ちとしっかりして呉れぬと困るぢやないか。俺は政務が忙がしいので子供の教育などにはかかつて居られない。子供の悪化するのには皆母親の教育が悪いからだ」

捨子「仰せまでもなく、妾は充分の教育を施してをりますが、別に清家の倅、娘として恥づかしいやうな育て方はしてないと考へてをります」

松若彦は聲を尖らし、

「悪原遊廓へ夜な夜な通ふやうな育て方をしておいて、それでも其方は良いと申すのか。非常識にも程があるぞよ」

捨てこ 倅も年頃の身分、もはや妻帯をさせねばならぬ年頃でございますのに、あなたも何時も家庭がどうだの、資格がどうだのと、古めかしい事をおつしやりますので、倅も失戀の結果自棄氣味になつてるのでございます。倅の愛してる女は、あなたも御存じの饅頭屋の娘お福といふ者、その福の神を貴方は地位が釣合はぬとかいつて、家來を廻し壓迫的に縁をお切りになつたぢやありませんか。それゆゑ倅は失戀の結果、いかなる事を仕出かすかと、心配で夜の目も寝られなかつたのでございます。世間にある慣ひ、失戀の結果淵川へ身を投げて無理心中をしたり、鐵道往生、或は鐵砲腹、首吊りなど失戀者の最後はいろいろございます。それゆゑ倅は如何するであらうかと心配いたし、三五の大神様に祈願をしてみましたところ、倅も神直日大直日に見直し聞直しが出来たと見えて、いきりぬきに惡原遊廓に通ふやうになつたのでせう。失戀者の行くべき結果としては、最善の方法を選んだものだと感心を致してをります。松若「コレ捨子、イヤ婆ア殿、お前そんなこと正氣で言つてるのか。家名を毀損する倅、手討に致しても飽き足らぬ奴、それに其方は贊成と見えるな、怪しから

ぬぢやないか。吾が家は正鹿山津見様の御時代より珍一國の代理權を任され、權門勢家として今日まで傳はつて來た立派な家筋だ。その家筋に汚點を印する者ならば、何ほど大切な倅でも許すことは出來ないではないか」

捨子「それは數十年前の道德律でございませう。道德も政治も宗教も人情風俗も日進月歩の世の中、さういふカビの生えた思想は、今日では通用致しますまい。あなたは一國の宰相でありながら、さういふ古い頭で、良く衆生が納得することだと、何時も不思議がつてゐるのでございませう。幸ひに倅なり娘が時代相應の魂に生れてくれたので、まだしもそれを老後の樂しみと致しまして、不平でならぬ月日を送つてをります」

と何と思つたか、捨子姫も今日は捨鉢氣味となつて、怯めず臆せずやつて退けた。松若彦は數十年添うて來た柔順な女房が、こんな思ひ切つた事を言はうとは夢にも知らず、始めての事なので、もしや狂氣したのではあるまいかと案じ出し、先づ何よりも逆らはぬが第一だ、先づ少しばかり熱の冷めるまで、彼のいふやうにしてやらうかと心を定め、猫撫で聲を出して、背を撫でながら、

松若「コレ捨子姫殿、お前の言ふ通りだ。テモさても明敏な頭脳だな。お前はちと激してゐるやうだから、今日はモウ何も言はない。ゆつくりと奥へ行つて靜かに休んだが良からう」

捨子姫は松若彦の心を早くも讀んでしまつた。自分を逆上してゐると信じてゐるのを幸ひ、日ごろ鬱積してゐる自分の意見を全部ここで喋り立てて松若彦の決心を促さむと覺悟をきはめ、ワザと空とぼけて、

「ホホホホ、あのマア御前様のむつかしいお顔わいの。妾はこれから淵川へ身を投げて永のお別れを致しますから、どうぞ暇を下さいませ。暇をやらぬと仰有つても、妾が覺悟を定めた以上は舌を嚙んでも死んでみせませう。マア死にたいワ、ホホホホ。靈肉脱離の境を越え、一刻も早く天國に上り、清く樂しく第二の生活に入りたうございます。アレアレ、エンゼル様が、黄金の扇を披いて妾に來たれ來たれと招いてゐらつしやる。アア早く行きたいものだなア」

松若彦はますます驚いて、アア此奴ア丸氣違ひだ。仕方がない、先づ機嫌を損じないやうにせなくちやなるまい……と、

「アイヤ捨子姫殿、そなたの言ふ通り、この松若彦はどんな事でも聞いて上げるから、天國なんか行かぬやうにしてくれ。年が老つてから女房に先立たれちゃ、淋しいからなア」

捨子「妾の言ふ事を、ハイハイと言つて、一言も反かす聞いて下さいませるか」

「ウン、何でも聞いてやらう。遠慮なしに言つてみたが良からう」

「そんなら申し上げます。先づ第一に大老職を返上し、どうぞ妾と一緒に民間に

下つて、衆生の怨府を遁れて下さいませ。そして衆生に政權をお渡し下さいませ

れば、衆生はキツと國司家を中心として立派な政治が行はれるでございませう」

松若彦は迷惑の體で面を顰めたが、エーししながら逆らふて發動されちゃ堪

らない。何でもいい、氣違ひの言ふ事だから、ウンウンと言つておけば良い……

とズルイ考へを起し、

松若「ウン、ヨシヨシ、何時でも返上するつもりだ」

捨子「アア嬉しいこと、さすがは松若彦様、それでこそ妾の夫でございませうワ。

どうぞ御意の變らぬ内、大老職の辭表を認め、實印を捺して下さいませ。さうで

なければ、妾は死んで天國へ参ります」

「チ工困つた氣違ひだなア。まづ書いてやらねば治まらない。書いたところで出さなければ良いのだ」

と文机から料紙を取り出し墨をすつて筆に墨し、大老の辭表をスラスラと書き認め、捨子姫の前で實印を押捺し、

「サア捨子姫、これで得心だらうなア」

捨子「ハイ得心でございます。どうぞその辭表を、妾にお渡し下さいませ」

「イヤイヤ、かうしておけば何時でも出せるのだ。もしお前に持たしておいて、そこらへ落とされては大變だから、先づ渡すことだけは止めておかう」

「それでは貴方は妾を詐つていらつしやるのでせう。政權や顯職に戀々として、ゐらつしやるのでせうがな」

松若彦は癩にさへて、

「工、やかましい、きまつた事だ。今日の地位は決してこの松若彦が得たのでない。言はば祖先の名代も同じ事だ。軽々しく俺一料簡では左様な事が出来るもの

か。御先祖様を地下から呼び起し、お許しを受けずばなるまい。其方には八岐の大蛇が魅入つてをるのであらう。汚らはしい、そちらへ行けッ

と焼糞になつて吠鳴りつけた。捨子姫は、老人をあまり腹立てさすのも氣の毒だ、ここらで幕の切所だ……と従順に沈黙に入つてしまつた。松若彦は杖をつきながら、憂さ晴らしのため庭先の花を見んとて、二足三足外へ出たとこへ家僕の新公が慌ただしく歸り來たり、

「御前様へ申し上げます」

松若彦は驚いて、

「ヤ、お前は新ぢやないか。その慌てた様子は何事ぞ。またプロ運動でもおつ始まつたのか」

この親爺、プロ運動が氣に懸かると見えて、二つ目にはプロ運動が突發したのではないか、と尋ねるのがこの頃の習慣となつてゐた。

新公「仰せのごとく、たつた今、赤切公園において、プロ階級演說會が始まり、大變な取締と衆生との衝突で、血まぶれ騒ぎが勃發いたしました」

松若「ナア二、プロ階級演説會？　そして血まぶれ騒ぎ、その後は何うなつた」と言ひながら、驚いて庭の敷石の上にドスンと尻餅をつき、「アイタタツタ」と面顰めてゐる。

「お蔭で、その騒ぎも鎮靜いたしましたが、不思議なことには、エンゼルだといつて、白馬に跨がり、妙齡の美人が現はれ、松若彦も悪いが、衆生も悪い……テナ事を歌ひましたら、不思議なものでげすな、ピタリと争鬪が止まりました。しかしながら其のエンゼルの顔が當家のお嬢様にソツクリでした。お乗り遊ばした馬も、お邸のに寸分違はぬ白馬でござります。もしもお嬢様も宅に居られず白馬もゐないとすれば、テツキリ常磐姫様に間違ひございますまい」

「今朝から姫もをらず、馬もゐないから、あのお轉婆娘どつかの公園に散歩に行つたと思つてみたが、プロ運動に加はりをつたか。そして衆生の前に松若彦が悪いなどと言へば、火の中へ薪に油をかけて飛び込むやうなものだ。ますますプロ運動を熾烈ならしめ、國家の基礎を危ふくする事になる。新公、もしも姫が歸つて來ても松若彦が許さぬ限り、一步も入れてはならぬぞ。あーあ、子が無くて心

配はいする親おやはないが、子この爲ために親おやは心配しんぱいせねばならぬか」

「御前様ごぜんさま、子こがあるために御心配ごしんぱいになりますか。さうすればお金かねのあるため、爵位しやくゐのある爲ためには一人御心配ひとしほごしんぱいでございませうな」

「爵位しやくゐが有るため、黄金わうごんが有るための心配しんぱいは心配しんぱいにはならぬ。この老體らうたいもそれあるために息いきをしてゐるのだ。アツハハハハ」

と冷ひややかに笑わらひながら、杖つゑを力ちからにエチエチと奥おくの間まさして進すすみ入いる。

新公しんこうは筭はつぎを手てにしなから、獨ひとり呶つぶやいてゐる。

「よい年としをして執着心しつちやくしんの深ふかい老耄爺おいほれぢいだな。國司様こくしさまから貰もらつたお菓子くわしも葡萄酒ぶだうしゆも、また澤山たくさんな政治家連せいぢかれんや出入でいりの者ものや乾兒こぶんどもから病氣見舞びやうきみまひだといつて持もつてくるサイドいーにビール、林檎りんごや菓子くわし、一つも自分じぶんも喰くはず人ひとにもよう呉くれやがらず、みな金かねにして郵便局ゆうびんきょくに預あづけ、金かねのたまるのを唯一ゆゑいつの樂たのしみとしてゐる欲惚よくぼけ爺ぢぢだから、サツパリ駄目だめだワイ。俺達おれたちにビールいつぽんいつぽんい一本も振舞ふるまつてよかりさうなものだのに、毎日まいにち日日車力ひにちしやりきに積つんで賣うりにやりあがる。本當ほんたうに吝けちな爺ぢぢだ。それだから良ようしたものだ、親辛勞子樂おやしんどこぶく、孫乞食まじこじきといつて、三代目さんだいめになれば、この財産ざいさんもスツカ

り飛んでしまふのは今から見えてゐる。松依別さまの此のごろの悪原通ひとつたら、本當に痛快だ。印形を盗み出しては銀行から金を出し、金銭を湯水のごとくに使ひ、大盡遊びをやつてゐらつしやるのに、欲に目が眩んで、何も知らずにゐるとは可哀さうなものだな。金を拵へて番する身魂と、金を使ふ身魂とがある

と見えるワイ。アツハハハハ」

と獨り笑つてゐる。そこへ馬に跨がつて、悠々と歸つて來たのは盛装を凝らした常磐姫であつた。

新公「ヤ、お嬢さま、お歸りなさいませ。あなたはオレオン星座からお降りになつた、エンゼルの松代姫さまぢやござりませぬかな」

常磐「ホホホ新さま、お前見てゐたのかえ」

「へーへー貴女のお芝居はこの新公、目敏くも看破してをりましたが、しかしながら衆生があれだけ不思議がつてるのに、素破抜いちや面白くないと思つて、黙つて歸つて來ました。そして御前様に一寸話しましたところ、大變な御立腹で、清家の娘がプロ運動の煽動をするやうなことでは、この内へは入れられぬ、門前

拂ひを喰はせ……とそれはそれはえらい勢ひでございましたよ。マア一寸この門
潜るのは見合はしていただきませう。御前様の代理權を持つてをりますから斷じ
て入れませぬ」

「ホホホホ、大分面白うなつて來たね。さうすると父上は今日かぎり、お暇を下
さるのだらうか。さうなれば、妾も願望成就だワ。そんなら、父上に、これつき
り、お目にかかりませぬから、ずるぶん御身を大切になさいませ……と言つたと
傳へてくれ、左様なら」

と駒の頭を立直し、出で行かむとするを、新公は驚いて、

「アア、もしもしお嬢様、少時お待ち下さいませ。何ほど厳しく仰有つても、子
の可愛ゆうない親はございませぬ。あなたが御改心下さらば、キツとお許し下さ
いますから、御前様に伺つて來るまで、マアマア一寸お待ち下さいませ」

常磐「オイ新さま、折角解放された妾を、再び苦しめるやうなことはして下さる
な。父上のその傳言を聞く上は、妾も世界晴れのしたやうな心持ちがして來た……
左様なら、父上母上に宜しう言つておくれ」

と言ひ残りし手綱はいくり、館の門前の階段を、「ハイハイ」と馬をいましめながら降つて行く。そこへツブ六に酔うて、兄の松依別が懷手をしながら、三尺帯を尻の四邊に締め、自墮落な風をして、頬冠りを七分三分に被り、

『失戀したとて短氣を出すな

悪原廓に花が咲く……と。

日々毎日悪原通ひ

早く親爺に死んで欲しい……と。

家の親爺は雪隠のそばの柿よ

澁うて汚うて細くてくはれない……と』

と千鳥足になつて、階段を昇つて來ると、妹の馬とベタリ出會し、

松依『こんな狭い所を馬に乗りやがつて、ドド何奴だ。見たところ、一寸澁皮の剥けたナイスと見えるが、一寸馬から下りて來い。握手の一つもやつてやらア。

エー、ゲー、アツプー、エー苦しい苦しい。なんぼ苦しいても美人の顔見りや氣分が悪くないものだ」

常磐姫、馬上より、

「アア見つともない、兄さまぢやございませぬか。妾は常磐姫でございますよ」

松依「時は今、親爺の亡ぶ間際哉……とか何とか仰有いましたね、……アア面白

い面白い、これから歸んで、薬罐頭のお小言を頂戴するのかな」

常磐「コレ兄さま、しつかりなさいませ。妹でございますよ」

「妹でも何でも構ふものか、……妹と背の中を隔つる吉野川……（唄）悪原通ひ

でいきりぬく」

常磐姫は止むを得ず、馬からヒラリと飛下り松依別の背を叩きながら、

「兄さま、しつかりして下さいませ、妾はこれから父の怒りに觸れ、家出をいた

します。あなたはどうぞ両親に心を直して、良く仕へて下さいませ。これが此の

世の別れにならうも知れませぬから……」

とさすが氣丈の常磐姫も、涙に濕つた聲を絞つてゐる。松依別は始めて妹と悟り、

にはかに氣がついたやうに、

「ヤア妹か、一體何處へ行くのだ」

常磐「ハイ、父に勘當されましたので、これから誰憚らず、プロ運動にでも出かける積りでございますワ」

松依「ナアニ、プロ運動？ 結構々々、それも結構だが、悪原通ひも結構だらう。

親爺の奴衆生の膏血を紋り、澤山の金を蓄て置きやがったものだから、死ぬにも死ねず、行く所へも行けず苦しんでゐるから、チツとその金を浪費し、深い罪をチツとでも輕うしてやらうと思つて、今しきりに孝行運動の最中だ。お前もこれからプロ運動をやり、親爺の内閣を倒し、チツと罪を取つてやれ。お前もこれから親孝行を勵むがよいぞ、左様なら……」

と又もや門をくぐり、

「兄は悪原妹の奴は

プロ運動で孝行する……と」

新公は箒を持つたまま、庭園の隅っこから走つて来て、
「若様、御前様が大變な御立腹でございます。どうぞ着物を着替へて、お這入り
下さいませぬと、そのザマでお這入りになつては、大きな雷が落ちます。すると
吾々までが迷惑いたしますから、チツと低い聲でものを仰有つて下さいませ」
松依「エツへへへへ、面白いな、胸がスイとするやうな雷に一遍落ちてもらひた
いものだ。……地震雷火事親爺、親爺が恐くて大神樂が見られぬ……と、アーア
碌でもない酒を無茶苦茶に、お里の女奴強ひるものだから、内へ歸つても未だ酒
の氣が残つてけつかる。あ、然し愉快だ、……オイ親爺、妹を放り出して、どう
する積りだ。妹を放り出すのなら、なぜ兄から放り出さぬのぢやい。よう放り出
さぬのか、俺の方から放り出てやらうか」
とダミ聲を振り上げて呶鳴つてゐる。松若彦は何だか妙な聲が屋外に聞こえるの
で、杖をついて現はれ來たり、窓からソツと覗いて、松依別の姿に肝を潰し、
「アツ」と言つたままその場に倒れ、したたか腰を打つて、「ウンウン」と唸つ
てゐる。館の中は上を下への大騒動、水よ薬よ醫者よと、家令や家扶家従の面々

が自動車や自用俵を飛ばして大活動を始め出した。松依別は懐手をしながら、ブラリブラリと又もや門口指して出でて行く。

(大正一三・一・二三 舊一二・一二・一八 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第三篇 神柱國礎

第一三章 國別(一七五八)

國照別 〃 われは淋しき冬の月 御空に高く打ちふるひ
中空さへぎる雲の戸の 開くよしなき悲しさに

苦し^{くる}み悶^{もた}ゆる折^をりもあれ 忽^{たちま}ち吹^ふき來^くる時^{とき}津^つ風^{かぜ}

十^と重^へに二^は十^た重^へに包^つみたる 雲^{くも}吹^ふき拂^はひ漸^{やう}くに

地^ち上^{じやう}に降^{くだ}る道^{みち}開^{ひら}く 草^{くさ}の片^か葉^{きは}におく霜^{しも}の

冷^{つめ}たき宿^{やど}を借^かりながら 都^{みやこ}を後^{あと}に下^{くだ}りゆく

吾^わが身^みの上^{うへ}ぞ頼^{たの}もしき はるかに地^ち上^{じやう}を見^み渡^{わた}せば

虎^{とら}狼^{おほ}かみ 獅^し子^し熊^{くま}の 伊^{いた}猛^{たけ}り狂^{くる}ふ荒^あ野^{れの}原^{はら}

正^{ただ}しき人^{ひと}は醜^{しこ}神^{がみ}の 脚^{あし}ににじられ踏^ふまれつつ

悲^ひ鳴^{めい}をあ^なげて泣^なき叫^{さけ}ぶ 曲^{まが}れる人^{ひと}は揚^{やう}々と

春^{はる}野^のに蝶^{てふ}の舞^まふごとく 地^ち上^{じやう}の惱^{なや}みを他^よ所^そにして

歌^か舞^ぶ音^{おん}樂^{がく}にひたりある 實^げにも矛^む盾^{じゆん}の天^{てん}地^ちかな

いよいよ神^{かみ}が現^{あら}はれて 三^{さん}千^{ぜん}世^せ界^{かい}を引^ひきならし

草^{くさ}の片^か葉^{きは}に至^{いた}るまで 恵^{めぐ}みの露^{つゆ}にしたしつつ

救^{すく}はむ時^{とき}ぞ近^{ちか}づきぬ ああ惟^{かむ}神^な々^{ながら}々^ら

われは國^{くに}照^{てる}別^{わけ}司^{つかさ} この曇^{くも}りたる國^{くに}土^{つち}を

三五の月の御教に
照らし清めて永久に
國照別の御世となし
草木もめぐむ春乃姫
月と花との兄妹が
神の賜ひし珍の國
昔の神代に引き戻し
憂きに惱める人草を
救ひ助けむ吾が願ひ
達せむための鹿島立
守らせ給へ惟神
神の御前に願ぎまつる
吹き來る風は荒くとも
降り込む雨は強くとも
たとへ地揺り雷の
頭上に轟く世ありとも
いかでか恐れむ敷島の
聖き國照別の魂
如何なる權威も物欲も
左右し得べき力なし
珍の御國は言ふもさら
高砂島に國といふ
國のことごと三五の
神の教とねぢ直し
生ける眞の神として
降り行くこそ勇ましき
ああ惟神々々
御靈の恩賴を願ぎ奉る

と歌ひながら、アリナ山の峠の頂上に着いた。國照別は東方の原野を遙かに見おろしながら、

「アア珍の國も暫くこれで見ることが出来ないだらう。其の代り今度歸つて來た時は、この廣大なる荒野ヶ原も金銀瑪瑙、瑠璃碑磔、玻璃などの七寶に飾られた地上天國に一變するだらう。雲深き城中を後に親兄弟家來を見すて、鄙に下り、今また吾が城下にも住む事を得ず、心からとは言ひながら、生れ故郷を立ち去るは、どこともなく心淋しいやうだ。アア否々、そんな氣の弱いことで、この神業が勤まらうか。珍の國の國司は元は三五の教をもつて人草を教化するのが天職であつた。あまり政治などに心を用ひなくても自然に治まつてゐたのだ。しかしながら今日となつては國外よりいろいろの主義や思想や無用の學術が流れ込んで來て、古のごとき簡易な信仰のみをもつて國を治むる事は出来なくなつてしまつた。しかしながら、どうしても世の中は知識や學問の力では治まるものでない。まづ政の第一は徳を以てするより外にない。自分はその徳を養はむがために、城中をぬけ出し、最も卑しき車夫の仲間に入り、下層社會の事情を探り、今また俠客と

なつて、市井の巷に出没し、わが靈魂をして金剛不壞の如意寶珠たらしめむと、
焦れど藻掻けど如何にせむ、永い間嬢や坊にて育てられ、少しの荒き風にさへも
悩まされるやうな弱い身體で、どうして衆生を安堵せしむることが出来やうか。
何といつても自分は珍の國の世子、清家生活も顯要の地位も少しも望まぬけれど、
この先自分が此の國に居らなくなつたならば、信仰の中心、尊敬の的、思想の眞
柱を失うたも同然、容易に、如何なる賢者が現はれても、徳望者が現はれても、
治むることは難かしいだらう。それを思へば、一時も早く魂を研ぎ、眞の神徳を
身にうけて、再び此の國に歸つて來なくてはならうまい。珍の國の廣き原野が今
わが視線を離れるに望んで、何となく、山河草木をはじめ我が國衆生が戀しくな
つて來た。しかしながら一旦決心した吾が魂を翻すことは出来ぬ。ああ惟神靈幸
倍坐世。國治立大神様、何とぞ國照別が赤心を御受納下さいまして、珍の國は申
すも更なり、高砂洲の天地をして、昔の神代の歡樂郷にねぢ直させて下さいませ。
また兩親を始め妹の春乃姫その他城中の老臣、及び友人の身の上特別の御恩寵
を垂れさせ給ひて、珍の國家を平安に隆昌に進ませ給ふやう偏にお願い申し上げ

ます。珍うづの國くにに別わかるるに臨のぞんで、國魂くにたまのかみさま神様のみまへの御前つしに謹つしんでお禮れいを申まをし上げます。

ああかむながらたま惟神ちはへ靈ま幸倍坐世せ□

と感慨無量かんがいむりやうの態ていで、太ふとい息いきをついてゐる。淺公あさこうは珍うづの原野げんやを見みおろしながら、

□親分おやぶんさま、何なんとマア珍うづの國くにも廣ひろいものですなア、そして何なんだか珍うづの國くにの山さん河か草そう

木くが……淺公あさこう行ゆくなく行ゆくなく、元もとへ返かやせ……と手招てまねきするやうな氣分きぶんが致いたしまし

て、これから先さきへ行ゆくのが、何なんだか「おつくう」なやうな、嬉うれしくないやうな氣き

になりました。今いま親方おやかたの様子やうすを見てゐると二ふたつの目めから涙なみだがポロリポロリと落おち

てゐましたよ。何なにほど俠客けふかくの親分おやぶんでも、人情にんじやうに變かはりはないとみえますな□

國照くにてる「ウン、生うまれた國くにといふものは、何なんとはなしに戀こひしいものだ。言いはば自分じぶんた

ちを永ながらく育そだててくれた眞しんの母ははだからな。幼子をさなごが母ははの懷ふところをはなれて、異郷いきやうの空そらに

出でるのだもの、俺おれだつて、チツとは感慨無量かんがいむりやうの涙なみだにくれるのは當然あたりまへだ。涙なみだのない

人間にんげんは鬼おにだ。俺おれも先まづ鬼おにの境遇きやうけうだけは免まぬれたとみえるワイ。アツハハハハハハ□

と俄にはかに笑わらひに紛まぎらす。淺公あさこうも泣なき聲交こゑまじりに「アツハハハハハ」と附合つきあひ笑わらひを

する。

國照「淺公、これから先はつまりいへば、他國だ。神様の方からいへば、みな神の國で境界もなければ差別もないが、地上の人間どもが、これまでは珍の國、これから先はテルの國だとか、カルの國だとかヒルだとかハルだとか、勝手に境界をつけ、互ひに權勢を争うてゐるのだから、その考へでゐないと、大變な失敗をするよ。自分の國內では俠客も羽振りが利くが、様子も分らぬ他國では、そういふわけにはゆかぬからのう」

淺「所で吠えぬ犬はないとかいひましてな」

「オイ淺、犬に譬るとは殺生ぢやないか、ハハハ。サアここを降つて、懸橋御殿といふのがあるさうだから、それへ參拜をして一夜の宿を借り、ゆつくり行くことにしやう」

「ハイ、お伴いたしませう。あーあ、これで故郷の空の暫く見納めかなア……」

去りかねて振り返り見ぬ珍の國

妻さへ子さへなき身なれども

何となく戀しくなりぬ 珍の空
今別れむとして涙こぼるる

國照別 汝もまた人の御子なれ世のあはれ

よくも悟れり深く覺れり

足乳根の親のまします珍の空

打ち仰ぎつつ別れ行く哉

國愛別親しき友は如何にして

吾がゆく後に活動やせむ

吾が友よ暫く待てよ國照別

神と現はれ歸り來るまで

吾が行くは御國をすつる爲ならず

眞の神の國にせむため

吾がゆくは親を苦しむる爲ならず

大御心を慰めむため

吾がゆくは國民すつる爲ならず

天國淨土に救はむがため

と歌ひ了り、金剛杖を力に急坂を下りゆく。

國照別 神の恵みのアリナ山 杖を力に下りゆく

旭は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも 誠一つの三五の

神に任せし吾が身魂 神と國とに眞心を

盡す吾が身に幸あれと 朝夕祈る勇ましさを

故國の空を後にして 踏みもならはぬ山坂を

登りつ下りつ進み行く 國魂神の龍世姫

守らせ給へ惟神 謹み敬まひ願ぎ奉る

此の世を造り給ひたる 國治立大御神

世人を教へ諭しゆく 瑞の御靈の大御神

此の世の塵を打ち拂ふ 科戸の風や雨となり

雪ともなりて守ります 貴の力を頼りとし

天にも地にも掛替への なき垂乳根や妹を

後に見すてて出でてゆく 涙の雨は袖に降り

眼はかすむ今日の空 恵ませ給へ惟神

神かけ念じ奉る

と歌ひつつ、國照別は先に立ち、淺公は杖を力に足拍子を取りながら、九十九曲りの石だらけの道を後に従ひ行く。

淺公 ヲ ウントコドツコイ アリナ山 尊に聞いたきつい坂

いよいよ戀しい珍の國

涙と共に立ちわかれ

ウントコドツコイ危ないぞ 石のゴラゴラする坂だ

親方用心なさいませ 一時も早くこの坂を

無事に下つてウントコシヨ 懸橋御殿にまゐ詣で

足の疲れを休めませう 鏡の池とて名の高い

昔の神の靈跡が 今に残つてゐるといふ

名所を見るのも今少時 ああ惟神々々

何とぞ無事に此の坂を 親方さまともろともに

下らせ給へ惟神 御靈の恩賴を願ぎまつる

旭もテルの國野原 向かつておりゆく二人連れ

もしも國人わが姿 眺めて空から天人が

降つて来たかと怪しんで いと珍しき穀物

八足の机におき竝べ 迎へてくれれば嬉しいが

ウントコドツコイ アイタツタ メツタに左様なうまいこと

あらうと思はぬボンの糞くそ 雨露凌うるしがしてドッコイシヨ

くれてもそれで満足まんぞくだ もうしもうし親分おやぶんよ

にはかに霧きりが深ふかくなり 一間先いつけんさきは靄もやの海うみ

だんだん淋さびしうなつてくる 一足一足坂路ひとあしひとあしさかみちを

降くだる度たびごと根ねの國くにや 底そこの國くにへと行くやうな

淋さびしい氣分きぶんになつて來きた ああ惟神かむながらかむながら々々

神様かみさまよろしく頼たのみます 後あとへは返かへさぬ男伊達をとこだて

たとへ命いのちはすつるとも 思おもひ立たつたる親分おやぶんの

氣象きしやうはいつかな怯ひるむまい 俺わつちも此處ここまでお伴ともして

卑怯ひけふみれん未練ひつかへに引返ひつかへす わけにはゆかぬ男をとこの意氣地いきち

かうなりやホンに俠客けふかくも ウントコドッコイ辛いつらもの

旭あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

霧きりは山路やまぢを包つつむとも 大蛇をろちの奴やつが行先ゆくさきに

道を塞ふさいで攻め來くとも 弱よわきを扶たすけ強つよきをば

挫くじいて通とほる男伊達をとこだて それを兼かねたる宣傳使せんでんし

國くに照別てるわけの珍うづの御子みこ 御供みともに仕つかへた淺州あさしうは

決けつして決けつしてひるまない アア勇いさましや勇いさましや

一足一足ウントコシヨ 勝利しょうりの都みやこへ進すすみ行ゆく

神かみは吾等われらと共にあり 親分おやぶんも吾等われらと共にあり

吾等われらを守るまもるは神かみにまし 吾等われらを守るまもるは親分おやぶんだ

また親分おやぶんの身みの上うへを 守まもる眞まことの神様かみさまは

國治立大御神くにいはるたちのおほみかみ 次つぎに乾兒こぶんの淺州あさしうは

朝あさから晩ばんまでテクテクと 御後みあとに従したがひ進すすみ行ゆく

どこを當あてとも白雲しらくもの 山路やまぢを分わくる旅たびの空そら

實げに面おも白しろし勇いさましし ああ惟かむながらかむながら神々々

御靈幸みたまさちはへましませよ ウントコドツコイ ドツコイシヨ

ドツコイ ドツコイ ドツコイシヨ

とちぎれちぎれに山降りやまくだの歌を唄うたひながら、漸やつやくにして稍平坦ややへいたんな緩勾配くわんこうばいの坂道さかみちに着ついた。霧きりはますます深くして咫尺しせきを辨べんぜず、太陽たいやうは西天せいてんにかくれしと見え、暗やみの帳とほりはチクチクと二人ふたりを包つつんで來きた。二人ふたりはやむを得えず、此處ここに一夜いちやを明あかすこととなつた。ああ惟神靈かむながらたま幸倍坐世ちはへませ。

(大正一三・一・二四 舊一二・一二・一九 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第一四章 暗枕やみまくら (一七五九)

國照別主くにてるわけしゅじう從したがはアリナ山やまの中腹ちゆうぶくに止やむを得えず一夜いちやを明あかすこととなつた。咫尺しせきを辨べんぜざる濃霧のつむは陰々いんいんとして身みに逼せまり來くるかともれば、たちまち空そらは黒雲くろくもみなぎり、夕立ゆふだちの雨あめが礫つぶてのごとく二人ふたりの衣ころもを打うち、吹ふき飛とばすやうな風かぜがやつて來くる。深霧ふかぎり、靄もや、大雨おほあめ、大風おほかぜと交かはる交がはる走馬燈そうまとうのやうに迫せまつて來くるその淋さびしさ苦くるしさに、さすかの國照別主くにてるわけしゅじうも初はじめて知しつた旅たびの惱なやみ、心こころの底そこより天地てんちに拜跪はいきして、一時いちじも早はやく黎れい

明めいの光ひかりを仰あふがむ事ことを祈願きぐわんした。されども時ときの力ちからは何なにほど祈願きぐわんしても左さい右いうすること
は出で来きず、夜よは深しん々しんとして更ふけゆくばかり、四あ邊たりはますます暗くらく互たひの所あ在りさへ
目めに入いらなくなつてしまつた。

國くに照てる 雨あめ風かぜにさらされ霧きりに包つまれて

行ゆく手てに迷まよふ吾わが身み魂たまかな

淺あさ公こう 氣きの弱よわい親おや分ぶんさまのお言こと葉ばよ

いつまで暗やみの續つづくものかは

淺あさ公こうの生いく言こと靈たまをめで給たまひ

朝あさ日ひの御み空そら惠めぐませ給たまはむ

朝茅生の野邊を渡りて今ここに

誠アリナの峰に休らふ

夜の雨峰の嵐におびえつつ

ふるひるるかも木々の梢は

主従がふるひるるかと思ひしに

木々の梢で先づは安心

親分が慄ふやうでは曲神の

すさぶ世の中渡るすべなし

ふるふといふ吾が言靈は世の中の

あらゆる塵をふるふ謎なり

☞ 負けぬ氣の強い國照別さまよ

氣をつけ給へ漆の木蔭を

右左前も後ろも見えわかぬ

暗の山路はいとど静けき

☞ 浅公よ静かなりとは嘘だらう

心の淋しさ語るにやあらむ

兩人は何となく寂寥の氣に打たれ、膝をすり合して阿呆口を駄句つてゐる。どこともなしに細い淋しい絲のやうな聲が聞こえて來た。浅公は國照別の腰に喰ひつき、ビリビリと慄つてゐる。

浅才親分さま、デデ出ましたぞ

國照「ウン、出たの」

「どうしませう」

「どうでも可いワ、惟神に任すのだな。きつと神の試練だよ。お前のやうな臆病者を伴れてゆくと、俺の手足纏ひになると思つてアリナ山の魔神が氣を利かし、お前を片付けてやらうと思つて、出現したのかも知れないよ、アツハハハ、テモさても暗いことだワイ。もし汝と間違へられて、俺が頭からガブリとやられちゃ大變だから、オイ淺、二三尺間隔をおいて喋らうだないか。これだけ暗くては化物だつて、目が見えさうな道理がない。聲さへ出しておればそれを標的にかぶるだらうから、フツフツ」

「親分さま、あなたは随分水臭いことを言ひますね。乾兒の難儀を助けて下さるのが親分ぢやございませぬか。自分が助かるために乾兒を魔神に喰はさうとなさるのですか」

「勿論だよ、お前は俺の乾兒になる時、何といつて誓つた……親分さまの御身に一大事があれば、命をすてて盡します。命は親分に捧げました……といつて、小指まで切つて渡しただないか、御苦勞だなア、ハツハハハ、持つべきものは乾兒

なりけりだ。若しも汝がみなかつたなれば、身代りがないため、俺が喰はれてしまふのだ。淺公のお蔭で俺も命が全ふ出来るワイ。南無淺公大明神、殺され給へ、喰はれ給へ、叶はぬから靈幸はへませ、エツへへへへへ」

「ソソそれは、チチチツと違ひませう。親分が喧譁の時とか、また強きを挫き弱きを扶け遊ばす時に、お伴にいつて命をすてるのなら、捨甲斐もあります、こんな淋しい山の奥で、エタイの分らぬ化物に喰ひ殺されちや本當に犬死にですからなア」

「そりや汝のいふ通り、全くの犬死にだ、縁の下の舞ひだ。然しながらそれを犠牲といふのだ。親分がまさかの時に犠牲にするため、汝を乾兒にしておいたのだ。俺だつて、たつた一人の乾兒を魔神に喰はしたくはないが、それでも自分の命をすてるよりは辛抱がしよいからのう、ホツホホホ」

「最後の怪しい口笛を吹くやうな聲は、細い帯のやうに地上七八尺の上の方に線を劃して聞こえてゐる。」

「ヒューヒュー、ヒュー」

實際は梢を疾風の渡る音であつた。されど淺公の身には妖怪とより聞こえなかつた。國照別は始めから風の聲だといふ事は承知してゐたが、あまり淺公が驚くので、面白半分に揶揄つてみたのである。淺公は慄ひ聲を出して、

「國治立大神様、瑞の御靈大神様、何とぞ何とぞ只今現はれました怪しき神を追ひのけて下さいませ。親分も大切なら、私の體も大切でございませぬ。親分の代りに私が喰はれますのは少しも厭はぬことは……ございませぬが、同じことなら、親分乾兒共にお助け下さいませ。今私がここで喰はれましては、親分さまも知らぬ他國で一人旅、御苦勞御艱難をなさるのがお氣の毒でございませぬ。私だつてこんな所で死にたくはございませぬ、惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世」

と祈つてゐる。暗はますます深くして、なまぬるい風が腰のあたりを嘗めて通る。

國照「人の命を取り食ふ 曲津の數多アリナ山

暗の帳に包まれて ここに二人の石枕

眠る間もなく人食ひの 怪しき神が現はれて

その泣く聲を尋ねれば

國照別の肉の宮

一目見てさへうまさうだ

それに従ふ淺公の

奴の體はどことなく

味が惡さうな穢なさうな

こんなヤクザ者喰たところで

腹の力になりもせぬ

腹を損じて明日の夜は

七轉八倒せにやならぬ

それゆゑ淺公の肉體を

食つてやるのは止めておかう

本當に食ひたい食ひたいと

喉がなるのは親分の

國照別の肉の香だ

さはさりながら神徳が

體一面充ち満ちて

齒節の立たぬ苦しさに

この場を見すてて歸りゆく

これから淺の乾兒等に

うまい物をば澤山に

喰はして肉を肥満させ

脂の乗つたその上で

改めお目にかかるだらう

國さま淺さま左様なら

これでおいとま致します

…と唄ひもつて魔神の奴、下駄を預けて歸りよつた。オイ淺公、確りせぬと助からぬぞよ」

淺「才親分、そんな事を魔神が言ひましたか、嘘でせう」

「お前の耳には聞こえなかつただらう、俺が魔神の言葉を翻譯すると、つまりアなるのだ。珍の國の人間とテルの國の人間とは日々使ふ言葉が變つてるやうに、人間と魔神とはまた言葉が違ふのだ。鳥でも獸でも皆言葉があつて互ひに意思を通じてゐるのだからなア」

「さうすると親分、あなたは神さまみたやうなお方ですな。結構な城中に生れ、珍の國の國司になる身を持ちながら、物好きにも程があると思ひ思ひ、乾兒に使はれて來ましたが、魔神の言葉が分るとは、本當に感心いたしました。親分親分といふのも勿體なくなりましたよ」

「とも角、お前の體は穢しうて、味が悪くつて、喰へないと言つてたから、マア安心せい。險呑なのは俺だ。俺は若い時から榮耀榮華に育てられ、體が柔らかく出來てるとみえ、國の體が喰ひたいと言つたが、お蔭で御神徳があるので、屁古

垂れて歸りよつた。しかし淺公は甘い物をくはせ充分脂を乗せておいて呉れ、その時にまた現はれて、バリバリとやると言つてたよ。随分用心せないと可けないよ。だから甘い物があつたら、皆俺に食はせ、お前は糟ばかり喰つてゐたら脂もならず、魔神も見すてくれるのだ、イイか。命が惜しくなければ精出して美食をするのだな、ハハハハ

淺公は思ひの外の正直者である。國照別の言葉を一も二もなく丸呑にしてしまつた。

親分さま、あなたは神さま侠客だからメツタに嘘は仰有る氣遣ひはありますまい。さうすりや、わつちや、これから一つ考へねばなりませんまい。うまい物は喰はれませぬなア

さうだ、うまい物は皆俺に食はせと言つたよ

ヘーン、うまい事をいひますね。魔神の奴、なかなか氣が利いてるワイ

魔神も退却したなり、これから一つ宣傳歌を歌つて暗を晴らし、東雲を待つことにせうかい

宜しうございませう」

國照別 故郷の空はるかに出で行く二人の仁侠

あはれ今宵はアリナ山の

野宿に肝をひやす

比較的融通の利く侠客の鞆丸

人間の想念界におけると同様

伸縮自在なるもまた可笑し

仁侠をもつて誇る淺公親分の

股間の珍器いま何處にかある

珍の荒野に彷徨ふか

ただしは遠く海を渡つて

龍宮に走るか聞かまほし 珍器の所在

雨はしげし 靄は深く包む

魔神まがみの怪聲くわいせいは頻しきりに至いたり

寂寥せきれうの空氣くうき刻々こくこく身に迫せまる

アア人間にんげんの腋ふ甲が斐ひなさ

暗夜あんやに會あへば

忽たちまち寂寥せきれうにをののく

いかにして天地てんちの奉仕者ほうししや

萬物ばんぶつの靈長れいちやうたるを得えむ

故里ふるさとの空遠そらとほく回顧くわいこすれば

珍うづの都みやこに残のこれる相思さうしの人ひとびと

吾わが魂たましひを引き留とむるが如ごとく覺おぼゆ

進すすまむとせば小膽せうたんなる淺公あさこうのあるあり

退しりぞかむとせば故郷こきやうの友人いうじんに恥はづかし

アア如何いかにせむ

アリナ山やまの夜露よつゆの宿やど

星もなく月もなく

八重雲のふさがる下に

臆病武士と相共に

ふるうて一夜を送る吾ぞ果敢なき

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ

浅公「アリナ山下りてここに來てみれば

暗の帳に包まれて

行手も知れぬ苦しきよ

魔神は夜半に現はれて

親分乾兒の胸冷す

健氣にもわが命

取り食はむといひし魔神の叫び

一寸味をやりよるワイ

さりながらこの淺公は

全身骨をもつて固めたる

齒節も立たぬ剛力に

呆れたのか魔神の群

豊かに育ちし親分の君

肉柔らかく血の香芳ばしく

わが身の食料には最適當だと

言葉をのこして歸り行く

魔神もなかなか食へぬ奴

味な事をいひよるワイ

思へば思へば

あぢ氣なき浮世だなア

暗はますます深くして胸はますます打ちふるふ

血管けつくわんの血ちは凍こほり肉にくは引ひきしまり

髪かみの毛けは立たつ

ああ惟かむながら神すく救すくはせ給たまへ

わが弱よわき魂たまを

ああ惟かむながら神ひら開ひらかせ給たまへ

わが清きよき強つよき魂たまの光ひかりを

かく二人ふたりはいろいろな事ことを口くちずさみながら一夜いちやをあかし、ホホンンノリと足許あしもとの見み
ゆる頃ころ、又またもや急坂きふはんを下くだり、アアリナの瀧たきの懸橋かけはし御殿ごてんを指さして進すすみ行ゆく。

(大正一三・一・二四 舊一二・一二・一九 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第一五章 四天王してんわう (一七六〇)

國州、淺州の兩人は午前の十時頃辛うじて、國玉依別命が主管してゐるアリナの瀧の懸橋御殿の大廣前に辿りついた。國玉依別、玉龍姫夫婦は祭服を着し、數多の信徒と共に月例の祭典を了り、宣傳歌を奏上してゐる。

國玉「アリナの瀧の水清く　この谷間のいや深き

神の恵みに包まれて　懸橋御殿に朝夕に

眞心ささげ仕へゆく　吾は國玉依別の

神に仕ふる宣傳使　玉龍姫と諸共に

皇大神の御教を　アリナの山の空高く

テルの荒野のいや廣く　海の外まで傳へゆく

ああ惟神々々　世は常暗となりつれど

遠き神代の昔より　神の恵みは變りなく

四方の民草恵みまし　世の荒風も醜雨も

凌ぎて安く世をわたる　テルの國こそめでたけれ

旭あさひは清きよくテてルるの國くに

夕ゆふひ日ひも清きよくテてルるの國くに

月つきは御み空そらに鮮あざやかに

天あまつた傳つたひつつテてルるの國くに

濱はまの眞まさ砂ごの數かず多おほく

御み空そらの星ほしもテてルるの國くに

月つき照てる彦ひこの皇すめ神かみの

現あらはれ玉たまひし鏡かがみ池いけ

常とこよ夜よの暗やみを照てらしつつ

稜みいづ威かがや輝かくテてルるの國くに

天あま照てる神かみの惠めぐみにて

野の山やまは青あをく水みづ清きよく

大おほ海うな原ばらより打うちよする

波なみも静しづかに漁すなごりの

わわざも豊ゆたかに國くに原はらは

稻いね麥むぎ豆まめ粟あはよく稔みのり

地ち上じやうに生おふる人ひと草ぐさは

朝あさな夕ゆふなに嬉うれしみて

神かみを敬うやまはぬ者ものぞなし

げに高たか砂さこの名なに負おへる

底そこ津つつ岩いは根ねのテてルるの國くに

領うし有はぎたまふ國くに魂たまの

聖きよき御み前まへに鹿か兒ご自じ物もの

膝ひざ折をりふせて大おほ稜みいづ威いづ

神かみ嘉ほぎ仕つかへ奉たてまつ

ああ惟かむ神な々ら々かむ

身み魂たまの恩ふ頼ゆを謝しやし奉まつる

一ひと二ふた三み四よ五いつ六むつ

七八九つ十たたり

百千萬の國人が

朝な夕なに大前に

い寄りつどひて御恵みの

千重の一重に酬いむと

三五の月の照り渡る

今日の生日に月例の

御祭仕へ奉り

海川山野くさぐさの

うまし物をば横山の

いとさわさわに置足ひ

眞心捧げ仕へゆく

旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

大西洋はあするとも

アリナの山は崩るとも

瀧の流れは干るとても

千代に盡きせぬ神恩の

露に露ふ民草の

心の色ぞ麗はしき

心の花ぞ麗しき

此世を造り玉ひたる

無限絶對無始無終

神徳強き國の祖

國治立の大御神

世人を治く救ひます

神素盞鳴大神の

貴の御前に畏みて

あまつのりと 天津祝詞の太祝詞 ふうとのりと たたへまつるぞ嬉しけれ

あむながらかむながら ああ惟神々々 御霊の恩頼を謝しまつる

と歌ひ了り、四拍手して神前を退き、二柱は數多の信徒に笑みをたたへて目禮しながら、おのが居間へと進み入る。

國、淺の兩人は信徒の中に交はりてこの祭典に列してゐた。淺州は國照別の耳に口を寄せ、

何と莊嚴な宣傳歌だありませぬか。そして此處の神司はずるぶん老耄のやうだが、その言靈は十七八の若者のやうな涼しい清らかな聲を出すだありませぬか。

あの聲を聞くと私はふるひつくほど好きになりました

國 心さへ清淨潔白になれば、言靈も濁らないから、アアいふ美しい聲が出るのだ。俺達もこれからは魂を清めて聲の年がよらないやうにしたいものだ。これは昔俺の親爺から聞いてゐるが、親爺の友達の龍國別といふ宣傳使が、自分の母親や弟子どもと共に、玉よせの芝居をやつた所ださうな。その時に龍國別母子がソ

ツと黄金の玉を失敬して、アリナ山をはるばる越え珍の野野までいったところ、神様の戒めに會うて悔い改め、その次に高姫といふ我が強い宣傳使がやつて来て、またその玉のために神様に脂を搾られ、改心したといふ歴史の残つてあるお宮様だ。龍國別が途中で神様に取上げられた黄金の玉が御神體となつて、このお社に祀つてあるといふ事だから、俺たちも三五教の信者たる以上は、まんざら縁のない者でもない。どうだ、今晚此處でお通夜でもやつて御神徳を頂き、アリナの瀧で身をうたれ、それからボツボツ目的地へ行かうぢやないか」

「それは誠に至極結構でせう。何なら親分、ヒルの國なんて、山河數百里も隔てた遠國へ行くよりも、山一つ越ゆれば、自分の生れた國だから、一層の事、ここで暫く尻を据ゑたら何うでせう。別にヒルの國まで行かなくても、侠客にはなれ
ますよ」

「一旦男子が思ひ立つた事は中途にやめるわけには行かない。絶壁前に當るとも、白刃頭上に閃くとも、一旦言あげた事は實行せなくちや男とはいはれない。まして男の中の男一匹と、世間に持てはやされ、仁侠をもつて世を救ふ大望を抱い

た吾々、そんな腰の弱い事が出来ようか。お前は厭なら厭で可いから、ここに何時までも固着してゐるが良からう、俺は一人でやつて来るからのう」

「どこまでもお供いたします。しかし三日や四日はお骨休め、足休めのため、ここでお籠りしたら何うでせうか」

「まづ二三日瀧に打たれて、體を淨め、鏡の池の神様に神勅をうけ、そしてボツボツ行く事にせう」

「ヤ、それで安心しました。そんなら之からお瀧へ参りませうか」

「ヨーシ、まづ第一に襦をやつて來う」

といひながら、拍手再拜し、口の奥で天の數歌を稱へてゐると、信者の風をした十四五人の男、前後左右よりバラバラと取圍み、兩人の首筋をグツと握り、剛力に任して押へつけた。淺公は驚いて、

「アイタタタ、ナナ何をさらすのだ。コリヤお前達ア、神様を信心してる信者ぢやないか。人の首筋を押へて何うするつもりだ。イイ痛いワイ、何ぢやい。人の手を後ろへ廻しやがつて……何俺が悪い事したか……モシ親分、タタ助けて下

さいな^ㇿ

國照別は剛力に押へられ、俯向いたまま、阿吽の息を凝らし、隙をねらつてみた。息の調子を計つて、パツとはね起き、やにはに大の男四五人を取つて投げた。浅公を押へてゐた大男も吃驚して手を放した。浅公は矢庭に座敷の真中につつ立ち上り、大手をひろげ、手に唾しながら、

「サー来い、珍の都において隠れなき白浪男の浅公さまとは、【こなはん】のとだ。いらざる【ちよつかい】を出して後悔を致すな。乾兒の俺でさへもこの通りだ、俺の親分を何と心得てゐるか、珍の一國の國の柱の國さまだぞ^ㇿ

この中の最も大將らしき奴、行儀よく豊の上にキチンと坐り兩手をついて、誠に失禮をいたしました。私は伊佐彦老中の部下に仕ふる、はした役人共でございます。誠に失禮をいたしました。私は伊佐彦老中の部下に仕ふる、はした役人共でございます。ざいまするが、國照別の世子様が、珍の都に身をおとして、お忍びになつたといふ事が城下一般にひろがり、それから大勢の者が手配りを致しましたが、どうしてもお行方が知れぬので、ヒヨツとしたら他國へ逐電されるかも知れないと、十數人の手下を引きつれ、一方口のこの館に信者と化込み、様子を考へてゐたとこ

る、今日計らずも、世子様のお出で、誠に恐れ多い事でございますが、吾々がお供を致しますから、どうぞ國へお歸り下さいませ」

國「お前達は誠に御苦勞な役だ。願ひによつて歸つてやるのは易い事だが、俺も最早決心した以上は、一步も後へ返す事は出来ない、諦めて歸つてくれ。いづれ永遠に珍の國を見ずてるのではない。俺には俺の考へがあつての事だから、素直に歸つたが可からう」

男「私は深溝役所の目付でございまして、駒治といふ者でございまして。左様な事を仰せられずに、一まづお歸り下さいませ。珍の城下は大變な騒ぎでございまして、一度歸つて頂かねば、衆生が塗炭の苦しみに陥ります。衆生を愛し下さる真心があるなら、どうぞ私がお供をいたしますから、この場よりお歸りを願ひます。あなたがお歸り下さらねば、吾々は再び都へ歸るわけには参りませぬ」

「別に都へ歸る必要はないぢやないか。生活の保證は俺がしてやるから、どうだ。俺は國州といふ侠客と還俗したのだから、汝等も俺の乾兒となり、天下の男伊達と名を賣つたらどうだ。そして腕を研いた上、俺は故國へ歸り國の眞柱となるつ

もりだ。その時はお前も拔擢して、大取締ぐらゐに使つてやるが、ここは一つ思案の仕所だ、どうだ、俺のいふ事が合點がいたら、否應なしにすぐに其の十手をこの谷川へ捨ててしまへ」

駒治は心の中にて……一層の事、侠客にならうかなア、何といつても、珍一國の御世子だ。その方が斯うして身をおとし、白浪男になつて世の中を救はうとなさるのだから、何時までも役人の端に加はつてを つても、先が見えてゐる。一層潔よく降参せうかな……と早くも決心してしまつた。しかしながら大勢の部下に對し、直ちに服従する譯にも行かず、部下の顔色をソツと窺つてゐる。

國「オイ一同の者ども、今日から俺の乾兒だ。侠客でなくつても、高砂城の未來の國司だ。さうすりやお前たちは皆俺の乾兒だ。どうだ否應あるまい。そのペラペラした十手をねぢ折つて谷川へ放る氣はないか」

駒治「何とぞ私を貴方の直參の乾兒にして下さいませ。如何なる事でも御命令に服従いたします。證據はこの通りでございます」

と十手を、眼下の谷底へ投げこんでしまつた。他の捕手連中は去就に迷ひ、目を

白黒させて駒治の顔を見つめてみたが、市公、馬公の兩人を除く外、十手をかけ
たまま、列をつくり、驅足の姿勢で、怖さうに館を逃げ出しアリナ山を指して逃
げ歸りゆく。後見送つて國照別は、

「八八八八駒治、市に馬、誠の者は三人になるかも知れぬぞよ……とはよく言
つた事だ、三人世の元結構々々だ。お前たち新歸順新侠客が三人、俺たち二人を
合すれば五人となる、嚴の御靈だ。三五の明月だ。ヤ、目出たい目出たい、サア
これから神様にお禮を申し上げやう」

駒治「御世子様、そんなら今日から、誠にすみませぬが、あなたを親分と申して
も宜しうございますか」

國「きまつた事だ、親分國州さまと言つてくれ。市も馬もその通りだぞ。窮屈な
取締をやめて脛一本、沼矛一本の男一匹になるのは男子の本懐だ。汝もこれで救
はれたのだ。ヤツパリ靈がいいとみえて、俺の心が分つたと見えるワイ、アツハ
八八八八」

駒治「エー、親分に申し上げますが、早く此の場を立去らないと、今歸つた十三

人の奴、都へ歸り、伊佐彦老中へ報告するに間違ひありません。さうすりや捕手がやつて来る、險呑ですから、何とか身隠しをせななりますまい」

「ナア二、心配するな、この急坂を登り下りして、それから廣い野を渡り、都へ歸るにも五日や六日はかかる。それからやらやつて来たところで、また五日や六日は時日が要る。マアここ十日ぐらゐは大丈夫だ。ゆつくり襷でもして神勅を受け、

それから自分の方針を徹底的にきめるのだ。そんな事に齷齪して頭を痛めてゐるやうな事では、到底侠客にはなれないぞ。ヤ面白い面白い、俺もべて乾兒が四人出來たか、四天王の勇士、しつかり頼むよ」

浅「モシモシ親分さま、四人の中で順序を立てておかねばなりません、誰がこの中では一番兄貴になるのですか、キツと私でせうね」

國「時間においてはお前が兄貴だ。併しながら膽力と腕力においては怪しいものだ。何はともあれ、お瀧へ襷に行く事にしやう、一二三四」

と言ひながら懸橋御殿を後に、水音轟々として響きわたる瀑布の傍に一行五人辿りついた。無心の瀧水は何を語るか。轟々轟々として地をゆるがせ、無数の飛沫

には日光にづくわうが映えいじて、えも言いはれぬ寶玉ほうぎよくの雨あめを降ふらしてゐる。

(大正一三・一・二四 舊一二・一二・一九 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第一六章 波動はどう (一七六一)

國照くにてる別わけ一行いつかうは四邊あたりの果實このみをむしりながら、飢うゑを凌しのぎ三日みつ三夜かみよの襖みそぎを修しうし、鏡かがみ
の池いけの由緒ゆいしょ深ふかき靈場れいぢやうに參拜さんぱいし聲こゑも涼すずしく宣傳歌せんでんかを奏上そうじやうした。

國照くにてる「アさ日は清きよく明あきらけく イてり通とほらすテルの國くに

ウき世よの惱なやみを他所よそにして エらまれ切きつた身魂等みたまらが

オさまりゐます懸橋御殿かけはしごてん カみも平たひらに安やすらかに

キこしめすらむ眞心まごころの クに照別てるわけの御願おんねがひ

ケしきいやしき曲道まがみちを コん本ほん的に改良かいいりやうし

サかえ盡つきせぬ珍うづの國くに シきます國くに魂たま大御神おほみかみ
 スずしき聖きよき太祝詞ふとのり セかいの爲ために宣のり上げあて
 ソぐりし身魂みたまを救すくひ上げ タすけて生いかす高砂たかさこの
 チとせ榮さかゆる松まつの教のり ツきは御空みそらを隈くまもなく
 テらして暗やみを晴はらしつつ トこそ世よの國くにまで救すくひ行ゆく
 ナみに漂ただよふ高砂たかさこの ニしと東ひがしの珍うづの國くに
 又またしとなるべき吾わが魂たまも ネそこの國くにの惱なやみをば
 ノぞかぬうちは是非ぜひもなし ハやく身魂みたまをあらためて
 ヒろく尊たふとき御惠みめぐみの フゆを世界せかいに現あらはして
 へい和わに民たみを治をさめ行ゆく ホまれも高たかき珍うづの國くに
 マこと一ひとつの三五あななひの ミちの光ひかりに陰かげもなし
 ムかしの神代かみよに立替たてかへて メぐみ治あまねき草くさの露つゆ
 モもの神人しんじん勇いさみ立たち やすく樂たのしく何い時つまでも
 イのち榮さかえて國くにのため ユウ冥界めいかいを救すくうため

工くわい遠えん無む窮きゆうの生せい命めいを　　ヨさし玉たまへと願ねぎ奉まつる

ワが言こと靈たまの大おほ前まへに　　斗とてり通とほらい奉まつりなば

ウき世よの雲くもをかきわけて　　エがほに充みてる神かみの顔かほ

ヲがませ玉たまへ惟かむ神なら　　國くに照てる別わけが善よし惡あしの

世よのさまうつす鏡かがみ池いけ　　玉たまの宮みや居ゐの御おん前まへに

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎ奉まつる

と歌うたひ終をはり、拍はく手しゆし、傍かたはらの巖いはほに腰こしを打うちかけ、昔むかしの歴れき史しば話なしに移うつりける。

國くに「オイ、乾こ兒ぶんども、この鏡かがみの池いけは一名いちめい言こと靈たまの池いけといつて高たか砂さ洲じま第だい一いちの神しん秘び的てきな
靈れい場ぢやうだ。眞ま心ごころを以もつてこちらから言こと靈たまを發はつ射しゃすれば、キツと神かみ様さまが言こと靈たまをもつて答こた
へて下くださるさうだが、どうだ一ひとつ瀧たきで身みを淨きよめて來きたのを幸さいひ、神かみ様さまに伺うかがつて見み

やうかい」

淺あさ「いかにもソラ面おも白しろうございませう。ここで乾こ兒ぶんの順じゆん序じよを神かみ様さまに聞きいて定きめさし
てもらひませう。それが公こう平へいで互たがひに怨うら恨みが殘のこらいで宜よろしいからなア」

「それも結構だ。そんなら淺公、お前から一つ神様に願つて見よ」
「ハイ、承知しました」
と言ひながら拍手再拜し、

淺公「惟神昔の神の坐しまさば

示させ給へ吾が願言を

言靈の池と名に負ふ齋場なれば

答へ給はむ吾が言の葉に」

忽ち鏡の池はブクブクと異様な泡を吹き出したりけるに、國照別外一同は早速の感應に襟を正し、片唾を呑んで畏まつてゐる。淺公も小氣味が悪くなつたが、後へ退くわけにも行かず、額から冷汗を流しながら、
「アア有難や辱なや、鏡の池の生神様、侠客の淺公が朝間も早うから、阿呆が足らいで、あられもない事をお願い申しますが、どうぞ、あら立てずに、あらまし

で宜しいから、御神徳をあらはして下さいませ」

鏡の池から、

「アツハハハハ、淺公の淺知恵の阿呆奴、開いた口が塞がらぬワイ」

淺「イイいけ好かない、イイの一番から人を罵倒する神が何處にありますか、ウウウうるさいと思はずに、どうぞ眞面目に私の願ひを聞いて下さい、國さまの乾兒の中において誰が上になるか下になるかと言ふ事を聞かしてもらへばそれで良いのです」

池の中から、

「エエエえらい奴が、上になるのだ、オオオ劣つた奴が下になるのだ。そんな事を力カカ神に聞かずとも、キキキ氣がつきさうなものぢやないか。ククク國照別の國公の乾兒になつた以上は、汝も侠客だ。一つケケケ喧嘩でもして力比べを致し、ココココつかれた奴が乾兒になるのだ。サササ騒ぐには及ばぬ、今の世は言論よりも實力だ。シシシ主義も絲瓜もあつたものぢやないぞ。ススス速かに實行する奴が數多の人氣を、セセセ制するのだ。今に珍の國にはソソソ騒動が起るか

ら、タタタたがひに靈を練つて、生死のチチチ巷にかけまはり、體も魂も人に秀れて、ツツツ強くなつておかねば、テテテ天下は取れぬぞよ。トトト遠い國へ驅落ちいたし、ナナナ何かの事を研究し、天晴れ立派な男伊達となつて、故郷へ、二二二錦を飾り、親に反いて國許を、又又又ぬけて出た贖ひを致し、ネネネ根の國底の國の國民の苦を救ひ、ノノノ長閑な、神代に立直さねばならぬぞよ。ハハハ早く靈を研ぎ、ヒヒヒ一人でも靈の研けた者を集め、勢力をフフフふやして、へへへ平和と人道のために社會に貢獻する、ホホホ方策を定めたが良からう。ママ誠一つが世の寶だ。ミミミ身を粉にいたし、ムムム昔の神の教を遵奉し、メメ名利に耽らず、モモモ諸々の欲に離れ、ヤヤヤ大和魂を研き上げ、イイイ嚴の御靈の教に従つて、ユユユ勇敢に大膽に、エエエ遠慮會釋もなく、ヨヨヨヨウ言はぬワ、世のために活動するのだぞ。ラララ亂世の今日、リリリ倫常は地に落ち、ルルル累卵の危ふき各階級の狀態、レレレ連年の不景氣に人心は惡化し、口口老骨は上に立つて國政を料理し、もはや珍の國の人心は收拾すべからざるに立至つてゐる。ワワワ吾が身の出世ばかり考へて他人の事は、卍卍卍指一本そへ

てやらむといふ悪黨な世の中だ。ウウウ有爲轉變の世の中は、何時變るか知れないぞ。エエ遠國へ行つて、魂を研ぎ、天晴れ、ヨヨ男となつて、ここ三年の内には歸つて來よ。淺公ばかりでない、親分の國州、その他一同の者に氣をつけておく。さうして駒治は國州の一の乾兒と神が定めるぞよ、ブルブルブル
ウーッ

と唸つたきり、後はコトツとも言葉はなくなつてしまつた。

駒治「鏡の池の神様、どうも有難うござります。貴神の仰有ることは良く合ひました。私の思ふ通り言つて下さいました。惟神靈幸倍坐世」

淺「オイ駒州、この神はチツと審神の必要があるぞ。おほかた汝の副守か何かか飛出しゃがつて、あんなこと吐いたのだらう。エー、ケツタクソの悪い、誰が何といつても俺が一の枝だからのう」

駒治「一の枝だから駄目だといふのだよ。松の木でも見よ、一の枝が枯れて二の枝、二の枝が枯れて三の枝が出来、後から後から立派な枝がより以上大きく出でぢやないか。マアともかく神様のおつしやる通りに任しておくのだなア」

國くに 八八八まづ此處こゝで、それほど神様かみさまの神勅しんちよくを疑うたがふのなら、力ちから比べをやつて見みよ。喧譁けんくわさすと互たがひに疵きずがついて可いかぬから、神様かみさまの前まへで角力すまうでもとつて、勝かつ奴やつを一いちの乾兒こぶんにすることにしやう。淺公あさこう、お前まへも得心とくしんだらうなア。お前まへも先夜せんやの事ことを思おもへば餘あまり威張みばれぬぢやないか□。ここに二人ふたりは一番勝負いちばんしょうぶの角力すまうを取り、いよいよ駒治こまはるが國州くにしうの一いちの枝えだと定さだまり、意氣揚々いきやうやうとして山やまを降りくだり蛸取村たことりむらの海岸かいがんに出でた。國照別一行くにてるわけいつかうは蛸取村たことりむらの海岸かいがんに息いきを休やすめながら渺茫べうぼうたる海原うなばらの景色けしきを眺ながめ、愉快ゆくわいげに歌うたつてゐる。

國州くにしう 雲くもか山やまかはた波なみか 渺茫べうぼう千里せんりの鹽しほの波なみ
淺あさましき人間にんげんの眼めをもつて 大西たいせいの洋うみに臨のぞむ
十里じふりに二十里じふり三十里さんじふり わづかに視線しせんは働はたらけども
いかにせむ海うみの彼方あなたに 漂ただよへる國くにの姿すがたの
目めに入いらぬ悲かなしさ 行交ゆきかふ白帆しらほは

花辨はなびらのごとく 波なみのまにまに

清きよく輝かがやく 吾われは今いま

磯邊いそべに立ちて 廣大無邊くわうだいむへんの

天地てんちに跼蹐きよくせきし 人間にんげんの身みの

いと腋ふ甲が斐ひなきを 深く深くふか 歎なげく

アア吾われ今いま 住すみなれし故國ここくを捨すてて

始はじめてこの廣ひろき海洋かいやうの波なみに接せつす 珍うづの國くには廣ひろしといへど

この海原うなばらに及およばむや 大空おほぞらの雲くもと

海原うなばらの波なみと 相接あひせつする所ところ

定さだめて麗うるはしき寶國ほうこくあらむ アア思おもへば思おもへば

微弱びじやくなる人間にんげんの身みよ いとも雄大ゆうだいなる

天地てんちの現象げんしやう 宇宙うちうの攝理せつり

今更いまながら 吾われが胸むねは轟とどろき始はじめぬ

吾われが志こころすヒルの都みやこは 果はたして何處いづこぞ

かの遠き紅の雲の 眞下ならむか

はた又それよりもズツと秀れて 遠き遠き低き雲の

眞下に在るか 思へば

わが前途は 極めて遼遠なり

四人の供人を引きつれて 際限もなき

原野を行く 吾が心の波の高さよ

否胸の騒ぎよ 沈静せしめ給へ

天地の司宰とあれます 國治立大神

荒金の地を領有ぎ給ふ 神素盞鳴大神よ

帆は白し波は高し 空は廣く雲は低し

吾等五人の前途を守らせ給へ

と詠じ終り、國照別は先頭に立ちて、傳來の古き宣傳歌を高唱しながら、テル國街道を北へ北へと進み行く。

(大正一三・一・二四 舊一二・一二・一九 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第四篇 新政復興

第一七章 琴玉(一七六二)

神の恵みに蔭もなき、名さへ目出たきヒルの國の高倉山の本城は、堅磐常磐に都の中央の下津岩根に嚴然と立ち並び、三五の貴の教と共に國家はますます隆昌に赴き、日暮河の清流は清く都の中心を流れて、交通運輸の便宜よく、げに地上の天國と稱へらるるに至つた。

楓別命、清子姫の二人の間に國愛別、清香姫の一男一女があつた。祖先の清彦

が日出神の神徳を受けて、ここにインカ國（日の神の子孫の意）なるものを樹て、衆生崇敬の的となつてゐた。衆生は楓別命を國司と仰ぎ、大師と崇め、親と親しみ、上一致あまり煩はしき法規もなく、極めて平穩無事に榮えてゐた。しかるに常世國より交通機關の發達につれて、種々の惡思想往來し、比類なき天國の瑞祥を現はしたるこの神國も、今はやうやく人心動搖し、個人主義の教發達して、遊惰の者多く現はれ、不良老年、不良中年少年は上下に充ち、義を忘れ利に走り、あたかも常世の國の状態となり、國司を輕んじ、役人を卑しめ、民心惡化して不安の空氣は國內にみちて來た。楓別命、清子姫は朝夕神に祈り、國家の隆昌と衆生の安寧を朝な夕なに國魂の宮に祈願しつつあつた。何時の間にやら世子たるべき國愛別命は姿を隠し、行方不明となつてしまつた。楓別夫婦を始め、秋山別、モリスの兩老は額に青筋をたて、部下の役人を督して國內隈なく搜索すれども、何の手掛りもなかつた。茲においてか止むを得ず、大會議を開いた結果、妹の清香姫をしてヒルの國の世子とする事となつた。

清香姫も兄の命と同様、時勢の日に日にブル階級に非なるを知り、如何にもし

て吾が國家を救はむと肝膽を碎きつつあつた。されども昔氣質の兩親を始め、時勢に眼暗き老臣等は一々清香姫の意見に反對し、いつも用ひられなかつた。清香姫は國家の前途を思ひ泛かべて夜も口々に眼られず、神明に祈つて、國家に蟠まる妖雲を一掃し、新しき天地を開かむと、そのみに心を碎いて、身は日に夜に瘦せ衰ふるばかりであつた。

モリス、秋山別の老臣は城内の評議所に首を鳩めて、心配氣に何事か囁き合つてゐる。

秋山「モリス殿、このごろの如き姫様の御様子、御身は何う思はるかな」

モリス「左様でござる、察するところ、氣の病ではあるまいかとお案じ申してゐるのだ。貴殿のお考へもヤハリ氣病と思はれるだらうな」

「いかに、左様でござらう。今から思ひ出だせば、拙者も貴殿も、紅井姫様、エリナ様について戀におち、終にはシーズン河の難に遭つたといふ歴史もござれば、まして妙齡の美人、戀病を患ひ給ふは當然でござらう。一時も早く適當な御養子を迎へて姫様の御心を慰めねばならうまい。いつも姫様が、吾々に對し、氣

の利かぬ爺だ、氣の利かぬ爺だと仰有るが、今考へてみれば、早く妾に夫を有たせ、氣の利かぬ奴だ……との謎であつたかも知れぬ、戀に苦勞した吾々に似ず實に迂闊な事でござつたワイ」

と兩人は一も二もなく、そんな妙なところへ氣を廻してしまつたのである。

秋山「それにしても、適當な御養子を選まねばなるまいが、露骨に姫様へ伺てみたら何うだらうかな」

モ「マサカ、あなたの夫は誰に致しませうか……などと、あまり失禮で、いふわけにもゆかず、困つたぢやないか」

「しかし、候補者を二三人物色して、寫眞でも撮り、姫様の居間にソツと散らしておき、姫様がお氣に召したら、ソツと机の引出へ收めておかれるだらうし、氣のくはぬ寫眞は、あの御氣象だから、きつと引裂くか墨をぬらつしやるに違ひない。そして姫様の心を瀨踏みした上、遠廻しにかけて探つてみやうでないか、これが老臣たる者の肝腎要の御用だらうと思ふ」

「なるほど、それでは拙者が、部下の相當な家庭に育つた清家連の倅の寫眞を集

めることに致さう。てもさても善い所へ氣がついたものだ。惟神靈幸倍坐世』
と勇み立ち、兩老は日もやうやく下つたので吾が家へ歸りゆく。

話替つて清香姫は城内の庭園を侍女と共に逍遙しながら、ダリヤの花を二つ三つちぎつて手に持ちながら、吾が居間へと歸つて來た。見れば机の上に、なまめかしいハイカラ男の寫眞が四五枚ズラリと竝んでゐる。清香姫は一目見るより侍女を遠ざけ、襖を密閉してよくよく見れば、頑迷固陋派の清家の倅の小照であつた。清香姫は一夕その寫眞を點檢し、寫眞の上から墨黒々と一首の歌を書添へておいた。

『この姿見れば見るほど厭らしき

根底の國の亡者なるらむ』

また一枚の寫眞に、

□ さいこ 槌目鼻をつけたやうな面
今打ちたたき破り捨てたし

また一枚の寫眞に向かひ、

□ 折角の男の子の姿に生れ來て
女に似たるあさましさかな

また一つの寫眞に、

□ どれ見ても誠の魂は一つだに
なしと思へば悲しくなりぬ

最後の寫眞に、

「チトばかり男らしくは思へども

わが背の君となる魂でなし」

と樂書をして状袋に入れ、「秋山別、モリス兩老殿」と表面に記し、手を拍つて

侍女を招んだ。侍女の春子は襖を靜かに押し開け、

「姫様、お招きになりましたのは何か御用でござりますか」

清香「春、お前御苦勞だが、これを持つて秋山別、モリスの所へ届けて下さい。

そして返事を聞くに及ばないから、渡してさへおけばトツと歸つて來るのだよ」

春子は「ハイ、畏まりました」と足早に立つて出でてゆく。後に清香姫は一閒

を密閉し、二絃琴を取出して心靜かに述懐を歌つてゐる。

「妾は夜なきヒルの國 高倉城の國司の娘

清香の姫と生れ來て 兄の命ともろともに

月よ花よと育くまれ 何の不自由も夏の宵

涼しき浴衣を身にまとひ

時雨の川に船遊び

何不自由なき上流の

社會に育ちし身の因果

世の有様も明らか

悟り能はぬ目無鳥

ヒルの御國も未つひに

夜の暗路とならむかと

思へば悲し足乳根の

父の行末母の身の上

救はむために兄妹は

たがひに心を照らし合ひ

世の潮流に従ひて

危ふき國家を救ふべく

神に祈りて待つ内に

嬉しや時の廻り來て

兄に命は逸早く

これの館を脱け給ひ

朝な夕なに霜をふみ

つぶさに世情を嘗め給ふ

吾は孱弱き女子の

兄に代りてただ一人

この神國を守らむと

心を千々に砕けども

昔心の取れやらぬ

父と母との心意氣

秋山別の老臣や

頑迷固陋のモリス等が

清家とかいふ無機物を

此上なき物と珍重し

國の政治は日に月に

日向に氷と衰へて

神の依さしのヒルの國

埋もりゆくこそ悲しけれ

また何者の悪戯にや

吾が心根も白雲の

靈も暗き仇男

怪しき姿を寫し出し

わが文机に竝べおく

醜の企みの恐ろしさ

察するところ秋山別や

モリスの企みし業ならめ

かくなる上は片時も

これの館に住むを得じ

また誘惑の魔神の手に

捉へられては一大事

兄と誓ひし神業は

いつの世にかは成りとげむ

今宵の暗を幸ひに

用意萬端ととのへて

侍女をもつれず只一女

進み行かなむ珍の國

山は嶮しく川深く

嵐は強く雨しげく

魔神の輩多くとも

この世を思ふ真心を

我が三五の大神は
必ず愛でさせ給ひつつ

吾が兄妹の望みをば
必ず立てさせ給ふべし

今宵を限りにこの館
出でゆく吾が身の果敢なさよ

アア足乳根の父上よ
母上御無事にましまして

吾が兄妹が神業の
完成するのを待たせませ

吾がゆく後は嘸やさぞ
頑迷固陋の老臣が

狼狽へ騒ぐ事だらう
その有様が目のあたり

目にちらついて憐れさも
一入深き秋の空

常夜の暗に包まれし
悲しき思ひの浮ぶかな

ああ惟神々々
御靈幸はひましまして

清香の姫が宣り言を
いと平らけく安らけく

遂げさせ給へと願ぎ奉る
旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
動かざらましヒルの國

地揺り山裂け河溢れ
海嘯は高く襲ふとも

下つ岩根に永久に 築き上げたるこの城は

千代に八千代に碎けまじ アアさりながらさりながら

この衆生をば如何にせむ 思想の洪水氾濫し

日暮河の堤防は 將に崩壊せむとする

この惨状を見ながらも なほ泰然と控へゐる

老臣たちの愚かさよ 妾兄妹無かりせば

ヒルの都も衆生も 忽ち修羅と畜生の

地獄の淵に陥らむ 守らせ給へ惟神

神かけ念じ奉る』

と一生懸命に歌つてゐる。そこへ襖の外から秋山別、モリスの兩人一度に「姫様
姫様」と呼ばはつた。姫はあわてて琴の手をやめ、そ知らぬ顔にて、
「その聲は秋山別、モリス殿ではないか、何用か知らないが、襖を開けてお這入
りなさい』

兩人は姫の言葉に渡りに舟と打ち喜び、もみ手しながら、襖をあけて入り來たり、丁寧ていねいに辭儀じぎしながら、何事なにごとか言いひ出ださむとしてモチモチしてゐる。

清香きよか「最前さいぜん、春子はるこに持もたしてやつた品物しなものは、お前まへ、受取うけとつて呉くれただらうな」

秋山あきやま「ハイ、たしかに拜見はいけんいたしました。それについて姫様ひめさまにお伺うかがひ致いたしたいのでございませうが、あの五枚ごまいの寫眞しゃしんはヒルの國くににおいては、地位ちゐといひ門閥もんぱつといひ、

學問がくもんといひ器量きりやうといひ、最も選抜せんぱつされた、ヒルの國くにの五人男ごにんをとこといはれてゐる賢明けんめいな名なを取とつた名物男めいぶつをとこでござります。姫様ひめさまも良い年頃としごろ、あまり露骨ろこつに申まをし上げるも

如何いかがと存ぞんじ、モリスと相談さうだんの上うへソツと寫眞しゃしんを集あつめて御意ぎよを伺うかがつた次第しだいでございませう。しかるに姫様ひめさまは無造作むざうさに、寫眞しゃしんの表おもてに墨すみくろくると歌うたをお書かきになりました

が、一向いっかうその意いを得えませぬので、どうぞ御心みこころの在ある所ところを忌憚きたんなく仰おほせ聞きけ下くださらば、吾々われわれ兩人りやうにんが如何いかやうとも取計とりはからふでござりませう」

清香きよか姫ひめは、何なんといつても今晚こんばんは都合つがふよくこの場ばを逃にげ出ださねばならぬのだから、

あまり怒おこらして警戒けいかいを嚴げんにさせては却かへつて不利益ふりえきと早はやくも合點がてんし、ワザと空呆そらとぼけて、

「ホツホホホ、恥づかしいワ、どうかゆつくり考へさして頂戴、ねえ」

秋山「お考へなさるも結構でございますが、一時も早く結婚問題をきめなくては、吾々老臣の役が濟みませぬ。私が裏に一號二號と番號をつけておきましたから、姫様のお口から、一寸何號だといふ事をおつしやつて下さいませぬか」

清香「さうだなア、一號でもよし、二號でもよし、三號でも四號でも五號でもよしだ、どうでもよしだ、ホホホホ」

モ「モシ姫様、そんなアヤフヤの御返辭をされちや困るぢやありませんか。何號なら何號とハツキリ言つて下さいませ」

「ホホホ、一生（升）の事を定めるのに、五號（合）では足らぬぢやないか、モウ五合ばかり集めて来て下さい、そしたら返辭をするからねえ」

「姫様、これでまだ足りないとい仰有るのですか、これはモウ第一流ですよ。後はモウ第二流になりますから、とてもお氣に入りますませぬワ」

と、まるで小間物屋が店出しをしてるやうな事を言つてゐる。
清香「とも角、今日はあまり咄嗟の事で決まらないから、明日中に、これといふ

のをきめて御返事をする。兩人とも、お父さまお母さまの手前、宜しく頼んだぞや」

秋山別、モリスの兩人は、ヤレ嬉しや、これで一安心と笑顔をつくり追従夕ラ夕ラ機嫌を取りながら、頭を二つ三つ搔いて、
兩人「姫様、左様ならば、一時も早く御返事をお待ち申し上げます」
と言葉を残してスタスタと此場を去つてしまった。清香姫はニタリと笑ひ、
またもや琴を取りよせて思ひのたけを歌ひ始めけり。

(大正一三・一・二四 舊一二・一二・一九 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第一八章 老獺(一七六三)

清香姫「千早振る神代の昔天教の

山より天降り給ひたる

ひでののかみ 日出神の神柱 吾が祖先を導きて

この世を清むる三五の 教を開かせ給ひしゆ

神の御稜威は四方の國 島の崎々磯の隈々

落ちなく漏れなく擴がりて 天の下には曲もなく

靑人草は村肝の 心の中より睦び合ひ

さながら天津御國の天國の 姿映せしヒルの國

インカの裔と崇められ 親と親とは底津根の

堅磐常磐の岩の上に 珍の宮居を築きつつ

珍の柱のいや太く 立榮えたる神柱

諸人仰がぬ者もなし 近き御代より常世國

邪の教蔓りて 天を曇らせ地汚し

青山をば枯山となし 世人の心荒び果て

昔のままの神國は 今や魔國とならむとす

深夜枕を擡げつつ 世の行先を窺へば

ヒルの都みやこに醜鬼しにおにの
棲家すみかありとふ神かみの宣のり

八岐大蛇やまたをろちも狼おほかみも
虎獅子熊とらししくまの猛獸まうじうも

爪つめを隠かくして待まちゐると
御神みかみの御告みつげ聞きくにつけ

胸むねは痛いたみぬ心こころさやぎぬ
アア妾わらはは如何いかにして

國司こくしの御子みこと生うまれしぞ
鄙ひなに育そだちし身みにしあれば

斯かかる惱なやみもあらまじものを
清家せいかとふ忌いまはしき空衣かうころもに包つつまれて

身動みうごきならぬ苦くるしさよ
愍あはれみ給たまへ天地あめつちの神かみ

兄あにに誓ちかひし言ことの葉はを
守まもりて出いづるヒルの城しろ

夜よるにまぎれて山路やまみちを
傳つたひ傳つたひて進すすみ行く

道の行手みちゆくての隈くまも無なく
安やすく守まもらせ給たまへかし

高倉山たかくらやまのこの城しろを
守まもらせ給たまふ氏うぢの神かみ

ヒルの御國みくにを永久とこしへに
領有うしはぎ給たまふ國魂くにたまの神かみの

大御前おほみまへに八雲やくもの小琴をことを弾たんじつつ
心こころすがすがすが搔がきの

絲いとは二筋ふたすぢ眞心まごころは
ただ一筋ひとすぢに祈いのるなり

ああ惟神々々

御靈の恩頼を賜へかし

かく歌つてゐる折りしも、烏羽玉の夜は襲うて來た。清香姫は密かに身の廻りの準備などして子の刻の至るを待った。

城内の燈も消えて四邊は閑寂の氣漂ひ、ただ天井に鼠の走る音がシトシトと幽かに聞こゆるのみであつた。時分はよしと、清香姫は私かに吾が居間を忍び出でむとするところへ、侍女の春子姫は足音を忍ばせ來たり、

姫様、未だお寢みぢやございませぬか

この聲に清香姫はハツと驚きながら、素知らぬ顔して、

あ、そなたは春子姫か、お前まだ寢めないの

ハイ、何だか、今晚に限つて目がさえざえと致しまして、姫様のお身の上氣に

かかり、何だか寢られないのでござりますよ

お前も寢られないかね、妾も何だかチツとも寢めないワ

姫様、歌でも詠んで夜を明しませうか

清香姫は迷惑しながらも、

「妾もやがて眠れるだらうが、しかし一二首歌を詠んで別れませう」

「ハイ、有難うございます」

と春子姫は姫の側近く座を占め、

「高倉の表に立てる鐵門守

そのまなざしの血走りて見えぬ

十五夜の月光のぞく裏門は

いとも静けし風さへもなし」

清香姫は初めて春子姫が、自分が今夜脱け出すことを悟り、裏門から逃げ出せと教へてくれたのだらうと感謝しながら、

「ゆく春の月の光に照らされて

清く香れる梅の初花

匂ふとは誰も白梅の奥深き

谷間にもゆる姿かしこし

と互ひに歌をかはし、清香姫は、

「月の庭園をチツとばかり逍遙して來ますから、春子、そなたはこの琴を弾じて待つてゐて下さい」

と言ひながら裏口へと忍び行く。裏口には蓑笠、手甲脚絆、杖その他一切旅に必要なもの、がチャンと整へてあつた。春子姫は涙を泛かべながら、

「姫様、決して、あなたお一人の旅はさせませぬ、どうぞ御安心なさいませ」と小聲で言へば、清香姫は後振り返り、

「どこへ行くのも神様と二人連れ、氣を揉んで下さるな」と言ひ残り、見つけられては一大事と裏口へ出で、手早く身づくろひをなし、裏

門からソツと脱け出し、馬場の木立の下を潜つて南へ南へと急ぐのであつた。後

に春子姫、二絃琴を執り、隔ての襖に錠をかけて、琴を弾じつつ歌つてゐる。

ここは夜なきヒルの國

ヒルの都の中心地

神の御稜威も高倉山の

岩根に建ちし珍の城

日出神の昔より

三五教の大神を

齋きまつりし珍の城

さはさりながら星移り

月日は流れ行くに連れ

人の心は漸くに

あらぬ方へと移ろひて

世は刈菰と亂れゆく

實に淺ましきこの天地

清めむために皇神の

御心深く悟りまし

若君はじめ姫様の

思ひ切つての鹿島立

思へば思へば吾が涙

淵瀬と流れて止め度なし

この世に神のます限り

若君様や姫君は

太き功を立てまして

やがてはヒルの神柱

救ひの君と仰がれて

これの御國は言ふもさら 高砂洲の端々を

皆その徳に服へて 昔に變るインカの榮え

松も目出たき高砂の 慰と姥との未永く

治まる御代ぞ待たれける ああ惟神々々

皇大神の御恵みに 姫君様の行方をば

何とぞ安く珍の國 兄の命のまします

靈地に無事に送りませ 御側に近く仕へたる

春子の姫が赤心を 捧げて祈り奉る

秋山別、モリスは吾が家に歸つてみたが、何だか胸騒ぎがしてならぬので、
身のの上に變事はなきかと、兩人期せずして、子の刻過に表門を潜つて入來たり、
各自の事務室に入つて監視の役を努めてゐる。姫の居間よりは流暢な琴の音が聞
こえて來た。秋山別、モリス兩人は琴の音を聞いて一まづ安心し、兩人は愉快氣
に聲高らかに談話を始めてゐる。

秋山「モリス殿、この深夜に御老體の貴殿、御苦勞千萬でござる。何か急用でも出來たのでござるかな」

モリス「別にこれといふ急用もなければ、何だか胸騒ぎがいたし、或は城中に姫様の身の上について變事の突發せしに非ずやと、取る物も取り敢ず、夜中ながらも、供をも連れずソツと出て參つた次第でござる。そして貴殿もまた夜陰に御登城になつたのは、何か感ずるところがあつての事でござるかな」

「吾々も貴殿のお考への如く、何だか胸騒ぎが致すので、姫の身の上に変つた事はなきやと心配でならず罷り越したのでござる。然しながら姫のお居間近く伺ひ寄つて、様子を探れば、いと流暢なる琴の音色、ヤレ安心とここまで引返して休息いたしてをるところでござる。どうやら姫様もお氣が召したと見えて、明日の日は待たれてならぬか、一目も寢ずに琴を弾じてゐられるとは、これまでにない事でござる。てもさても喜ばしい瑞祥ではござらぬか」

「いかにもお説の通り吾々も若返つたやうな氣が致すでござる。も一度元の昔の若い身の上になつて見たいやうでござるワイ。アツハハハハ」

□ 時にモリス殿、姫様は何號がお望みであらうかな

□ あの歌によれば、一號二號三號四號は駄目でせう、まづ五號を御採用になるでせう。秋山別殿、お芽出たうござる。貴殿の御子息ではござらぬか

□ なるほど、拙者の倅菊彦も果報者でござるワイ。拙者と貴殿とは當城のお娘子紅井姫様に對し、大變に苦勞を致して、遂にはあの結果、實に若氣の至りとは申しながら、エライ恥ぢをかいたものでござるが、吾が倅は父に勝つて、姫様の御意に叶ふとは、テもさても世の中も變つたものでござるワ、オツホホホホと笑壺に入つてゐる。

一方春子姫は……もはや姫様も落ちのびられたであらう、ヨモヤ追手もかかるまい。サアこれから妾もお後を慕ひ、姫の御身を保護せねばなるまい。照國街道の一筋道、夜明けに間のない寅の刻、グツグツしてはをられない……と足装束を固め、裏門より一散走りに逃げ出した。

城内の洋犬の吠える聲がワウ　ワウ　ワウとしきりに響き來たる。秋山別、モリスはこの聲に耳を澄ませ、

秋山「何時にない犬の泣聲、コリヤ一通りではござるまい。第一、姫様のお身の
上が氣づかほしい」

と言ひながら、姫の居間の前に驅けつけて見ると、琴の音はピタリと止んである。
秋山「姫様、御免」

と言ひながら、隔ての襖をガラリと引開け、覗き見れば豈計らむや、琴の主は藻

脱けの殻、もしや便所ではあるまいかと、捜し廻れども、姫の氣配もせぬ。春子

姫を起して尋ねむかと、春子の居間へ行つて見れば、これもまた藻脱けの殻……

秋山「コリヤ大變だ、然しながらこんな失態を演じながら、國司御夫婦に申し上

げることは出来まい。前には若君を取逃がし、今度また姫君を取逃がしたと言ひ

れては、吾々兩人は皺つ腹を切つて申しわけをするより道はなからう。幸ひまだ

誰も知らぬ内だ。モリス殿、貴殿と兩人がソツと捜さうではござらぬか」

モ「秋山別殿、いかにも左様、吾々の大責任でござれば、城内の人々に分らぬ内、

あまり遠くは参りますまい、搜索いたしませう。表門は人の目に立つ、まづは裏

門より」

と裏門指して急ぎ行く。裏門の戸は無造作に開け放たれ、女の半巾が一つ落ちてゐる。モリスは早くも半巾を拾ひ上げ、夜明前の月光に照らして見れば、春の印がついてゐる。……テツキリこれは春子が姫様と謀し合せ、逐電したに違ひない……と言ひながら、兩人は裏門外の階段をトントントンと下りながら、杖を力に轉けつ輾びつ、馬場の木の茂みを指して追っかけ行く。

(大正一三・一・二四 舊一二・一二・一九 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第十九章 老水(一七六四)

秋山別、モリスの兩老は、先に高砂城の世子國愛別の脱出を氣づかざりし責任を負ひ、惜しくてならぬ地位を表面上、責任を負うて辭任するといつて、辭表を提出し、楓別命より……それには及ばぬ。今後は氣をつけて、國家に忠勤を勵めよ……との、優握なる箴言を辱なうし、やつて胸を撫で下ろし、戀々たる元の地

位に居据り、これで天下太平とタ力をくくつてみたところ、またもや妹君清香姫の思想が何となく異様に感ぜられたので心配でならず、過ちを再びせば、今度こそは切腹してでも申し開きをせなならないと兩老は、夜半にもかかはらず、姫の身邊に注意を拂つてみた。にもかかはらず、月夜に釜をぬかれたやうな驚きに會うて、心も心ならず、こんなことを他の役人に悟られては、自分の地位が危ない、幸ひ夜明けには少しく閒があるのだから、今夜の内に姫の所在を尋ね、ソツと城中へ迎へ入れておかむものと、杖を力に轉けつ輾びつ、裏門口より馬場の木立を縫うて、ウントコ ドツコイ ドツコイと蛙が跳ねたやうなスタイルで、息もせきせき追つかけて行く。

秋山別は足拍子を取りながら歌ふ。

ハアハアウントコ ドツコイシヨ 高倉城の重臣と

世間の奴から敬はれ 最大權威を掌握し

大老の地位にすわりつつ 國愛別の若君に

スツパぬかれてドツコイシヨ 禿げた頭を臺なしに
めしやがれ鼻をねぢられて どうして大老の顔が立つ
是非がないので表向き 進退伺ひ辭職願ひ
ソツとコハゴハ出してみたら 仁慈無限の國司様
決してそれには及ばぬと お下げ下さつた嬉しさよ
ヤツと胸をば撫で下ろし お務め大事と朝晩に
心を配り薬罐に 湯氣を立てつつ見守れば
しばしは無事に過ぎたれど 隙間をねらふ魔の神が
又もや館に現はれて 大事の大事の姫様を
甘言もつて唆し 引ぱり出したに違ひない
まだ夜があけるに間もあれば 一生懸命お行方を
捜しあてずにおくものか オイオイ モリスしつかりせい
今日が命の瀬戸際だ ウントコドツコイ ハアハアハア
喉がひつつき息つまる よい年してからこんな苦勞

なさねばならぬ二人の身ふたりのみ　　ホんに因果いんぐわな生れつきうま

ウントコドツコイ　ドツコイシヨ　　四方しほう八方はつぱうに氣きをつけて

人間にんげんらしい影かげみれば　　取とつつかまへて查しらべあげ

否いや應おういはさず連つれ歸かへり　　ソツと二人ふたりが脂あぶらをば

取とつておかねばこの後のちの　　懲しめし戒めにならないドツコイシヨ

老ろう眼鏡がんきやうが曇くもり出だし　　一いっ寸すん先さきも分わからない

眼鏡めがねをとれば尚なほ見みえぬ　　進しん退たいここに谷きまつた

ウントコドツコイ　ドツコイシヨ　　アイタタツタ木きの株かぶに

足あしをつまづき脛すねむいた　　ウンウンウン　　アア痛いたや

腰こしの骨ほねまでギクギクと　　下くだらぬ小言こごとをいひ出だした

アイタタツタ　　アイタツタ

モリスは倒たふれてゐる秋山あきやま別わけを抱だき起おこし、介抱かいほうしておつては姫ひめの行方ゆくへを見失みうしなふ。

それだと言いつて、みすみす友達ともだちをすてて行くわけにもゆかず、一いっ間けんほど前まへへ走はしつ

てみたり、後へ戻つたり、幾度も進退をしてゐる。

秋山「オイ、モリス殿、何をしてござる。第一線が破るれば、第二線が活動するは兵法の奥義ではござらぬか。拙者にかまはず、トツトと出陣なされ。間髪を入れざるこの場合、早くお出でなされ。この秋山は殿となつて、そこらの木蔭や叢を捜しつつ行くでござらう、サア早く早く」とせき立てられ、

モリス「なるほど、あとは貴殿にお任せ申す　ウントコドツコイ　ドツコイシ

ヨ

昔の罪がめぐり来て　又もや女で苦勞する

おれの戀では無けれども　悪い奴めが飛んで来て

【こい】こいこいと姫様を　つれ出しやがつたに違ひない

ウントコドツコイ　ドツコイシヨ　グヅグヅしてゐちや夜があける

早く所在を捜し出し　とつつかまへて元の鞘

をさめておかねば吾々の

大きな顔は丸潰れ

皺腹切らねばならうまい

すまじきものは宮仕へ

ウントコドツコイ ドツコイシヨ 臍の緒切つて八十年

これだけ辛い事あるか 秋山別の腰拔は

芝生に倒れてウンウンと 脛腰立たぬ浅ましさ

とはいふものの俺だとして もはや呼吸がつづかない

オーイ オーイ姫様よ オーイ オーイ春子姫

そこらに居るなら俺達の 心を推量した上で

あつさり姿を現はせよ オーイ オーイお姫さま

決して叱りはせぬほどに 一號二號三號四號

五號(合)の寫眞氣にくはにや 一升でも二升でも捜します

オーオ オーイお姫さま 雀百まで牡鳥を

忘れぬためしもござります 何ほど頑固なモリスでも

戀には経験持つてゐる あなたの決して不利益な

話はせない村肝の 心を安んじ吾が前に

あつさり現はれ下さんせ 高倉城の大騒動

ヒルの國家の大問題 戀しき父と母上を

見捨てて出るとは不孝ぞや ついでに私も不幸ぞや

フコウ峠の麓まで かからぬ内に姫様を

どうしてもこしても捉まへて 皺面立てねばおくものか

ウントコドツコイ アイタタタ 俺も秋州の二の舞ひだ

木株につまづき向かふ脛を 尖つた石ですりむいた

ウンウンウンウン アイタタタ アイタタタ アイタタタ

と言つたきり、その場に息も細つて倒れてしまつた。

春子姫は少し横側の灌木の茂みに、姫に追ひつき、息を休めてゐたが、この態を見て氣の毒がり、小聲で、

「姫様、今倒れてゐるのはモリスぢやありませんか。アアしておけば、縋れてし

まひませう、介抱して助けてやりませうか」

清香「あ、助けてやらねばならず、助けてやれば妾の目的が立たず、どうしたら可からうかな。みすみす老臣を見殺しにしてまで、逃げ去るわけにもゆかず、困った事が出来たものだ。春子、そなた、そろそろモリスの介抱をしてやって下さい。あまり早く呼び生けると、妾が逃げる間がないから、そこは時を計って緯れないやうに、そろそろ急いで助けてやって下さい。その間に妾は逃げのびますからね」

「なるほど、よいお考へでございます。私がモリスその他の役人が何ほど参りまして、一歩もこれから南へ行かぬやうに、喰ひとめますから御安心なさいませ」
「何分頼みます、左様なら……」

と金剛杖を力に走り出した。夜はガラリと明けて小鳥の聲四方八方より聞こえて来る。春子は、

「姫様、キツと後から参ります」

と聲をかけた。清香姫は二三回うなづきながら、密林の中に姿を隠した。春子は

モリスの側に立寄り見れば、體をピコピコ動かせ、幽かな息をしてゐる。たちまち水筒の水を口に含ませ、背を三つ四つ叩いて、三五の大神を念じ、「一二三四五六七八九十百千萬」と天の數歌を奏上した。五分間ほど経た後、モリスは「ウン」と一聲唸つて、頭をソツと擡げ、老眼を開いて、

「アア秋山別か、よう助けてくれた。何分年がよつて、足が脆いものだから、この通りむごい目に會うたのだ。アア目が眩む、まア暫く此處で息を休めねばなるまい。清香姫様は、こんな無謀な事はなさる筈はないが、侍女の春子の奴、彼奴が張本人だらう。オイ秋山、姫様に小言いふわけにいかぬから、以後の懲戒に、春子の奴を牢屋へでもブチこんで辛い目をさしてやらねばなるまいぞ、ウンウン」

春子はこれを聞くより、モリスの懷からタヲルを取り出し、目からかけて、頭をグツと縛り、モリスの命は大丈夫と、一生懸命に姫の後を尋ねて走り出した。

秋山別は足をチガチガさせながら漸くにしてモリスの側までやつて來た。

「ヤア貴殿はモリス殿ではござらぬか。テもさても大怪我をなさつたとみえる。」

その鉢巻は何でござる」

「この鉢巻は貴殿がさしてくれただものではござらぬか。一命すでに危ふき所、お助け下され、誠に感謝に堪へませぬ。持つべき者は同僚なりけりだ。お蔭で足の痛みも餘程軽減いたした」

「決して、拙者は貴殿を助けたのではない。やうやうのこと、此處まで辿りついたところでござる。察するところ、貴殿は何人かに救はれたのでござらう」

といひながら鉢巻を外す。

「何だか柔かい手だと思つてをつた。さうすると、拙者を助けてくれたのは貴殿ではござらぬか。何はともあれ命拾ひをして結構でござる」

「かう夜が明けてしまへば、搜索の仕方もなし、大老ともあらう者が、供もつれずに、ウロついてをつては却つて疑ひの種、何とか善後策を講じやうではござらぬか」

「左様でござる、職務上捨ておくわけにはいかず、だと申して、かう日の照るのに、吾々が姫の搜索もなりますまい。ともかく間道よりソツと吾が家へ歸る事に

致いたしませう。秋山あきやま別殿わけどの、拙者せつしやと變かはり、貴殿きでんは感慨無量かんがいむりやうでござらうのう。貴殿きでんの御ご賢息けんそく、菊彦殿きくひこどのの掌中しやうちゆうの玉たまを逃にがしたも同様どうやうでござれば、御愁傷ごしうしやうのほど察さつし申まをす。もはや吾々われわれ兩人りやうにんはこれぎり城中じやうちゆうへ出入でいりせない覺悟かくごをきめれば可よいではござらぬか。老先おいさき短い吾々われわれ、何時いつまでも骨董品こつとうひんだ、床とこの置物おきものだと、機械きかい扱あつかひをされて、頑張んばつておつても詰つまり申まをさぬでないか。吾々われわれ兩人りやうにんが退職たいしよくさへすれば、政治せいぢの方針はうしんは悪化あくくわするかも知しれないが、マアともかく人氣にんきが一變いつぺんして、それが却かへつてお國くにの爲ためになるかも知しれませぬぞ、秋山殿あきやまどの如何いかがでござる㊦。一度いちどならず、二度にどまでも大失敗だいしつぱいを重ねかさね、大老たいらうとして、どうしてこれが國司こくしに顔かほが會あはされうぞ。また衆生しゆじやうに對たいしても言いひ譯わけがござらぬ。貴殿きでんのお言葉ことばの通とほり、各自かくじやかた館かたに歸かへり辭表じへうを呈出ていしゆついたし、責任せきにんを明あきらかにするでござらう。皺しわつ腹はらを切きつて切腹せつぷくすれば腹はらは痛いたし、惜をしい命いのちがなくなる道理だうり、何なにほど顯要けんえうの職務しよくむだといつても、命いのちには替かへられ申まをさぬ。アツハハハハ㊦。早速さつそくの御贊成ごさんせい、モリス満足まんぞくでござる。然しかしながら足あしが痛いたんでは、どうする事ことも出來でき申まをさぬ。一町いちちやうばかり後うしろへ返かへせば、そこに谷水たにみづが流ながれてゐる。その水みづでも吞の

んで息をつぎ、ボツボツ歸館致すでござらう。
を取つて下され。どうも苦しうてなり申さぬ』

秋山殿、氣の毒ながら、拙者の手

秋山『老いぬれば人の譏りもしげくなりて

足腰立たぬ今日の苦しさ』

モ『身體はよし老ゆるとも精靈は

いと美はしく若やぎ榮ゆ』

『脛腰も立たぬ身ながら何を言ふ
清麗の水でも呑んで息せよ』

『そらさうだ何ほど元氣に言うたとて
争はれない年の坂路』

『海老腰になつてピンピンはねたとて

かうてくれねば店晒しかな

又しても清香の姫に逃げられて

二人はここに泡を吹くかな』

かく口ずさみながら、漸くにして一町ばかり引き返し、
谷川から流れてくる清
水の溜の側へと着いた。

モ『老の身の靈うるほす清水かな
この清水人の命を救ふらむ』

秋山あきやま 『われもまた清水しみづむすばむ夏の朝なつあさ』

汗あせとなり力ちからともなる清水しみづかな

年としよ寄りの皺しわまで伸のびる清水しみづかな

この上うへは歸かへりて何も岩いは清水しみづ』

水みづ臭くさい姫ひめに逃にげられ清水しみづ呑のむ

春はる子こ姫ひめ吾われを救すくうて逃にげて行く』

『サア早はやく家いへに歸かへらむ二人ふたり連れ』

かく口くちずさみながら兩老りやうらうは杖つゑを力ちからに城しろの馬場ばんばの間道ぬけみちから、力ちからなげにトボトボと歸かへつて行く。

(大正一三・一・二五 舊一二・一二・二〇 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第二〇章 聲援(一七六五)

清香姫、春子姫は夜を日についで、高照山の山麓まで辿りついた。本街道を行くと、追手の虞れがあるので、本街道に添うた山林や野原を忍び忍び進んで行くので、比較的道に暇がとれる。谷川の涼しき木蔭に二人は腰打ちかけて息を休め、述懐を歌つてゐる。

清香 久方の天津御空を傳ひ行く 旭も清きヒルの國
高倉山の天津岩根に宮柱 太しく立てて三五の
皇大神を齋きつつ 日出神の御教を
傳へ傳へて世を救ふ インカの流れ清くして

四方の民草勇みつつ
恵みの露に霑へる

その神國もいつしかに
黄泉國より荒び來る

醜の魔神に犯されて
拂ふすべなき暗の世の

ヒルの御國も夜のごと
暗の帳に包まれて

黑白も分かぬ人心
あが足乳根の父母は

赤き心の紅葉彦
楓の別と次つぎに

赤き心を大前に
捧げまつりて仕へまし

世人を導き給へども
時世に暗き老臣が

心の暗は晴れやらず
ヒルの天地は日に月に

常夜の暗となりはてて
阿鼻叫喚の鬨の聲

春野に咲ける花の香も
梢に囀る鳥の聲も

秋野にすだく蟲の音も
皆亡國の氣配あり

此の世此のまますごしなば
インカの國は忽ちに

修羅の巷と成果てて
わが衆生は根の國や

底そこの國くになる苦くるしみを　うけて亡ほろぶは目まのあたり
時代じだいに目め覺ざめし兄あにの君きみは　われと語かたらひ逸いち早はやく
神かみの御おんため國くにのため　世人よびとのために高倉たかくらの
堅磐かきは常磐ときはの堅城けんじやうを　あとに見み捨すてて天あまさかる
鄙ひなに下くだりて身みと魂たまを　練ねり鍛きたへつつ新あたしく
生うまれ來きたらむ世よの中なかの　柱はしらとならむと雄健をたけびし
神かみに誓約うけひを奉たてまつり　生いでさせ給たまひし健氣けなげさよ
妾わらはは元もとよりなよ竹だけの　力ちからも弱よわき身みなれども
御國みくにを思おもひ道思みちおもふ　雄々ををしき心こころに變かはりなし
すき閒まの風かぜも厭いとひたる　床とこに飾かざりし姫ひめ百合めいりの
たとへ菱しほるる世よなりとも　赤あかき心こころの實みを結むすぶ
時ときを待まちつつ霜しもをふみ　慣なれぬ旅路たびぢをやうやうに
進すすみ來きたりし嬉うれしさよ　アア天地あめつちの大御神おほみかみ
妾わらは兄妹おとどいりやうじにん兩人にんが　清きよけき赤あかき眞ま直すくなる

心こころを諾うべなひ給たまひつつ 今日けふの首途かどでをどこまでも

意義いぎあらしめよ幸さちあらしめよ ヒルの御國みくにの空打そらうち仰あふぎ

高倉山たかくらやまに齋いつきたる 國魂神くにたまがみの御前おんまへに

空行そらゆく雲くもに吾わが心こころのせて通かよひつ願ねぎ奉まつる

ああ惟神かむながらかむながら々々 御靈みたまのふゆを願ねぎまつる

ああ惟神かむながらかむながら々々 御靈みたまの恩賴おんねを願ねぎまつる』

春子姫はるこひめもまた歌うたふ。

㊦ 故里ふるさとの空打そらうち仰あふぎ思おもふかな

吾わが大君おほきみはいかにますかと

ヒルの空打そらうち仰あふぎつつ思おもふかな

モリス秋山あきやま別の身みの上うへ

あの雲は灰色だ さうしてヒルの空から

走つて来る 痛ましや

秋山別モリスの神柱の 青息吐息の

餘煙だらう アア痛ましや灰色の

雲に包まれて ヒルの國の衆生は

さぞ苦しき霧圍氣の中に 世を啣ちて

悩んでゐるだらう 春の野の

百花千花も 牡丹の花の清香姫も

あの灰色の 雲も否みて

こき紫の 雲の漂ふ珍の空へ

逃げて行く氣になつたのだもの アア天津風時津風

南から北へ吹けよ さうして

紫の雲をヒルの空に送れ あの灰色の雲は

常世の國に吹き散らせよ 國愛別の世子の君は

早くも珍うづに坐ましますか　あの珍うづの空そらの雲くもの色いろのめでたさよ
 高照山たかてるやまの空そらには　まだ灰色はひいろがかつた
 淡い雲あはくもが往來ゆききしてゐる　これを思おもへば
 われら二人ふたりの身みの上うへは　まだハツキリと晴はれてゐないだらう
 アア味氣あぢきなき　浮世うきよの雲くもよ
 灰色はひいろの空そらよ　天てんも地ちも
 山やまも河かはも　皆みな灰色はひいろに包つつまれた
 今日けふの景色けしき　國魂くにたまの神かみの
 怒いかりに觸ふれてや　四方よもに怪あやしき雲くもの龍世たつよひめ姫
 惠めぐませ給たまへ　科戸しなどの風かぜを
 起おこさせ給たまへ　清きよめの風かぜを
 『

清香姫きよかひめはまた歌うたふ。

久方の天津御空を打ち仰ぎ

世の行先を歎くわれかな

天も地もみな灰色に包まれて

世は常暗とならむとぞする

いかにせばこの灰雲の晴れぬらむ

わが言靈の力なければ

時津風吹けよ大空に
また地の上に

われ等が上に
陰鬱な

この雰圍氣の何時までも
かからむ限り人草は

次第に次第に亡びなむ
頑迷固陋の獅子の聲

新進氣鋭の馬の聲
北と南に響きつつ

地震となり雷となり
やがては割るるヒルの國

これを思へば片時も
身を安んじて高倉の

山に月をば樂しまむや
花は匂へど

月は照れど
鳥は唄へど

わが目には
わが耳には
地獄の聲と聞こゆ

みな亡國の色と見え
清め澄まして古の

アア痛ましき今の世を
四民平等鳥唄ひ

インカの御代に立直し
ヒルの都を來たせたい

花咲き匂ふ天國の
花のうてなの清香姫

ああ惟神々々
踏みもならはぬ高砂の

木の芽もめぐむ春子姫
踏みもならはぬ高砂の

足を痛むる初旅を
恵ませ給へ天津神

國魂神の御前に
谷の戸出づる鶯の

かよわき聲を張上げて
ひとへに祈り奉る

ひとへに祈り奉る

かかる所へ覆面頭巾の山賊の群十數人、バラバラと現はれ來たり、二人の姿を見て泥棒の親分らしき奴、巨眼を開き、二人を包圍しながら、長刀をズラリと引抜き、

「オイ、女つちよ、その方は何處の何者だ。一寸見たところ、その方の容貌といひ、持物といひ、衣服といひ、普通の民家に生れた女ではあるまい。一伍一什、その方の素性を源九郎の前に白状いたせ。違背に及ばば、この方にも覺悟があるぞ」

清香姫は始めて泥棒に出會つた恐ろしさに、顔の色までかへて慄うてゐる。春子姫は姫の身を庇護ひながら……たとへ泥棒の二十人や三十人押寄せ來たり、兇器を持つて向かふとも、日ごろ鍛へた柔術の奥の手をあらはし、一人も残らず、谷川に投込み、懲らしめてくれむ……と覺悟をきはめながら、そ知らぬ體にて、ワザとおとなしく、兩手をつき、

「ハイ、妾は高倉山を守護いたす天人でございます。大變な偉い權幕で、妾に何かお尋ねのやうでございませうが、人間は、たとへ泥棒にもせよ、禮儀といふもの

がございませう。孱弱かよわき女をんなだと思召おぼしめし、頭あたまから威喝あかつせうとは、チツと男をとこにも似合にあはぬ、御卑怯ごひげふではございませぬか。何なんの御用ごようか存ぞんじませぬが、天地てんちを自由じいう自在じざいにいたす天女てんによでございませぬば、誠まことのことならば何なんでも聞いて上げませう、その代かはり道みちに外はつれたことならば、少すこしも許ゆるしませぬぞ」

とキツパリ言いつてのけた。源九郎げんくらうは度胸どきようの据すわつた春子姫はるこひめの言葉ことばにややド膽ぞもを抜ぬかされたが……タカが知しれた女をんなの二人ふたり、自分じぶんは十數人じふすうにんの命いのち知らずの荒武者あらむしやをつれてゐる。天人てんにんか天女てんによか知らぬが、こんな女をんなに尻しりこ込みしては、今後こんご乾兒こぶんを扱あつかふ上うへにおいて、信用しんようを失墜しつたぬする。あくまでも強壓きやうあつてき的てきに出でたのだから、無理むり押おして押おさへつけてやらむ……と覺悟かくごをきはめ、ワザと居丈高ゐたけだかになり、

「アツハハハハ、吐ぬかしたりな、すべた女をんな、天人てんにんとはまつかな詐いつはり、吾々われわれが恐おそろしさのその場ば遁のがれのテレ隠かくし、左様さやうなことに誑たばかられる源九郎げんくらうさまぢやないぞ。高たか照山てるやまの山寨さんさいに數百人すうひやくにんの手下てしたを引きひつれ、往來ゆききの男女だんぢよを脅おびやかす惡魔あくまの源九郎げんくらうたア俺おれのことだい。四しの五ごの吐ぬかさず、衣類ゐるゐばんたんぬ萬端ばんたんぬ脱ぬいで渡わたすか、さもなくば、源九郎げんくらうの女によう房ばうになるか、サアどうだ。速すみやかに返答へんたふを承うけたまはらう」

春子姫はますます度胸がすわつて来た。清香姫は一生懸命、神の救ひを心中に祈つてゐる。

春子「ホツホホホホ、悪魔の源九郎とやら、よい所へ現はれて来た。妾は其方の出現を待つてゐたのだ。邪魔くさい、木偶の坊を二十や三十連れて来たところで、齒ごたへがせぬ。乾兒を残らず引きつれ、吾が前に竝べてみよ。片つぱしから、窘めてくれむ。悪魔退治に出陣の途中、悪魔の張本源九郎に會ふとは、何たる幸先のよい事だらう。一人二人は面倒だ。源九郎、サア一度にかかれ、天人の神力を現はして、汝が肝を冷しくくれむ」

といふより早く、襷十字にあやどり、優しい顔に後る鉢巻を締め、懐劍の柄に手をかけ身がまへした。この勢ひに清香姫も氣を取直し、またもや赤襷に白鉢巻、懐劍の鞘を拂つて源九郎目懸けて、チリチリとつめよせた。春子姫は十數人の乾兒に目を配り、寄らば斬らむと身構へしてゐる。源九郎が一令の下に、乾兒は二人に向かつて、切りつくることとなつてゐた。しかしながら頭梁の源九郎は二人の姿を見て、やや戀慕の念を起し……何ほど強いといつても、女の二人、片腕に

も足らないが、しかし斯様な、美人をムザムザ殺すのは惜しいものだ、何とかして助きたい……と早くも戀に捉はれてゐる。

春子「源九郎とやら、その方は大言を吐きながら、なぜ孱弱き二人の女に手出しをせぬのか、吾々の威勢に恐れてゐるのか、返答せい。妾は天下を救ふ宣傳使だ。

汝ごときに怖れを抱いて、どうして天人の職が勤まらうぞ、卑怯未練な男だなア

源「ナア二、夕力が女の一人や二人、片腕にも足らねども、あたらし名花を散らす

は惜しいものだ。それゆゑ暫時、根株を切つた鉢植の花だと思つて眺めてゐるの

だ。やがて果敢ない終りを告げるだらうと思へば、いささか同情の涙にくれぬ事

もないわい。テモさても見れば見るほど、美しい……イヤいぢらしいものだワイ

春子「エエ汚らはしい、泥棒の分際として、天人に向かひ、いぢらしいとか、美

しいとか、チツと過言であらうぞ。要らざる繰言申すよりも、旗をまき尾をふつ

て、この場を早く立去れ、エエ汚らはしい、シートツシートツ

と猫でも逐ふやうな大膽不敵の舉動に、源九郎は怒り心頭に達し、

「要らざる殺生はしたくなけれども、モウかうなれば後へは退かれぬ男の意地、

コリヤ女、今に吠面かわかしてみせる、覺悟をいたせ……ヤアヤア乾兒ども、兩人に向かつて斬りつけよ

と下知すれば、心得たりと、十數人の乾兒は二人の女に向かつて、阿修羅王のごとくに迫り來たる。春子姫は一方の手で、清香姫を庇ひながら、力限りに防ぎ戦へども、剛力無雙の敵の襲撃、早くも力盡きて、彼が毒牙にかからむとする危機一髪の場合となつて來た。源九郎は岩上に腰打ちかけ、平然として煙草を熏らしながら、この光景を見下ろしてゐる。清香姫は今や捉へられむとする一刹那、あたりの空氣を振動させて宣傳歌が聞こえて來た。アアこの結果は何うなるであらうか。

(大正一三・一・二五 舊一二・一二・二〇 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第二章 貴遇(一七六六)

桃上彦の昔より 萬古不易の國體を

保ち來たりし珍の國 神の恵みもアルゼンチンの

高砂城の國司の倅 われは國照別司

この世の暗を晴らさむと 雲霧分けて天さかる

市井の巷に身をやつし 下人草の窮状を

窺ひすまし新しき 五六七の御代の柱をば

堅磐常磐に立てむとて 生れついたる仁侠の

引くに退かれぬ男伊達 故郷の空を後にして

踏みもならはぬ旅の空 心を研き肝をねり

醜の大蛇も曲神も 地震雷火の雨も

いつか恐れぬ魂となり 天と地とに蟠まる

八岐大蛇や醜狐 その外百の曲鬼を

言靈劍拔きもちて 言向和し天國の

御園を開く吾が望み 守らせ給へ惟神

神に仕へし吾が父は 既に年老い給へども

新進氣鋭の魂を 深く秘して忍びます

その御心を思ひやり 子としていかで悠々と

遊惰に日をば送らむや 思ひ切つたる今日の旅

日出神の現はれて 開き給ひしヒルの國

ヒルの都に身を隠し 南と北と相應じ

この高砂の天地をば 昔の神代にねぢ直し

神人和合の樂園に 進ませ給へ惟神

龍世の姫の御前に 謹み敬ひ願ぎまつる

旭は照るとも曇るとも 月落ち星は失するとも

神の守りのある限り いかで恐れむ敷島の

大和男子の魂は 金鐵よりも尚堅し

勇めよ勇め乾兒ども 進めや進めヒルの國

高照山は峻しとも 吹き來る嵐は強くとも

道の行方は遠くとも　　いかで怯まむ男伊達
男の中の男よと　　世に謳はれて世を救ふ
これぞ吾等の望みなり　　これぞ吾等の願ひなり
ああ惟神々々　　御靈幸はへましませよ

國照別の國州はじめ駒治、市、馬、淺の一行五人は捺鉢卷をしながら、眞黒の腕を又ツと出し、埃まぶれの毛だらけの脛を引きずりながら、此處までやつて来た。見れば怪しき人の喚き聲、唯事ならじと近寄り見れば、孱弱き二人の女を相手に大の男が詰めかけてゐる。國州は男を賣るは今この時と、赤裸の禪一つとなり、喧譁の中に矢にはに飛び込み、大音聲にて、
「待った待った、この喧譁、俺が預かつた」
と大の字になつて、立ちはだかれば、この聲に何れも二三間ばかり後へ退いて息を休めてゐる。源九郎は冷やかにこれを眺めて、
「オイ、どこの唐變木か知らねいが、俺たちの喧譁に這入つた以上は、みんなごと、

埒をあげるだらうのう。なまじひ挨拶なら、やらねえが良いぞ、みんなごと、甲斐性があるか」

國「アツハハハハ、耄碌ども、確かり聞け。その方等は旅人を掠むる惡逆無道の泥棒ぢやねえか、俺はかう見えても天下の俠客だ。義のためには命を惜しまねえお兄さまだ。泥棒が旅人を掠めてる所へ入りこんで来たのは、仲裁ではねえぞ、懲らしめのためにやつて来たのだ。どうだ、その方を始め一同の奴、改心をいたして眞人間になるか、返答聞かう」

源「ワツハハハハ、蠅螂の空威張奴、そんなおどし文句で驚くやうな源九郎ぢやねえぞ、俺達は人を裸にして、財物を盗ればいいのだ。それを否む奴は、氣の毒ながら命を取つても目的を達するのだ。その方もいらざる空威張りを致すより、赤裸のままトツトと歸れ。いらざるチヨツカイを出すと、氣の毒ながら命がねえぞ」

「ハツハハハハ、盗人猛々しいとはよく言つたものだ、取れるなら取つて見よ」
源九郎は髪を逆立てながら、

「オイ乾兒ども、何を躊躇してゐる。タカが侠客の四人や五人、ばらしてしまへ」と下知すれば、又もや十數人の小盗人は四方八方より切つてかかる。清香姫、春子姫はこれに力を得、前後左右に敵を潛つて、切りたて薙ぎたてる。瞬く間に、十數人の奴は鼻を削がれ、腕をかすられ、足を突かれ、ホウボウの體で算を亂して逃げ出だす。源九郎もこの體を見て、大人氣なくも、高照山の山頂目がけ刀を打ちふりながら、殿を守り、味方を浚へて逃げて行く。國州は追ひかけるも無用と、谷川の水を手に掬うて喉を潤し、身づくろひをしながら、

「オイ駒、どうだつた、チツと泡吹いただらうな」

駒「侠客の喧譁なら喧譁の仕應へもありませんが、何を言つても、一方が泥棒だから險呑でなりませぬワ。マアマアお蔭で吾々一同には怪我がなくて結構でした」
國「泥棒だつて、侠客だつて、喧譁に變りはない。しかしながらお前達も、ここでゆつくり一服するが可い。この姫様は如何して又あんな者と喧譁をなさつたらうかな」

と言ひながら、清香姫の側に寄り、

國「エー姫様、危ねえこつてござえやした。まづお怪我がなくて、お芽出たうございやす。わつちや、國州といつて、珍の國の者、ヒルの國へ行く途中、計らずも泥棒に出會し、一つ目覺しをやつて見ましたが、イヤ早もろい者でござえやした。アツハハハハ」

清香「ハイ有難うございます、危ふい所へお出で下さいまして、こんな嬉しいことはございませぬ。あなたは今、珍の國の國州といふ侠客だと仰有いましたが、そんなら貴方は妾の尋ぬるお方、國照別さまぢやございませぬか」

淺公は側より、

「左様左様、今こそ侠客になつてござるけれど、珍の都のお世繼國照別様でございますよ。用もないのにヒルの都へ行かうとおつしやるので、乾兒の悲しさ已むを得ず従いて來ましたが……へへへこんな別嬪さまがござるので、親分さまもお越しになつたのだな、イヤ分りました、親分さま、一杯買うてもらはにやなりませぬぞ」

國「エ、仕方のない男だなア。これだから口の軽い奴ア、困るといふのだ。チツ

と控へてをらう』

浅「何とマア、親分の愉快さうな顔、そらさうだらう。乾兒の私だつて、愉快でたまらないもの……もし姫さま喜びなさい。あなたが遙ばる慕うて怖い目をして、尋ねて来た三國一の婿さまは、へエー、この親方でございますよ。何をグツグツしてござる、恥づかしいことも何もない、及ばずながら、この浅公が月下氷人となつて握手をさせませう。何と悪うはございますまいがな』

清香「妾はあまりの驚きで何も申し上げることは出来ませぬ。春子姫、お前代つて、あの國さまにお話をして下さいな』

春子「これはこれは危ふい所、お助け下さいまして、厚くお禮を申し上げます。あなたが噂に高き珍の國の國照別様でございますか、存ぜぬ事とて御無禮をいたしました。姫様の仰せに従ひ、妾が代つてお話しを申し上げますが、姫様はお兄様としめし合せ、國家の窮状を救はむとして、色々と畫策を遊ばされ、今またお兄様の密使に依つて……珍の國の國州さまといふ侠客にお前を娶合はしてやらう、さうすればヒルの國を救ふことが出来る……と御通知がございました

ので、取る物も取敢ず此處まで参つたのでございます。果して貴方が國照別様ならば、こんな好都合はございませぬ。これからヒルの國へお伴をして歸りたうございます。どうぞ此儀お聞届けを願ひます」

國「ウン、あなたが國愛別様のお妹御でござつたか。かねがね兄上より貴女の思想も御器量も承つてをりました。實のところは、この國照別もヒルの都を指して來たのは、あなたに會ひたくもあり、また一つ珍の國は國愛別様にお願ひ申して改良していただき、その代りとして拙者がヒルの國を根本的に改革せむと、侠客となつて浮世を忍び下層生活をしながら、回天動地の大業を爲さむと、ここまできやつて参りました。これは願うてもなき互ひの奇遇、然らばこれより姫様のお伴をいたし、ヒルの城下へ参りませう」

これより一行男女七人は堂々として、大道の正中を宣傳歌を唄ひながら、ヒルの都を指して進み行く。淺公は先に立つて、道々宣傳歌を唄ふ。

「テルとカルとの國境

高照山の山麓に

高砂洲たかさごしまで名なも高たかい

大親分おほおやぶんの國くにさまと

あたりを拂はらひ堂々だうだうと

地踏つちふみならし進すすみ來くる

時ときしもあれや谷川たにがはの

傍邊かたへに怪あやしき人ひとの聲こゑ

何事なにごとならむと近寄ちかよれば

豈計あにはからむや雲くもをつく

ばかりのおほ大きな泥棒どろぼうが

長ながい奴やつをば引ひき抜ぬいて

二人ふたりの姫ひめをまん中なかに

前後ぜんご左右さいうから切きりつける

こいつア救すくはにやなるまいと

親分おやぶんさまが赤裸まつばだか

喧譁けんくわの中なかに跳おとり入いり

待まつた待まつたと四股踏しこふめば

さすがの泥棒どろぼう肝きもつぶし

二足ふたあし三足みあし後あとしざり

蜥蜴とかげが缺伸あくびをしたやうに

空そらを仰あふいで呆あきれ顔がほ

親分おやぶんさまの掛合かけあひで

木こつ端泥棒はぢろぼうはことごとく

大切だいじの大切だいじの仕し事ごとをば

あつたら棒ぼうに振ふりながら

手疵てきずを負おうて逃にげて行ゆく

後あとに國照くにてる別わけさまは

ヒルの國くにからやつて來きた

天女てんによのやうな姫ひめ様さまと

二世にせの約束やくそく堅かためつつ　　吾われら乾兒こぶんを引ひきつれて

そんならお前まへの言いふ通とほり　　これからヒルの都路みやちへ

行いつてやらうと嬉うれし氣げに　　いはれた時ときの姫ひめの顔かほ

側そばに見みてゐる俺おれさへも　　何なんだか嬉うれしうなつてきた

オイオイ駒治こまはる市馬いちうまよ　　お前まへは元もとは取締とりしまり

現在げんざい泥棒どろぼうを目めの前まへに　　眺ながめながらに何なんのザマ

コラツと一聲ひとこゑかけもせず　　青あをい面つらして慄ふるうてゐた

こんな取締とりしまりが世よの中なかに　　あると思おもへば衆生しゆじやうも

枕まくらを高たかう寢ねられない　　何どいつ奴こいつも此こいつ奴こいつも腰こしぬ抜けだ

親分おやぶんさまのお光ひかりで　　ここまでお伴ともはしたものの

もしも一人ひとりになつたなら　　キツと泥棒どろぼうにこみわられ

腕かひなの一本いっぽんも擦もぎ取とられ　　ベソをかいたに違ちがひない

ああ惟かむながらかむながら神かむながら々々　　これと思おもへば淺公あさこうは

やつぱり肝きもが太ふといワイ　　サアこれからは淺公あさこうが

親分さまの一の枝

お前は乾兒になるがよい

ウントコドツコイ ドツコイシヨ 天を封じた老木の

竝木の街道を進み行く 吾ら一行は何となく

勝利の都へ行くやうな 涼しい気分になつて来た

谷の流れは涼々と 飛沫の玉を飾りつつ

吾が一行を歓迎し 琴を弾じて待つてゐる

峰の嵐は松柏の 梢を吹いて吾々を

謳歌してゐる勇ましさ ウントコドツコイ ドツコイシヨ

今は侠客渡世だが 親分さまがたつた今

ヒルの都に現はれて 清香の姫の婿となり

國の政治を執られたら 必ず拔擢遊ばして

使うて下さるだるほどに 駒公市公馬公よ

それをば先の樂しみと 思つて俺に從いて来い

前途はいよいよ有望だ 思へば思へば身も魂も

勇みに勇み跳り出す
何ほど坂はきつくとも

何ほど日かげは暑くとも
前途に望みを抱へたる

吾等一行の魂は
火にも焼けない又水に

溺るる事なき大丈夫
大和男子の典型と

未代までも名を揚げて
國の柱となるだらう

アア勇ましや勇ましや
全隊進めいざ進め

勝利の都が近づいた
勝利の都はヒルの國

ああ惟神々々
國魂神の御前に

吾らが前途の幸福を
守らせ給へと願ぎ奉る』

かく代る代る行進歌を唄ひながら、十數日を経た黄昏ごろヒルの都の町末の或る茅屋に着いた。

(大正一三・一・二五 舊一二・一二・二〇 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第二章 有終（一七六七）

國照別一行はヒルの都の町外れの半ば倒れた古家を借つて住み込み、博奕をやめ、自分は青物を擔うて町中を賣り歩き、乾兒は畠を作つて野菜の栽培をやつてゐた。そして清香姫は裁縫炊事などに全力を盡してゐた。春子姫は淺、市、馬、駒治などの乾兒を率ゐて、毎日野良へ出で耕作に従事してゐたが、誰もその素性を知るものはなかつた。

しかるに一年ばかり經つて、ふとした事から清香姫、春子姫がこの町外れの茅屋に賤の女となつて、四五人の男と共に耕作に従事してゐる事が、その筋の耳に入り、秋山別、モリスは職にをるわけにも行かず、一切の地位も名望も抛ちて、老軀を引提げ、耕耘に従事した。そして清香姫に自分の至誠を現はして再び城中に歸つてもらふことにした。

清香姫は國照別と共に城中へ歸り、父楓別命および母の清子姫に對して、自分たち兄妹の意中を露ほども包まず吐露した。兩親も吾が子の至誠に感じ、自分は

退隱して、高倉山の宮に専仕し、清香姫、國照別の意見に従つて、國內に仁惠を行ひ、かつ衆生の意を迎へて、徳政を施し、貧富そのところを得せしめ、上下の障壁を除き、老若男女一般に選舉權を與へた。ここにおいて、すでに擾亂勃發し、國家崩壊せむとする危機一髪の一髮のヒルの天地は、忽ち黎明の新空氣に充ち、地上に天國を實現することとなつた。そして國政を改めて、インカ國の制度を改善し、萬代不易の礎を固め、國照別は選まれて大王となり、ヒルの國家は永遠無窮に、旭の豊榮昇りに榮ゆることとなつた。實に名にし負ふ高砂洲の聖場、高倉山は永久に平和の花香り、鸞鳳空に飛び、迦陵頻伽は春夏秋冬の別ちなく、御代の隆盛を謳ひ、神人和樂して、國內一點の不平も不満もなく、至治太平の瑞祥を味はふこととなつた。ああ惟神靈幸倍坐世。

話代はつて、珍の國にては上下の乖離ますます甚だしく、衆生は猛虎のごとく狂ひ立つて、松若彦、伊佐彦の館を包圍し、各地に殺人強盜出沒し、人心戦々恟々として不安の雲に包まれた。俠客の愛州はじめ岩治別の岩公は、數多の乾兒と共に衆生の中に入つて、天地の道理を説き、やや人心緩和したりといへども、容易

に治まらず、國家は累卵の危ふきに立ちいたつた。また春乃姫、常磐姫は晝夜の別ちなく宣傳に努め、松依別は親爺の貯蓄金を取り出し、貧民窟に持運びなどして、大いに人心の緩和に努めた。されど一旦燃え上つた人心は容易に治まらず、いつ大變事が勃發するか分らなくなつて來た。賢平の力も取締の力も施すに由なきに至つた。加ふるに地震しきりに至り、所々に大火災あり、收拾すべからざる状態となつた。

國依別、末子姫は夜陰にまぎれ城内を抜け出し、數十里を隔てた玉照山の月の宮に立籠もつて、國家の危急を救ふべく、老體ながら祈つてゐた。かかるころへ、ヒルの國の大王國照別は數多の勇み男を引きつれ、珍の國救援のために夜を日について驅けつけた。岩治別は愛州の命により、ヒルの國の國照別に應援を請ふべく、アリナ山の頂上まで登つたところ、ベツタリ國照別の一行に出會し、詳細に珍の國刻下の現状を述べ、國照別も意外の事に驚きながら、一行數百人を指して、駿馬に跨がり進み入る。

四五日の後、國照別は三年振りに再び自分の故國に歸り、珍の都の姿を見た時

は、實に今昔の感に打たれざるを得なかつた。大廈高樓は暴動のために爆破され、富豪の邸宅は焼き拂はれ、至る所に假小屋が建てられ、衆生の悲惨な生活状態が、國照別の仁慈に富める心を痛めた。

國照別は「ヒルの國の大王、珍の國の世子國照別」といふ大旗を風に翻しながら、珍の都の大道を堂々と進み入つた。この旗印を見て衆生は再生の思ひをなし、手にした兇器を投げ捨てて地上に平伏したり。かかる所へ春乃姫、常磐姫は宣傳に窺れたる黒い顔をさらしながら現はれ來たり、國照別の應援を涙と共に感謝する。また國愛別の愛州は數多の乾兒と共に、高砂城の表門に待ち迎へ、國照別を導いて城内深く入つた。松若彦、伊佐彦は今までの地位と爵位を抛ち、衆生の前に丸裸となつて罪を謝した。

これより國照別、春乃姫、愛州の國愛別、岩公の岩治別は評定所に入つて、政治の改革を斷行する事となり、國依別、末子姫を玉照山より迎へ還し、ヒルの國同様の神政を行ひ、愛州の國愛別を妹の春乃姫に娶合はし、民衆に推戴されて國愛別は大王となり、貧富の懸隔を打破し、國民上下の待遇を改善し、世は平安無

事に永遠無窮に治まつた。ああ惟神靈幸倍坐世。

珍の野に村雲起り月も日も

玉照山にかくれけるかな

國愛別神の誠の現はれて

醜の荒びも静まりにけり

霜の朝雪の夕べを凌ぎつつ

春乃の姫の御代に會ふかな

高砂の珍の御國の御柱と

現はれたてる松の常磐木

常磐姫松の操のなかりせば

珍の御國は榮えざらまし

岩治別司の君の眞心に

岩いはより堅かたき國くには立たちぬる

國くに照て別る雲わ押もし分わけて下くだりまし

月つき日ひ輝かがく御み代よとなしぬる

大老たいらうの松まつ若わか彦ひこも魂たましひを

やき直なほしつつ鄙ひなに下くだりぬ

伊佐彦いさひこの古ふるい頭あたまも衆生しゅじやうの

烈はげしき聲こゑに眼まなこさめけり

國くに愛ち別かわ珍うづの眞人まびとは高砂たかさごの

城しろの主あるじとなりにけるかな

春はる乃の姫ひめ國くに愛ち別かわにあひ添そひて

珍うづの御國みくにの花はなとなりぬる

松まつ依より別わけ父ちちの寶たからをあし原はらの

醜草しこくさ村むらに撒まきすてにけり

樽たる乃の姫ひめササデスムスをば患わづらひて

牢屋ひとやの中なかに斃たふれけるかな

國くに依よ別わけ末すゑ子この姫ひめは玉照たまてるの

神かみの御山みやまに永久とほに仕つかへし

惟かむ神ながらの力ちからの現あらはれて

五み六ろ七くの御代みよは豊ゆたかに立たちぬ

この話はなし高砂洲たかさごしまの事ことのみか

その他たの國くににもありさうなこと

天地あめつちのゆり動うごくなる今いまの世よは

心許こころゆるすな何いづれの國くにも

伊豫いよの温泉ゆに病養やまゆしなふその暇ひまに

成なりにけるかなこの物語ものがたり

この書ふみの世よに出いづる日ひを松村まつむらの

握にぎりしペンいさの勇いさましきかな

世よに弘ひろく傳つたへむとして物語ものがたりぬ

高砂洲たかさごしまの雲くもの往來ゆききを。

(大正一三・一・二五 舊一二・一二・二〇 伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)
(昭和一〇・六・二三 王仁校正)

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

靈界物語 第六九卷 山河草木 申の卷

終り